
女装天女！

フィサリア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女装天女！

【Nコード】

N5587Y

【作者名】

フィサリア

【あらすじ】

「女装ヤクザ・幽姫洋一、艶やかに降臨！」

ありえないシチュエーションが織り成す、ハイテンション・スクラップステイックアクションコメディ。

FC2小説に掲載しているものです。

長編ですがサクサク読めるとおもいます。どうか気楽にゆっくりと

お楽しみください。

二代目

全身が楽にうつる大きな鏡の前に洋一は立った。

鏡の中には、何も身に付けていない、生まれたままの自分の姿がある。

洋一の目が、その後ろにあるワードローブへと移動する。

開かれたその扉の中にある、無数の服。多種類のバッグ。

そしてウィッグ。

それらは全て女物だ。

ゴクリとのどが鳴った。

———— 今なら引き返せる、やめろ、やめるんだ！

内なる己の声に、洋一の動きが止まった。

———— なんでヤクザの俺がこんなことに……………

もう一人の自分がため息をつく。

そして洋一は、呼吸をするのも忘れて固まった。

彼は幽姫洋一^{ゆうき・よういち}30歳。

この街の暴力団組織、紅椿一家会長の不肖の息子、つまり跡継ぎである。

関西の指定暴力団に所属する紅椿一家は、全国レベルからいえば吹けば飛ぶようなちっぽけな組だが、この地方都市では、商業・工業・政治と、あらゆる分野に根を張る、裏の実力者だった。

その二代目と言われる洋一は、全身でヤクザを表現している父・義隆とちがって、銀河鉄道の某美人もうつむいて泣き崩れるといわれるくらい美しい眼と身体をした、母・凜にそっくりだった。

そのせいでやたらとモテた。女性はもちろん男にも。

言い寄る女の子たちには愛のキスを。

鼻息を荒げて近寄る男どもには重い拳を、おしみなく与えてきた。そうやって生きているうちに、ヤクザの息子という肩書きも後押しして、いつの間にか立派な次期二代目と言われるようになっていた。持ち前の美貌とは裏腹な洋一の凶暴性と悪事の際の頭のキレも、これからの彼の地位をゆるがないものとしていた。

今夜もこの街で一番のクラブで飲み明かし、お姉さんたちの決しておせいじではない熱い視線に見送られて店を出た洋一は、送るという組の者をムリヤリに帰すと、一人深夜の街を歩き出した。

「二代目、ごくろうさんっス！」

「おつかれさまっス！」

洋一の姿はどこへ行っても目につくらしい。

道行く多種の人々からそんな挨拶が彼に贈られた。

洋一は鷹揚にそれらを受けながら、少し足を早めて通り過ぎてゆく。

盛り場を離れ、シャッターの下りた商店街へと足を踏み入れたところで、洋一は止まってあたりを見回した。

照明に照らされたアーケードの中は、人っ子ひとりおらず、まるで墓場のようにシーンと静まり返っている。

洋一のなで肩がガクリと落ち、弱いため息が口から漏れた。

———— やつと独りになれた………

さつきまでの辺りを睥睨する目と威圧する足取りは消え、美しい大きな瞳をうるませ、長いまつげをしばたかせて、また歩き出した。

———— どうしてこうなっちゃったのかなあ………
うつむいて歩きながら、独りになるといつも考えることをまた心の中で繰り返した。

本当の洋一は、その姿形を同じで、とても繊細で華奢な心の持ち主だった。

学問、スポーツともに優秀。華道、茶道、日本舞踊は師範級。

おまけに絵を描き、詩を作り、歌までうたうという、西洋のルネッサンス人の生まれ変わりのような母に似たのだと洋一は思っている。

むらがる女の子たちに対応しているうちに、無類の女ったらしと噂

されるようになり、いやらしい目で言い寄ってくる男どもの顔面をグーで連打してしりぞけていたら、狂犬と呼ばれるようになった。全てはふりかかってくる火の粉を払うための諸行だったのに、やがて誤解はくつがえせないほど深まり、今ではヤクザである。

洋一は、巖を刀で斬りつけてから、それにエロスを塗りたいくったような父のいやらしい顔を思い出して、ブルルと身を震わせた。

———— イヤだ！絶対にあいづみたいになりたくない！

しかし、彼はヤクザである。

同類、それも組織経営なら親をものぐとさえ言われていた。

少しでもヤクザらしくするために坊主に刈ってある髪————一本当は綺麗で細く明るい栗色の髪だった————をガリガリとかいた。

次に洋一は、アルフォンス・ミュシャ描く女性に、菩薩の知性と微笑みを足して、神が造りたもうたフィギュアを持つ、母の姿を思い浮かべる。

———— ああ、かあさんはやっぱりすごいなあ、カンペキだ・・・

・ なんてあいつなんかと結婚したんだろう

ここで彼の為に断っておくが、洋一はいわゆる世間でいうマザコンではない。

母である凜は、女性と言う偶像を極めた存在ではあったが、立派な社会人でもあり、己の息子に惑溺などせず、また必要以上に彼を精神的に近づけたりはしなかった。

だいたい彼女自身がヤクザの娘だったのである。

だから洋一は純粋に、まるで少女が宝塚の男役に憧れるような気持ちでもって、母のことを敬愛しているだけなのだ。

しかしその母は、洋一が小学校にあがった年に家を去り、そして成人した年に住んでいたマンションの鍵とあるものを置き土産にして、イタリア人のダーリンと共にフィンランドへと旅立ってしまった。

洋一は世界地図を片手に、そのフィンランドを探したこともある。南米のどこか、たしかコーヒー豆の産地だったと思っていたその国は、バルト海に面した北欧の寒い国であった。

緯度、軽度共にまったくちがっていたし、なによりも日本からは遠すぎた。

洋一は涙を飲んで、母に頼るのをやめ、己で生きなければならぬ。まあ実際の話、生きていくのは楽勝でできるのだが、幸せとは程遠いクライムな世界でこれからもやっていくのかと考えると、気がどんどん滅入ってくるのだった。

逃げ場はなく、またやりたいこともない。

ただ行き詰まり感だけがあった。

かといって、盗んだバイクで走り出すようなことはとっくの昔に済ませてあるし、だいたい30でヤクザの自分がまたそれをするわけにはゆかない。

―― どうしてこうなっちゃったかなあ……

結局、この問いに戻ってくるという無限ループの中、洋一が切ないため息をついたとき、アーケードの脇の暗がりから、とつぜん人が飛び出してきた。

いつもの洋一なら母ゆずりの運動神経でヒラリとかわすのだが、落ち込んでため息をついている最中だったので、まともにぶつかってしまった。

急に自分の懷に飛び込んできた人物は、黒いヒラヒラの布で出来たメイド服っぽいものを着ていた。女の子のようだった。

突っ込まれたわき腹が痛かったが、ヤクザモードでないときの彼は優しい。

どなりもせず、彼女の肩をそっとつかむと、

「大丈夫ですか？」と声をかけた。

「ごめんなさい、すみません！」

彼女はうつむいたままでそういうと、するりと洋一から逃れて、アーケードの中を駆け去っていった。

あまりの早業に洋一はしばし、ぼうぜんとしていたが、彼のするどい頭脳はすでにうごき始めていた。

———— あれ・・・ なんか声低くなかったか？ それに肩もえらくがっしりとしてたような・・・

5秒で答えは出た。

———— あっ！ 男！？

正解である。

どうも最近、水面下で秘かに増えてきているという、女装の男、女装子というのに当たったらしい。

夜のドキドキお散歩を愉しんでいる最中に偶然、洋一にぶつかってしまったようだ。

めずらしいものを見た気分で、また歩き出そうとしたとき、洋一の胸・・・・・・・・いや、正確には恥骨の奥あたりがピクリと震えた。

————— なんだ？

思わず足を止めてしまうと、今度は脳内で何かがドクドクと溢れ出してきたのを感じる。

それに同期するように、心臓がコトコトと音をたてはじめた。

————— ど、どうしたっていうんだ、俺！？

訳がわからず目を見開いて立ち尽くした洋一の胸ポケットの中で、存在を誇示するようにチャラッとキーが音をたてた。

それは、母が洋一に残してくれたマンションの部屋のキーだった。

午前3時。

洋一は震える手でキーを取り出すと、ガラスドアを開けて母のマンションのエントランスに足を踏み入れた。

エレベーターで35階へと上がると、扉を開けて部屋に入る。

玄関は暗く冷えていた。

すぐそばにあるスイッチを押して明かりをつける。

短い廊下が、彼をいざなうようにパツとあらわれた。

誰もいないのに、洋一はそつと足を忍ばせて進んでゆく。

2LDKのどこにでもある小洒落た部屋だった。

これまでもここへは何度もやってきていた。

別に母を偲ぶわけではなく、組や彼女たちに知られていない、独りっきりになれる場所だったからだ。

また壁際にあるスイッチを押して照明をつけると、人が住んでいないことが不思議なくらい物がそろった寝室が映し出された。

母・凜はすべてを置いて、この部屋を出て行ったのだった。

理由は知らない。

実は大雑把で豪快なところがある凜なので、面倒で身一つで去ったのかもしれない。

そしてここで洋一は、全裸になって鏡の前に立ってしまったのだった。

長い回想は終わり、現在の洋一である。

自分がなんの目的でこんなことをしているのか、彼はわからなかった。

あの女装子に突き当たってから、憑かれたようにここへやってきて脱いでしまったからだ。

ただ自分が今から何をしようとしているのかは、はっきりとわかっていて。

とまどっているのは、それを認めたくないだけなのだ。

その証拠に洋一の身体はまた動いて、ワードローブの下にある引き出しを開けている。

すーっと音も無く開かれたそこは、下着が咲き乱れるお花畑だった。洋一の脳内に流れ込んでくる、妙な液の分泌量がグンッと跳ね上がった。

そして視線が己の股間へと向けられる。

そこにあるよう洋一自身――彼はそれを「暴れ坊主」と呼んでいた――は、こんなにもドキドキしているのに、なぜかおとなしかった。

――― なんだ？ 俺は心の病なのか！？

そうでもあるし、ないともいえよう。

とまどう心とは別に手は着々とまたうごき始めて、黒いセクシーなランジェリー、俗に言う「ひもパン」を指がつかんで履いてしまう。そして絶対に合う訳がないと思っていた、母のブラが己の胸にピタリとおさまったとき、その動きは、もはや止めることは不可能なほど加速した。

無意識に目は、さきほどの女装子が着ていたようなメイド服を探している。

しかもあるはずがないそれが、なぜかあった。

――― か、かあさん・・・ あなたっていう人は・・・

息子の将来を見通していたかのようなチョイスであった。遠いフィンランドのある方角を洋一は思わず見上げてしまったが、それはまったくの方向違いだった。

フレアなスカートをはき、「入るかな？」と思いながら、そっとブラウスに手を通す。

なんなくそれは体にフィットした。

悪魔のしわざかと思うくらい偶然だったが、親子なんだから他人より体型が近いのは当たり前なので、実は偶然でもなんでもない。ただ洋一は、それを神のしわざだと思った。

何種類も吊るされているウィッグの中から、長いストレートな黒髪のものを選んでかぶる。

完成した己の姿を洋一は、張り裂けそうなくらい鼓動している胸を押えながら、鏡に映してみた。

化粧をしていないのでさすがに違和感があったが、意外と見苦しくない自分が中に見えて、洋一はおどろいた。

学生時代は剣道で鍛えぬき、今でも素振りをかかさないう身体だったが、なぜか筋肉質に見えず、あくまで見た目は華奢でか細いことがこの現象に利を生んでいた。

この身体と顔のせいであらゆる精神的災害を被ってきたのに、皮肉にも今はこんなに自分の胸をときめかせている。

原因と結果である今とのギャップに、洋一は頭がクラクラした。

しばらくそうして自分の姿を見ていたが、ふと今までの緊張がゆるみ、目を鏡からそらせた。

すると、その先にドレッサーが見えた。

——— ああ…… もうそのくらいにしてえ……！
そう胸中で叫んだが、再び火がついた心は許してはくれない。

というか、すでに語尾が女性化している。

高校時代にビジュアルバンドのボーカルを、その時の彼女にムリやりやらされていたので、化粧方法がわかっていたのがまた不幸だった。

母は仕込んだように化粧品もしっかり残していつてくれたので、あっという間に顔ができあがる。

「あっ！」

自分の顔を見て、洋一は声をあげてしまった。

双子とはちよつと言いすぎだが、年の離れた姉妹くらい母に似た姿が鏡の中に見えたからだ。

さっきまであった、ウィッグや服とのズレがかなりなくなってきた。

これは凶悪さをだすために細く剃りあげている眉の効果も大きかった。

洋一は、ヤクザになって初めて、己の職業に感謝した。

適当にファンデーションをたたき、まつ毛をビューラーではねあげ、マスカラを塗ってアイライナーを引いただけなのに、目はぱっちり大きく広がって見え、つけまつ毛など必要ない。

しかもなぜかびしょびしょに濡れている瞳が妖艶なものを発散しており、アイシャドーすらいらなくらいだ。

元々細いフェイスラインがファンデでさらに引き締まり、顔を構成するパーツ一つ一つをうまく演出している。

とどめの唇は、小さな薔薇が咲いているように、輝きを放っていた。

「あ………」

ついに洋一は、あまりに変貌をとげた己の姿に気を失ってあおむけに倒れこんだ。

精神と肉体のコペルニクスの転換に耐え切れなくなったようだった。だが数秒でガバッと起き上がり、またドレッサーの方へと駆け寄ると、完成した自分の姿を見始めた。

いつしか窓の外には朝日が昇り、チュンチュンと雀の鳴く声が入ってきたが、洋一は夢中で気がつかなかった。

シン

「おはようございます！」

「ごくろうさんっス！」

事務所にはいると、ドスの効いた声や妙に甲高い声の合唱が洋一を迎えた。

無言で挨拶を受けながら、個室となっている自分の執務室のドアを開けて中に入ると、どっかりとデスクに陣取った。

結局あのあと、ゴミ回収車の夕焼け小焼けのメロディが聞こえてくるまで、女装して遊んでしまった。

そしてベッドに倒れこんでさっきまで寝ていたのだが、身体がまだだるい。

一晩で五回戦連続でエッチしたようなけだるさである。

一日一回は事務所に顔を出す決まりなのでしかたなくやってきたが、すぐに帰るつもりだった。

一時間ほどここで時間をつぶしてから出ようと考えたところで、また恥骨の辺りがソワソワしはじめた。

うっと思わずうめき声が出て、洋一はあわてて口に手をやる。

————一晩だけって約束だったのに……なんでもまたあそこにいこうとしてるんだ、俺？

いったい誰にそんな約束をしたというのだろう。

しかもこのセリフの40%ぐらいは、すでに女性化している。

洋一の額を脂汗がおおったとき、ドアがコンコンと控えめにノックされた。

瞬時に極道モードへと移行して、低い声で応える。

「おう、はいれ！」

「失礼します」

組事務所に似合わぬ上品な声がして、男がひとり入ってきた。

洋一の付き人兼ボディガードの見習い組員・さえじま 冴島 しん 心だった。

「兄貴、お茶をお持ちいたしました」

そういつて冴島は、馥郁な香り漂うカップを、音も立てずに洋一の目の前に置いた。

「おっ、ありがとよ」

こう答えてカップに手をのぼすと、綺麗な夕日の色をした液体を口にした。

「——— うまい…… やっぱシンの淹れてくれた紅茶は一味ちがう

目を閉じてそう洋一は思った。

シン。

二人だけの時、彼は冴島をそう呼ぶ。

そして冴島も洋一のことを「兄貴」と呼ぶ。

急いでまた断っておかねばならないが、この二人の間にその道の関係はない。

今までの洋一を見ているから「兄貴」という単語が妖しく聞こえてくるだけで、どちらもノーマルである。

いくら言ってもみんな自分のことを「二代目」と呼ぶし、そしていくら頼んでも今までの付き人は紅茶を旨く淹れてくれなかったが、シンは違う。

それに言葉遣いも丁寧に優しく、不必要に語尾のあたりに、ツカスをつけないところも気に入っている。

つまり洋一にはピッタリなのだが、ヤクザにはまったく向いていない男。

それがシンだった。

ちらつと横目で見ると、シンはお盆を小脇にかかえ、執事のように謹厳な表情で、洋一の邪魔にならない位置に立っている。

そこは、彼が何かを言いつけようとしたとき、サッとすぐに一步で前に出てこれるといふ絶妙なポジションだ。

近いのに主の目の妨げにならない、あくまで影として立てる位置。いったいこの男はどこで、こんな技術を学んだというのだろう。

洋一がカップをソーサーに戻すと、すっと新聞が置かれる。

左手を動かすとすぐに煙草が手渡される。

だが、シンは火をつけはしない。

洋一が自分でつけることを好むからだ。

新聞から目を離さずに灰をポンポンしても、床を汚すことは決して無い。

そこには必ず灰皿があるからだ。

おまえはドラえもんか、と突っ込みたくなるほど、すぐに望みをかなえてくれる男。

そう、それが冴島 心であった。

「シン、おまえうちに入って何年になった？」

今日も満足して、洋一は優しくそういった。

「三年になります、兄貴」

はつきりとはしているが、ドスを控えた慇懃な声でシンがこたえる。

「そうか…… ずいぶんともう見習いも長いな」

シンが少しうつむく。

その恥じ入る表情を見て、洋一の胸がチクツと痛んだ。

債権の取立てにいかせれば、相手に同情して自分の有り金を全部投げてくる。

博打を経営させれば、まっとうなギャンブルにしてしまい、利益が上がる。

かといって女をだますことなどできっこないから、スケコマシでも食べていけない。

唯一シンができるヤクザらしいことといえば、ずっとやってきた少林寺拳法でのゴロまきだが、自分から仕掛けるということができない自衛隊のような専守防衛・局地戦闘タイプなので、やっぱりボディガードどまりだ。

まだ21だから今はいいとしても、これから先はヤクザではとても生きてはいけない、そう洋一は考えている。

ゆくゆくは足を洗わせてカタギにしてしまおう、そう彼は決めたが、シンがいなくなった後のことを思うと、つい決心が鈍くなるのだった。

洋一の考えを見透かしたように、シンが心のこもった声でいう。

「私は、兄貴のお世話をずっとこのままさせていただければ、うれしいです」

洋一の目がシンを見た。マジ顔だった。

「・・・・・・すまん」

「いえ、それが本心ですから・・・・・・」

ええやっちゃんあワレ、とニセ関西弁で洋一が心中、感動の嵐に包まれている中、シンは、はにかんだ笑みを浮かべて一礼して部屋を出て行った。

ふーっと鼻から息を抜くと、洋一はデスクの上に新聞を投げた。

「なんだかんだいってもヤクザだもんなあ。シンには似合わないよ

な・・・」

小さくつぶやくと、背中を椅子にあずけた。

本皮を張った椅子が、キュツと小気味よい音をたてて、彼を包み込んだ。

彼女たち

ジリリリリーン！　ジリリリリーン！

事務所をでたところで、洋一のケータイが古風な黒電話の着信音を奏で出した。

でると、彼女たちの一人である真子の声が聞こえてきた。

「洋ちゃん、今夜ヒマあ？」

「おお、あ……」

空いてると言おうとしたとき、ちらりと母の部屋が脳裏をかすめ、口ごもる。

「あーあああ……　あかんわ、仕事やねん」

「ちょっと！　その、あーの間と関西弁はなんなのよ」
甘ったるかった真子の声のオクターブが下がる。

「いや、さっきテレビで観た芸人のしゃべりがうつつちゃって」

「……　なんかあやしいね。洋ちゃんテレビきらいじゃん」
もっと声が低くなった。

バカで能天気なキャバ嬢なのに、こういうカンはずせすぐ働くのか、と洋一は舌打ちしたくなる。

「ほかの女の人とかじゃないでしょうね？」

「バツカ、ちげーよ。なんでそうなるわけ？」

「だって、今日の洋ちゃんなんかいつもとちがう。かわった気がする」

「だから、なにそれ？」

「カン。でもなんかゼツタイかわった！　好きな子できたの？」

意味はまったく違うのだが、変わったところというところは的を得ている。
洋一自身は決して認めないだろうが。

言いよどんた洋一の耳に、殺氣が送り込まれた。

「……今から洋ちゃんの部屋いく。帰るまでずっと待ってるから」

うっ、とうめき声がでそうになって、洋一はあわててケータイを遠ざけた。

顔と身体は超一流だが、頭の中がお花畑の真子は、とても嫉妬深く、一度うたがいをもったことは全て明らかにしなければ、延々とそれを言い続けるのである。

なので、ぜひと今は会いたくなかった。

—— や、ヤバイ！部屋に帰れないとなると、あの部屋にずっといなきゃいけない

そうになると、もうこちら側へは二度と戻ってこれない気がして、洋一はぞくつとした。

それにいつまでもシンの送迎を断るわけにもいかないから、マンシヨンの存在も組にバレてしまう。

まだ初秋だというのに、まるでサウナに入っているように汗がドツと吹き出てシャツを張り付かせた。

「あはははは。まったくなくないつてんだよ、おまえ。ちげーってば」力なく笑いながら、洋一は考えた。

とりあえず今夜は部屋に帰って真子の誤解をとこうか。

しかし、妙にカンだけはいいいあの娘は、自分の変化の理由を察知してしまうかもしれない。

そうなると破滅だ。

「わ、わかった！ちょい仕事まで時間あつから、今から会おうぜ」
「……」

「なんだよ、まだうたがってんの？しょうがねえなあ……じゃ、

これから信じられるようにしてやるよ」

これから・・・の後に続くセリフに艶をもたせて、洋一はケータイに吹き込んだ。

力技で行く気だ。

真子は野生児だけにエッチが好きだった。

「あ・・・じゃあいまからいつものホテルのラウンジいくね」

真子の声が一瞬で甘いものに戻った。

成功である。

洋一はニヤリと笑うとガッツポーズを決めた。

「おお、早くこいよー。あと、シャワーは浴びずに、な」

「イヤーン、洋ちゃんのエッチ！」

エッチはてめえだろうが、と心の中で突っ込んでおいてから、洋一は二言三言はなしてパチンとケータイを閉じた。

「兄貴、お車出しましょうか？」

急に耳元でシンの声がして、さすがの洋一もびっくりして、ヒッと悲鳴をあげて飛びのいた。

「申し訳ありません・・・ おどろかせてしまって」

「し、シン！ おまえ気配消しすぎだって！」

「失礼しました。お電話の邪魔かと思って控えておりましたので」

シンはそういつて軽く頭をさげた。どことなくいつもより慇懃無礼な感じがした。

その仕草をみて洋一はハッとした。

「――― こいつ、電話の相手が真子ってことも、その内容もわかってやがる！」

そう気がつくと、さすがに気味が悪くなった。

「車を回してきますから、少しお待ちください」

くるりと優雅にターンして、足早に去ってゆくシンの背中を見つめながら洋一は、「きつとシンは忍者の末裔かなんかに違いない」そう真剣に思うのだった。

洋一のテクニックをもってしても、真子を納得させるのに3時間もかかってしまった。

セックスは嫌いではなかったが、同年代の男より数多くこなしてきたし、また様々なシチュエーションもお試し済みなので、最近ではあまり高かぶらなくなっていた。

疲れた顔でホテルを出た洋一は、シンの運転するジャガーに乗り込むと、ふうーっと息を天井へと吹きあげた。

「兄貴、どちらまで？」

ハンドルを握って、まっすぐに背を伸ばして座っていたシンが、そうたずねてくる。

洋一は考えた。

息も絶え絶えで、ベッドに横になったまま真子が言ったセリフがよみがえる。

「今夜、洋ちゃんとか泊まる。しばらく部屋にいるから」

彼女がそう言ったということは、洋一の作戦はミッシェンコンプとはいっていかないらしい。

今夜部屋に戻らなかったら、真子は更に疑いをつのらせるだろう。

彼女一筋、と言うわけではまったくない洋一だが、長年染み付いたクセで、女性を泣かせるのは嫌いだった。

まあ、本人は気がついていないだけで、河原の石の数ほど泣かせてきているのだが。

いつも悪気の無い加害者と言うこのタチのよくない男は、さらに考

える。

「――― そもそなんで俺は、自分の部屋に帰りたくなくってイライラしてんだ？」

答えはすでにでている。

目をそらせた事実ではあったが、母の部屋に行きたいのだ。もう一つ突っ込んで言えば、女装して遊びたいのだ。

そこまで考えて、恥ずかしさで顔がボワンと赤くなり、また恥骨のあたりもムズムズとしてきはじめた。

洋一はうつむくと、爪を噛んでそれに耐えた。

「……兄貴？ どうかさいましたか？」

ずっと無言でいる洋一を心配したシンが声をかけるが、耳には全然とどいてはいない。

行きたい。だけど行けない。

出ている二つの結論の狭間で、洋一の心は揺れにゆれている。

「――― 兄貴、真子さんとなにかあったのですが……」

あんなに苦しそうな顔になってしまわれて

洋一の揺れがシンにも乗り移ったのか、兄貴の事ならなんでもわかる、そう強く思っていた心が揺らぎ始めて、彼も苦渋に満ちた顔になる。

シンはあるいは真子以上に洋一にたずねたかったが、いらぬことを聞いて兄貴を苦しめてはならぬと、じっと耐えて待った。

この男は昭和以前に、しかも女性として生まれてくれば良き妻、そして良き母として立派であっただろう。

だが現実には、男でヤクザ見習いなのだ。

そんなシンの存在などすっかり忘れて、じりじりと洋一は考え込んでいたが、やがて理性が勝って、毅然と顔を上げて命令した。

「シン、部屋に帰る。車を出せ」

「わかりました」

車体を沈みこませず、するりとジャガーはすべり出すと、ホテルのエントランスから車道へと走り出していった。

「兄貴、降りずにしばらくお待ちください」

洋一の住むマンションの駐車場でジャガーが止まり、外へ出ようとしたら、シンがそういった。

「なんだ、妙な野郎でもいるのか？」

ドンパチなど数年に一度あるかないかの、平和な街の暴力団だ。

ヒットマンなどいるはずもなかったが、いちおう職業柄そういつてみた。

だが本当は、少しヤクザらしいことを口にしてみたただけである。

シンは何もこたえず、自分の唇に人差し指を立てて洋一に黙っているようにジェスチュアすると、さっとジャガーを降りて猫のように階段へと消えてしまった。

いぶかしく思いながら煙草をふかしていると、すぐに帰って洋一にささやいた。

「真子さんと綾乃ねえさんが部屋の前で言い争ってます。どうやら鉢合わせしてしまったようで。いま上がられると不測の事態になるかと思いますので、ここは離れましょう」

この街一番の高級クラブ「セブンシーズ」のN01ホステス綾乃の名前を聞いて、洋一がひるむ。

「―― あいつは物分りはいいが、浮気は許さないやつだ。血の雨が降る……」

「どうしましょう？ 水音さまのところにでもまいりましょうか？」大学の講師をしている水音の名前に洋一は、今度は首を横に振る。

「いや、あいつは今イグアナの研究で忙しいはずだ。邪魔しちゃならねえ」

「……さすがです、兄貴」

彼女同士を激突させておいて、さすがもなにもないはずなのに、シンはそうやって洋一をほめた。

「それではどこか部屋でもとりましょうか？」

そうやって洋一の顔を見たシンが、あっとおどろいた。

「―― あ、兄貴が笑ってらっしゃる！」

洋一自身も気がついていなかったし、またシン以外の者ではわからないくらいだったが、微妙に彼は笑っていた。

あの部屋に行く理由ができた喜びが、隠し切れないものとなって出てしまったのだ。

おどろきを表情に出さぬように苦心しながら、シンは洋一の言葉を待った。

「おまえはここで帰れ」

「はっ？」

「俺を降ろして帰れ」

「兄貴……」

逃げずに二人の誤解を解こうとしている、そう思ったシンは、やっ

ぱり兄貴は立派なお人だと感動する。

「それではどうかご無事で。何かありましたらすぐに連絡をください。事後処理用の道具を用意して事務所で待機していますから」
洋一のことになるとおかしくなるこの男は、物騒なことをさらりと言うと、きっちり90。の礼をしてからジャガーに乗って去った。

車が完全に視界から消えた後、さらに10分待ってから通りに出て確認して、洋一は足早に自分のマンションから立ち去った。

お散歩

その夜、母のマンションに來た洋一は、昨日とは別のメイド服を着て鏡の前に立っていた。

昨夜は黒。

そして今夜は黒を基調に白いエプロンが強調された、本格英国風ハウスメイドであった。

―――― 母さん…… なぜあなたはこんな物を持っていたんですか？

10年前といえば、東京は秋葉原でようやくメイドブームが隆盛し始めた頃だろう。

なのに凜はこの地方都市に住みながら、何ゆえこんな代物を、またどこで手に入れたというのだろう。

自分の知らなかった母の一面に洋一は、マリワナ海溝をダイブしてのぞいたような戦慄を感じて身を震わせた。

だが、何者も恐れる必要の無いヤグザの彼を、それ以上にビビらせていたのは、内なる自分からのメッセージであった。

―――― 出ちゃえ…… そのままの格好でお外を散歩しちゃえっ！

内なる者は、彼の脳内にダイレクトにそう語りかける。

あの日から自分の中に魔性が宿ってしまった、そう洋一は感じていた。

そいつが耳をふさいでも、目をつぶっても、ずっとささやきかけてくるのだ。

―――― 絶対にバレないってっ。夜だし、コスもメイクもカン

ペキだし！

なぜか内なる魔性の声は、うら若い女性の声であった。

それはさておき。

あくまで自分基準だったが、割とよく似合っているのもまた事実。それに、なにより外へ出たいという欲望は、檻から出された獣のように凶暴で押しとどめようが無い。

理性と言うか細い手綱が切れるのは、もはや時間の問題であった。

洋一はなんとか気を静めようと、キッチンにあるバーカウンターから無造作に酒瓶を選んでつかみ取ると、そのまま口をつけて一気に飲んだ。

そしてその瞬間に豪快に吐き出した。

洋一の口は、まるで農家のスプリングラーのように、アルコールを霧と化して部屋中に撒き散らす。

「ゴホ、グホ、ゲホ、グハハハッ」

あらゆる擬音を並べながら、咳き込んで、床に膝をついて苦しむ。手放されて転がった酒瓶のラベルには、「スピリタス」と書いてある。

それはアルコール度数96°。と言うウォッカであった。

もはや酒ではないと思われるそれを、吐き出したとは言え、ボトル半分は一度胃の中に納めてしまっている。

おまけに今日は、シンの淹れてくれた紅茶以外の物は何一つ口にしていはいない。

すぐに強烈な酔いが全身に回ってきた。

洋一は腰が抜けてしまい、そのまま床にへたりこんだ。

「あ・・・あははははははっ」

女装の快感にアルコールの多幸福感が加わって、彼はヘラヘラと笑い出す。

お出かけストップ作戦はこれで成功かと思われた。

——— この調子で酔いつぶれてしまえ！

メイド洋一は、あらゆる酒を棚から出してきてグラスに注ぐと、とっかえひっかえ飲み始めた。

バーボン、ラム、ウイスキー。焼酎に泡盛、紹興酒。

凜のアルコールギャラリーは、場末のバーなら軽くしのいでしまうくらいのラインナップだった。

そうこうする内に、やがてアイライナーでパキッと決まっていた目がとろーりと緩み、シャドウを塗ったまぶたが下がってくる。

そうになると、今まで涼しげだった瞳が、なんだかエロティックなものへと変化してきたように洋一には思えてきた。

なんとこの男は、小さな手鏡を手に、己の顔を肴に酒を飲んでいるのである。

わずか二日という短い期間で、洋一は完全無欠の変態さんと化してしまっていた。

「う・うふふふ・・・あははは」

よかれと思ってやったアルコールで撃沈作戦は、別の効果を表し始めていた。

ドキドキを落ち着けはしたが、同時に理性をも眠らせてしまっていたのだ。

なぜなら、笑い声がすでに女性化してきている。

「行っちゃおっか？」

心の中でつぶやいたつもりが声に出ていた。
もう完全に染まってしまっている。

「行っちゃえーっ！」

内なる魔性の声も、言葉となって口から出た。

洋一はフラフラと立ち上がると、揺れながら玄関へと歩き、豪華な彫刻の施されたシューズボックスを開いた。

ずらりと並ぶ靴の中から、茶色い編み上げブーツを取り出して足に突っ込んだ。

お約束のようにそれはピタリと彼の足に収まる。

もう縛るものなどどこにも無い。

洋一はドアを勢いよく開けると、羽ばたくような足取りで、部屋を出て行ってしまった。

午前2時の夜の街。

繁華街から少しだけ離れた通りを、ぼくぼくと行くメイドさんが一人。

左手にシェリーの瓶を持ち、楽しげにハミングしながら、満面の笑顔で歩いている。

夜もふけたとはいえ、そこは街の中心地。人っ子一人いないわけではない。

薄暗いネオンの下を、大手を振って行進するメイドの姿は人目を惹いた。

ある者はヒューッと口笛を吹いて感嘆し、またある人はおおっと酒臭いため息をついた、

そんな人々の視線などお構いなしで、かっぽかっぽとブーツを鳴らして、紅椿一家の二代目・メイド洋一が行く。

「うふふ、楽しいわぁ、愉快だわぁ、幸せだわぁ」

まったく客観性のない感想を口にしながら、にこにここと笑い続けて

いる。

そうやって裏通りを歩くうちに、ふと脇を見ると、震えながら店の残りの酒を探している、老いたホームレスの姿が目映った。

「おじいさん、これを差し上げましょう」

笑顔で洋一は手に持っていたシェリーを押し付けると、おどろく老人を後にしてまた歩き出す。

すると今度は、小さな居酒屋の店先で、数人の若者が一人のおじさんをボコっている光景が見えた。

「ダメですよー、そんなに大勢で蹴ったりしちゃ。加減なさい、かげん」

「あア？なんだよねえちゃん。ヤっちまうぞコラ！」

凄む男の顔面に綺麗な前蹴りが入り、何かが碎けるイヤな音がした。

「うわぁ！なにこいつ！？」「ああ・・・見えた、黒いの・・・」

残っていた二人にも、それぞれ回し蹴りと裏拳がご馳走された。

「う、早い！・・・」「おおっ！今度はヒラヒラが・・・」

その言葉を最後に、二人は崩れ落ちた。

ボコられて丸まっていた会社員Aさん（45歳・課長）は、笑顔で三人を秒殺してしまったメイドさんを唾然とした顔で見ていたが、彼女がくるりとこちらを向いたので、本能のままに逃走した。

「メリメリっていったねー、あの子の顔・・・うふふ」

恐い事を可愛くいつてからまた歩き出す。

今度は妖しいネオンが点るバーの前に、原型がわからなくなるくらいまで化粧をした少女たちがいた。

職業上のクセで、じーっと目を見ながら通り過ぎようとした洋一の背中に、剣呑な声が降りかかった。

「ちよい待てよおまえ！なにジロジロ見てんだよ」

振り返って蹴りの軸足を決めたところで、彼の足が止まった。

ニセフェミニストな性格がよみがえって、女性に蹴りを入れることを阻止したらしい。

少し考えてから、ひょいっと服の両袖をつまんだ。

一瞬の内に、闇にキラリと光る細長い刃物が二本あらわれた。

それを見てひるむ少女たちの前で、小さく洋一の左手が動いた。

並んで立つ少女たちの間を縫って、真後ろにあったバーのサインポールに刃物が突き立つ。

「こ、こいつなんかヤバイ！」

笑顔で超絶テクを見せたメイドに恐れをなし、彼女たちはワーツと逃げ出した。

可愛く手を振ってそれを見送ってから、サインポールに刺さった刃物を抜いて袖の中にしまうと、洋一はまた歩き出した。

「フンフンフン♪ あはははっ」

楽しくって笑いが止まらない。こんな気分を味わうのは初めてのことだ。

危険なメイドの洋一は、そう思いながら手を振ってトコトコと歩いてゆく。

その後姿を、路地裏を横切っていた黒い猫が、不思議そうな目で見ていた。

いつの間にか裏通りを出て、車の走る国道脇の歩道を洋一は歩いていた。

走る車のライトで照らされて、さっきよりその姿がよく見える。

ひたすら破滅への道に行く彼の頭の中には、今の自分に対する違和

感や見られることへの恐怖は微塵も無い。

そうやって歩いている内に、後ろの方からハデなバイクや車に乗った、地方にしか生息しない人たちが現れた。

ゆっくりと蛇行しながら走る彼らの内の一人が、洋一の姿を目に捉えた。

「あ、メイドがいる！」「うひょー！エロいぞこのやろうっ」「おねーさん！俺らと遊んで」

欲望丸出しのセリフに、洋一が笑顔で手を振って答える。

その仕草が、彼らの中に暗いものを沸き起こさせた。

キーツとブレーキ音を響かせてバイクと車が止まり、全員が洋一の方へと輪を作ってやってくる。

「メイドさん、ダメだよ、こんな夜中にそんなかつこうで歩いてちゃ」

「そうそう、ヘンなことされちまうよー」

おまえらが今からやるんだろうが、と突っ込みたくなるくらい分かりやすいセリフだ。

なのに、なんのことだかわからないという顔でしばらく洋一は考えていたが、やがて大きくうなづくと、サッと男たちの間を駆け抜けた。

「あ、逃がすな！」

振り返って追いかけようとした男たちの前で洋一は立ち止まると、道に止めてあったバイクや車のキーを片っ端から抜いて、「えいっ！」と叫んでビルの谷間へと放り投げた。

男たちは、えっ？という顔をしていたが、やがてそれぞれキレた顔つきになって飛びかかってきた。

右手で一発、左手で連続二発で三人を沈めると、くるりと身をひるがえして洋一は逃げだす。

長年の経験で、多勢を相手にするやり方を、忠実に身体は実行していた。

―――― 残りは6人ねっ

だが心中のセリフは女性のままだ。

初めて履いたヒールの高いブーツにもかかわらず、洋一の足は軽く男たちを引き離す。

ちらっと振り返って、少し彼らがバラけてきたのを確認すると、すばやくターンして、先頭の男のみぞおちに手のひらを叩き込んだ。次の男は木刀を持っていた。

上から襲ってきたそれをステップでかわし、ブーツで踏んづけてから膝蹴りを顎にお見舞いする。

木刀があればもう無敵だった。

「あっはははははは！」

甲高い声で笑いながら洋一が、うっと手を動かすたびに、男たちは一人づつ倒れてゆき、誰も自分に近づけない。

恥骨の奥の痺れに熱い何かが加わり、そこから背筋へと駆け上がった。電流のような気持よさに脳が麻痺した。

アドレナリンと女性ホルモンが全身を駆けめぐり、不思議なエクスタシーをもたらして洋一を震えさせた。

歩道には、いつの間にか何人もの野次馬が集まり、口々に何かを言い交わしながら自分を見ている。

ドクン。

大きな音をたてて何かが流れ込んでくるのを感じた。

それは、眩暈がしそうなほどの快感の液体。

―――― あ・・ なんかしそう、これ・・・・・・

その時、辺りに無粋な男の声が響いた。

「コラーツ！　うちの事務所の前でなにさわいどんじゃ！」

叫び声がした後ろのビルの中から、数人の男が駆け下りてくるのが見えた。

———— あっ、シン！

その中の一人を見て、洋一は正気に戻った。

逃げ回っている内に、どうやら自分の組の前で暴れていたらしい。木刀を投げ捨てると、洋一はダーツと走って野次馬の中に突っ込んだ。

「すっげえ！　メイドさん、カッコイイ！」　「おねえちゃんやるなあ」
「顔見せて！」

見物人の中をうつむいて駆ける彼の背中に、そんな様々な声が降りかかる。

———— やっべえ！　とんでもねえことしちゃった
男にすっかり戻って深く後悔したが、すでに遅い。

スカートをひるがえして夜の街を駆け去る洋一は知らなかったが、今夜、彼は伝説の扉を開けてしまっていたのだった。

起動

どこかで電話が鳴っている。

——— うるせー、誰か出るよ早く！

眠りの中を浮上しながら、洋一はそう思っとうなるが、電話の音は止まらない。

——— 誰もいないのか？ 真子、綾乃、水音、出てくれ。
・・・・シン。おいシン、出る！

そこで飛び起きた。身体中が痛い。

どうやら床の上で寝てしまったらしかった。

座り込んでぼんやりと首を回した先に鏡があつて、その中をのぞいた時、洋一はカッと目を見開いた。

長い黒髪に薔薇色のリップ。

昨日の記憶が音をたてて流れ込んでくる。

起き抜けだったが、頭はすばやく事態を把握していた。
ケータイを探し出すと、ボタンを押して耳に当てる。

「兄貴、おはようございます。今どちらですか？」

爽やかなシンの声が鼓膜に流れ込み、昨夜の彼とのニアミスがまざまざとよみがえってきて、洋一は顔を真っ赤にした。

「・・・兄貴？ 具合でも悪いんですか？ すぐに迎えに行きますから、今いる場所を・・・」

「大丈夫だ、くるな！」

思わずそう叫んでしまつてから、うつと言葉に詰まる。

いらぬことを口走ってしまったと、死ぬほど後悔したがもう遅い。

はたしてシンは、己の兄貴の異変を的確に察知して、声をひそめて聞いてくる。

「……わかりました。大丈夫です、誰にも言いませんから。で、新しい彼女のところですか？」

「ま、まあそんなとこだ」

「では秘密にしておきますので場所を……」

「それはダメだ！」

「えっ？」

「あ、いや……この人はカタギの娘さんでな、ヤクザの俺が迷惑をかけるわけにはいかねえんだ」

「……兄貴。真子さんや綾乃姉さんも一応カタギですよ。水音さんなんか大学の先生ですし」

「バカヤロウ！事情があるんだよ、事情が」

「ですが、二代目の居場所も知らないでは、組に顔向けできません
そう言われてもこっちも困る。

墓穴掘りまくりだったが、なんとか誤魔化そうと洋一は必死になった。

だが、シンの執事的とも言えるカンの方が早かった。

「兄貴……彼女とかではなくて、何か妙なことになるんじゃないですか？」

彼が重要な事をたずねてくる時の、控えてはいるがうむを言わせない強い口調である。

「え、妙なことって？」

「病気とか」

おしい。半分くらい当たっている。だがその言葉に洋一は蒼ざめた。なんと鋭い男なんだと舌を巻くが、ここは認めるわけには行かない。

「いや、元気元気。ちょっと二日酔いだけど」

「何か心配事でもあるんじゃないですか？」

「ないってそれ。ほら、仕事も順調でトラブルとかもないし」

「そうじゃなくって。プライベートとかで」

「充実してるよ。それ、なんていうの、リア充ってやつ？あれだし」

「それにしても声が微妙に震えておられますが……」
おまえは刑事か、と叫びたいくらいのカンと追及だったが、じつと洋一は耐えた。

―――― シンには使いたくなかったが…… しかたがねえ、
二代目パワーで行くしかない
ドスの効いた声で言った。

「おう、シン。てめえ二代目の言うことうたがってんのか？四の五のいわずに言うこと聞けや！」

「………申し訳ありません」

「今から事務所に行く。おまえはそこで待ってろ」

わかりました、と悲しそうな声でこたえたシンに胸がチクリと痛んだが、こればかりはしかたがない。

洋一はケータイを切ると、バスルームに飛び込んでメイクを落としてシャワーを浴び、出かける支度をしてマンションを後にした。

すっかり落ちてしまった太陽に背を照らされながら、洋一が事務所に入っていったのは午後5時だった。

シンと顔を合わせるのは気まづかったが、そこは彼も付き人。
しかも超一流なので、表面上はいつもと変わらずに洋一に対して接してくれる。

今の肩書きである組長代行として、二、三の案件の報告を受けて指示を出し終わると、もう洋一の仕事はなくなってしまった。

責任はあるが、はっきり言ってメチャクチャ楽勝のお仕事内容である。

まあこのポジションに上がるまでが大変なのだが、親の七光りでスポンとなんの苦労も無くそこに収まった洋一は、そのありがたみにまったく気づいていない。

普通はそこからでも所属している広域組織での上を目指すので、何かと政治的な気苦労が絶えないのだが、上昇志向皆無でまたその必要性も理解していないから、今のところ遊んでいるようなものであった。

しかし彼はその生活に満足していなかった。

前も、そしてあの時まで、ずっと。

だが女装子とぶつかってしまった、あの夜からちがいはじめた。

本皮のデスクチェアに深く身を沈め、あごに手をあてて、アンニユイな表情で洋一は考え出した。

―――― まさかあんな世界があったとは、まったく知らなかったぜ

男である時とはまったく違う、見られることでの快感。

女性の物を身に付けることでの開放感。

そして、女装した自分と暴力との不思議な一致感。

今までは置かれた状況の為にしかたなく、どちらかと言えば嫌々暴力をふるっていたのだが、昨夜は違った。

躊躇い無く放った前蹴りで碎いた鼻骨の感触を思い出し、洋一はうつりとした。

また恥骨の奥がピクリピクリと震え始め、その快感によだれが出そうになって、はっと口を閉じる。

変態を音速で通り越して、異常者として覚醒してしまったのだろうか、この男は。

その一方で洋一のクレバーな部分が、自分を冷静に分析する。

——でも、ついに女装で外に出てしまった。てことは、次は誰かとその姿で会いたくなるんじゃないや……

恐怖が身体を突きぬけ、うわっと叫びそうになって口を手で押える。心臓が16ビートで踊り始めた。

そう、この欲望はエスカレートしてゆく定めなのだ。

一般人なら茨の道くらいだろうが、極道稼業の洋一にとって、それは破滅への階段である。

しかもその段数は、絞首台へと上がる13階段より短いと思われた。じんわりと嫌な汗が脇の下を伝う。

しかしその一方で、ビビればビビるほど、女装に対する欲望と快感を求める声が高まってくる。

内なる魔性がふわりとささやきかけた。

——仕事もう終わったんでしょ？ 行こうよこれから。ほら、すぐに。まだ暗くなってないからドッキドキもんだよー！

洋一の表情が、上半分がヤクザフェイス、下半分が笑顔という、複雑怪奇なものへと変化した。

——はああああ、もおたまないっ！
がつくりと首を垂れた。

やはり普通ではなくなっていたのだろう。

自分をじっと見つめている視線に、洋一はまったく気がついていない。

二代目の影としてひっそりと壁の花と化しながら、シンはずっとマイ兄貴のことを観察していた。

――兄貴には絶対に何か困っていることがある！

忠実な付き人は今、そう確信した。

シンの心の中にある、エキセントリックスイッチがパチンと入る。

今の洋一と同等、いや、それ以上に危険かもしれない男が、ついに起動してしまったのだった。

玲

その日、玲は通っている女子高で奇妙な噂を耳にした。

放課後、帰り支度をして、自分が記事を書いているタウン誌のネタ集めに街へとでようと考えていたら、まだ居残っておしゃべりしていたクラスメイトの話が聞こえてきた。

また彼氏とかの話だろうとは思ったが、新聞部平部員———だが実は部長を影であやつる真の支配者———玲の記者本能がつい発動して、聞き耳をたてた。

「あたし昨夜、すんごいの見ちゃったあ」

「なによ、またしょうもないことでしょ？」

「ちがうってば。あのね、戦闘メイド見たの、あたし」

「はあ？ それってアニメかなんかの話？」

「だーかーら、ちがうって！ リアルのお話。あたしメイコたちと夜中までカラオケいってて、そんで2時くらいだったかなあ、アーケードの裏を通って帰ってたわけ。そしたら西商業のヤン姉たちがいてさ。うわヤバって思ってたら、先に絡まれてる人がいて。それがメイドさんだったんだけどね。まきこまれのイヤだったから、あたしかくれて観てたの。そしてらなにやったのかわかんないんだけど、西商のヤツらワーツで逃げ出していなくなっちゃったの」

「それって、メイドさんがなんかやったわけ？」

「うーん、そこまではわかんない。でね、あたしなんかおもしろそうって思って、そのメイドさんの後をつけたの。そしたらその子が国道に出たところで、ハルオさんとこのチームが走ってきて」

「うわっ、あのタチ悪い人！」

「そそっ。たぶんあれはあの子さらってなんかする気だったんじゃないかなあ。みんなバイク止めておりてきて、メイドさんかこまれちゃったの」

聞かされている子は、鼻息も荒く顔を近づけて、話の続きをせがんだ。

「そしたらメイドさんが暴れだして大乱闘！めっちゃくちゃ強いんだって、それが。たぶん空手か拳法だねあれは。で、ハルオさんたち秒殺！」

「なにそれ、ほんとに女の子なの？」

「うん。女装子であれだけきれいな子はいないとおもうから、女の子だと思う。で、全員やつつけちゃって、そのうちにやつちゃんま出てきて大騒ぎよ」

「え、ヤクザも返り討ち？」

「ううん、さすがにそれはないよ。やつちゃん出てきたところでメイドさん逃げちゃっておしまい」

「ふーん・・・ まあ作り話にしては面白かったわ。漫画に描いたらまた見せて」

話を聞いていた子は、ニヤニヤと笑って立ち上がると、教室の出口の方へと歩き出した。

「なによー、それ！ちがうって、マジ話なんだってばー！」
しゃべっていた子も、怒りながらそれについてゆく。

肩越しに顔をむけて二人を見送って、玲は考えた。

「——— ほんとかな？ たしかあの子、漫画描いてるっていつてたからネタなのかも。でもダメ元で今夜さぐってみるかなっ
机の上に置いていたスポーツバッグを拾い上げると、玲は軽い足取りで教室を後にした。」

午後10時。

自宅を出た玲は、タウン誌のスポンサーになっている店や、顔見知りの店へ挨拶がてら入っていつては、ネタになりそうなものを物色した。

高校に入っすぐ、遊んでいたところでタウン誌の記者と知り合っ
て、雑誌作りの真似事をするようになった。

そして高校三年の今、玲はすでにタウン誌の有力助っ人ライターと
して、編集長の覚えも高かった。

この仕事を手伝いだして知り合った人たちも、活発で妙に人懐っこ
いこの娘のことを、子ども扱いせずにかまってやり、ささいな街の
情報でも教えたりした。

行動的乙女である玲の夜は短い。

肩までの明るい茶色の髪を夜風に流しながら、玲はきびきびとした
足取りでその健康的な身体を運んでゆく。

あちこちに顔を出す内に、あつという間に日付が変わって、玲は少
しあわてた。

—— やばっ！ そろそろアーケードの方にいかなきゃ
広告を出してくれると約束してくれた居酒屋の大将にお礼を言うと、
玲は急いで表に出た。

アーケードへと早足で歩きながら、さっきスポーツバーのマスター
に聞いた話を思い出していた。

そのマスターが、野次馬としてメイドさんを目撃したと言ったの
だ。

「いやあ、凄かったよ玲ちゃん、あれ。華奢な子でね。外人かハー
フかと思っただくらい綺麗な顔してんのに、木刀持って男をメッタメ
タにしちゃってさあ。あれって絶対に剣道の有段者だよ。どこのイ

メプレの店に勤めてるのかなあ。行ってみたいなあ、俺」

思い出す内に、玲の瞳が段々と光を帯びてきた。

「―――― 空手に拳法。おまけに剣道ねえ…… おもしろいじゃないっ！」

この平和な地方都市では、10年に一度あるかないかというネタだ。話がもし本当なら、今それをタウン誌で取り上げれば、何か新しい波を起こせるかもしれない。

自分が、すごく大きなものの鍵を握っているような気分になって、玲は背中がゾクゾクとしてくるのを感じた。

肩から下げたバッグの中に、デジカメとボイスレコーダーが入っているのを確認してから、玲は足に力を込めて急いで歩き始めた。

レディ・チャイナ 1

午前1時。

人気の絶えた地下街に、コツコツとピンヒールの音が響き渡る。

ホームレスの辰さんは、その夜めばしい得物にありつけず、空腹を抱えてダンボールハウスの中で寝ていた。

――― ああ、せめて酒が見つかってりゃ、ちっとは飢えもしのげるっていうのによォ……

茶色から黒へと変色しかかっている毛布を巻きつけて、辰さんがブルツと身を震わせたその時、前を通り過ぎようとしていた足音が止まった。

すわっホームレス狩りの若者かと身構えると、ガバツと入り口のダンボールが剥ぎ取られ、何かがそこから投げ入れられた。

「うわぁ！」と声をあげて頭を抱える辰さんの身体に、何やら軽い物がポコポコと当たって下に落ちる。

次に、ガチャンとガラスの触れ合う音をたてて、大きなビニール袋が床に置かれた。

「寒くなってきましたね。皆さんでこれ分けて召し上がってください。少しは温まると思います。どうか気を落とさず。きっと楽しいことがありますよ……」

地下街の照明が邪魔して姿は判らないが、そんな女性の声がした。

まだ固まっている辰さんの耳に、またピンヒールが道を叩く音が聞こえ始め、遠ざかってゆく。

そっと目を開けて、自分の身体に当たった物を手にとってみると、

それはあたりめの袋。

暗闇で見えなかったが周りには、乾物屋かと言いたいくらい、乾き系おつまみの袋が散乱しており、入り口には酒瓶が詰まった袋があったのだ。

なんだかわけがわからなかったが、危険は無いと悟った辰さんが、おっかなびっくりダンボールハウスから顔を出して外をのぞく。

煌々とした光に照らされながら、背筋を伸ばして去って行く、派手な後姿が見えた。

真紅のシルク生地に、鮮やかな刺繍で大きな龍が描かれた、全身をタイトに包むチャイナドレス。

左手には、ロンリコ・ラムの瓶が握られている。

そう、言わずと知れた、洋一の姿であった。

やっぱり女装して街へと出てきてしまったのだ。

彼は始め、己の足を殴ってあの部屋に行くのを止めようとした。

だが、ただ痛かっただけで、足は普通に母のマンションのドアをくぐっていた。

今度は、手を押えて女装を止めようとした。

しかし、気が抜けて鼻をほじった瞬間に、女装が始まってしまった。せめて部屋の中で我慢しようと試みたが、鏡に映る自分の姿に満足して、ついうっかり傍にあった酒を飲んでしまっ、全ては終わった。

——— そうだ！ホームレスのおじさんたちにプレゼントを持つていつてあげよう！

そんなムチャムチャな理由をつけて、洋一はそのままの姿で外へと飛び出したのだった。

差し入れが、あたりめや酒だったのは、かけらほど残っていた男と

しての本能がチヨイスさせたものかもしれない。

アルコールで解放された魔性によって、洋一は地下道を通り、地上へと続く階段を登り始めた。

その足取りに、ためらいや戸惑いは微塵も無い。

女装お散歩を開始してまだ二夜目だというのに、ピンヒールを危うげなく履きこなし、声まで女性化しているこの男はいったいなんなのだろう。

正体不明の曲をハミングしながら大手を振って――今夜はスリットの深いチャイナなので足取りは静々とだったが――中華乙女・洋一は地上へと舞い降りた。

白檀の扇子を取り出し、パタパタと顔をあおぐ。

どこへ行くこうかと考えているようだ。

正面はアーケードの西の入り口。

左は飲み屋街へと続く道で、右は繁華街を取り巻いている国道だ。

やがて行く道が決まったのか、優雅に扇子を仕舞うと、洋一は右に足を向けた。

艶めかしく揺れる腰と、スリットから見え隠れする白い足が、暗闇の中へと消えていった。

玲はアーケード北口にいた。

ダンスの練習や弾き語りでうたう人々が両脇に並ぶ中を、彼女は左右に目を配りながら歩いてゆく。

キャッチの黒服をかわし、横に並んで道をふさぐ酔っ払いの大学生を睨み倒しながら、玲はどんどん南へと進んでいった。
やがて信号が現れて、一番人通りに多いアーケードが終わった。
信号待ちをしながら考える。

――― やっぱ人の少ないアーケード方かな？それともこの周りの裏通りかな？

考えている内にパッとシグナルが青に変わった。

くるっと90°ターンすると、玲は右へと足を向ける。

繁華街を取り囲む国道と平行して通っているアーケードの方ではなく、さきほど歩いてきた周辺をまた探るつもりのようだ。

タクシーが縦列駐車するのを脇に眺めながら、玲は肩にかけたバッグを揺すりあげると足を早めた。

洋一は国道脇の歩道を悠々と進んでいた。

この国道は、さきほど玲が渡らなかった交差点から、彼が初めて出てきた地下道へと続いて通るアーケードと平行してはしっている。

昨夜、洋一が暴れた国道とつながっていて、今はちょうど真逆の位置を彼は歩いていた。

この辺りはデパートなどの大型店が立ち並ぶ区画で、深夜の人通りは少ない。

それでも彼の姿は人目を惹き、酔客から好奇の視線がそそがれた。

自分を見つめる者に、嫣然とした微笑で洋一はこたえている。

その笑顔を見て、ある男は鼻を伸ばし、ある若者は実らぬ恋に落ち、あるおとうさんは、恍惚のあまり家族土産の寿司の折り詰めを道におっことしてばら撒いた。

それを見て、洋一の快感ボルテージはどんどん上がってゆく。

――― きつもちいい！！

まさか自分を探している不届き者がいるとは夢にも思わない彼は、こみ上げてくる心地よさを隠しきれずに、甘い吐息をつきながらゆっくりと歩いてゆく。

だから、普段の洋一ならすぐに感づいていたはずの視線を察知しそこなっていた。

ちょうど彼の100メートル後方。

奇しくも洋一の組が経営する高利回り金融の看板の陰から、熱い視線でこちらをうかがっている男がいた。

「まさか兄貴がこんなことになっていたとは……」

頬を赤らめながら洋一の背中を見ていたのは、口調が示すとおり、忠実な付き人、冴島 心であった。

シンの尾行は、洋一が事務所を出たところからもう始まっていた。

彼の追跡がまったくバレていないのは、洋一の脳容量の99%を女装が占めている証であろう。

シンは始め、知らないマンションへと入ってゆく洋一を見て、やはり新しい彼女のところだったかと思ったが、やがて出てきた兄貴の姿を見て、何事にも動じない彼が持っていたカフェラテのカップをポトリと取り落とした。

ちなみにシンは酒も好きだったが、甘い物はもっと好きだった。

ドクドクと流れ出す甘ったるい香りに囲まれながら、シンは己の目

を疑い、何度も何度もこすって確認した。そのために目が真っ赤になった。

「――間違った、兄貴だ……姿形が変わっていても、俺が兄貴を見まちがうはずがない」

そう確認すると共に、あまりに恐ろしい現実には、シンは身体が震えてくるのを感じた。

だが、全てはちゃんと見届けてからと考え直し、ヒタヒタと洋一の後をつけてきたのだった。

そうやってついてゆく内に、シンは自分の身体の異常を感じてふと考えた。

「――おや、まだ身体が震えている。もう落ち着いているはずなのになぜ？」

そういえば心臓もまだドキドキしていた。頬もなんだか熱い。

しばらく変調を不審に思っていたが、今は兄貴のことと、また意識を前に向けたとき、洋一の行く手を数人の影がふさいだのが目に入った。

「いた！こいつよハルちゃん、あたしらおどしたの」

ある国の原住民をおもわせるメイクをした、やたらと薄着の女の子が洋一を指差して叫んだ。

「牛島さん、こいつっス！俺ら襲ってきた女は」

ハルちゃんと呼ばれた男が、かたわらに立つ大柄な男にそうささやいた。

街灯の明かりからはずれていて、その男の姿はよく見えない。

脅してきたのは彼女の方だし、襲ってきたのはこいつだったが、あの夜のことは快感とシンの顔以外よく覚えていない洋一は、小首をかしげて考え込んだ。

が、やっぱり思い出せないなので、ロンリコをぐいっと一口飲む。

そんな彼の後方では、危険を察知したシンがいつでも飛び出せるように身構えている。

牛島という男が、のそりと暗がりから姿を現した。

身長168cmの洋一より頭一つ、いや一つ半は高い。

短く刈った髪をツンツンに立たせて、四角くえらの張った顔にはいかつい髭がたくわえてあった。

ごつい身体と相まって、見るからに腕力に自信あり、といった風だ。

どうやら昨日、洋一がやってしまったチームのボスキャラらしい。

凄むわけではないが、やる気満々という空気を漂わせて牛島は洋一をにらんだ。

だが彼は、薄笑いを頬に浮かべながら、扇子を使って涼しげな顔をしている。

辺りを不穏な気が取り囲み、暴力の予感がひしひしと高まってきた時、とつぜん牛島の殺気が消えた。

よく見ると、目は厳しいままだが大きく見開かれていて、口がOの字を作っている。

おどろいている表情だった。

そのうち、ごつい身体がプルプルと震え始めた。

手下のハルちゃんとその彼女も牛島の異変に気づき、「なんでやってしまわないの？」という非難の目をむける。

むふーんと荒く鼻息を噴いて、牛島が口を開いた。

声は渋いバリトンであった。

「か、かわいい」

「えっ？」

ハルちゃんと原住民女子が、同時に疑問の声をあげる。

「つ、つきあってください、ばくと」

「マジ？」

また二人が同時に声をあげた。

彼らの思惑と180°違う展開についてゆけないようだ。

「ひとめ惚れなんです、お願いします！」

もう二人は何も言わない。だがこのセリフには上機嫌でいた洋一もシラフに戻った。

野獣のような男にいきなりカミングアウトされても――――たとえイケメンだったとしても同じだろうが――――気持ち悪いだけでコメントしようがない。

牛島が一步前に出る。さすがの洋一もこれには半歩下からずをえな
い。

「ど、ドライブいきませんか？」

「・・・・・・・・イヤ」

「じゃ、飲みにでも」

「・・・・・・・・ムリ」

「それではちょこっとだけお茶でも」

「・・・・・・・・・・てかうざい」

洋一の精神攻撃にも屈せず、牛島は前へ前へとつめてくる。
殴り飛ばすわけにもゆかずに下がる洋一。

だがその均衡も、牛島の熱愛がついに臨界に達して俄に破れた。
彼は猛然と洋一に飛び掛った。

牛島はその時見た。

チャイナドレスのスリットが割れ、細く美しい脚線を描く足が高々と上へとあげられるのと、その足の奥にある物を。

———— わぁ……しろい………！

牛島の顔に喜びがよぎった刹那、彼の右頬にピンヒールがめり込んだ。
だ。

直線から鋭く真横に飛ぶ、必殺の回し蹴りだ。

あわれ牛島くんもアスファルトに接吻かと思われたが……

彼はやはり体格通りの猛者であった。

首を少し曲げただけで姿勢も崩さず、その身体は微動だにしていな
い。

それどころか顔はまだ笑ったままだった。

牛島の手が、まるで愛おしいものに触れるようにそっと足首を捕ら
えた。

その感触に、ヒッと洋一が悲鳴をあげる。

なんだかよくわからないが兄貴のピンチと、シンが歩道へと駆け出
した。

その目の前で、洋一の身体が華麗に空を舞った。

掴まれた足を支点にして躍り上がると、空いていた片足から牛島の
顔面へと膝蹴りを放ったのだ。

「変形真空飛び膝蹴りっ！」

おもわず技の名を口にして立ち止まるシン。
モロに決まった膝に牛島が鼻血を噴出すと、その隙に掴まれた足を
はずして洋一は駆け出す。

「牛島さん大丈夫っすか！」

そう言って近寄ってきたハルちゃんをなぜか裏拳で殴り飛ばして、
牛島は叫んだ。

「逃がさん！おまえは俺の女だあ！」

その言葉にかつとなったシンが、牛島に走り寄ると思いきり拳を
顎にたたきつけた。

これにはたまらず、牛島は仰向けに倒れたが、そいつにはもうかま
わず、シンはマイ兄貴の後を追って走る。

だがすでに洋一の姿は消えており、シンはあせって闇雲に路地裏へ
と踏み込んでいった。

ポツンとそこに残された原住民風女子は、ぶっ倒れている彼氏と牛
島を見下ろしながら、何が起こったのか理解できずに呆然とするの
だった。

レディ・チャイナ 2

洋一は闇雲に夜の街中を駆けた。

その左手には、あれだけの事態の後なのに、まだロンリコ・ラムの酒瓶が握られている。

どれほど走っただろう。

もう追ってはこれないだろうと立ち止まると、荒い息を整えつつ、さっきの出来事をフィードバックした。

——うはあ、久々に男に迫られてビビったあ！ でも会って10秒で好きではないよねえ、歌の文句やマンガじゃないんだし

幼少期から青年期までに自分に言い寄ってきた男どもと牛島がオーバールップして、洋一はうげつと顔をしかめた。

それ以上おもいだすのは辞めにして、ロンリコをごくごく飲み干す。

煙草が吸いたくなってきた。

だが全て部屋に置いてきてしまっていたし、さすがにコンビニへ買いに行くのは、わずかに残っている理性が止めてと言っている。

——明日からはバッグ持って出よっ

この男、もうためらい無く女装お出かけを日課にしようとしている。人生のがけっぷちに爪先立ちしていることを、洋一はすっかり忘れてしまっていた。

しかたかない。煙草もないし、今夜はもう帰るかと思はれ歩き出した。すぐにタクシーがたくさん並んでいる、アーケード同士をつなぐ交差点へと出た。

この道をまっすぐ西へ行けば、左手にさっき出てきた地下街の入り

口がある。

洋一は空になった酒瓶を信号脇にあるコンビニのダストポットに投げ込むと、カツカツとヒールを鳴らして西へとまた歩き出した。
その時……

「みつけたあ！」

野太い声に振り返ると、顔面を血に染めた牛島くんが、ハアハア肩で息をしながらこちらを指差しているのが見えた。

恋する男のアンテナは、捕捉不可能と思われた追跡をやり遂げさせてしまったらしい。

絶句する洋一に、牛島はゆっくりと近づいてくる。

道行く車のライトに照らされて、怪しい光を帯びた彼の瞳が見て取れた。

口を横にイーッと広げて洋一は固まっていたが、牛島が間合いに入ったのを見てさっと車道に飛び出すと、走る車の間を抜けて通りを渡り、北の方角へと逃走を開始する。

「絶対に逃がさん！」

牛島も巨体を車道へと躍らせて追跡してきた。

突然飛び出してきた大男に、走っていた車が急ブレーキを踏む音が辺りに響き渡る。

洋一にはとにかく駆けた。

いつもの彼なら、相手が何者であろうと降りかかってきた火の粉はためらわずに実力行使で払いのけるのだが、なぜか女性化している時は、敵意を持つ者以外への暴力には抑止力がかかるらしい。

ホームレスへの差し入れと合わさって、これは女装状態での一現象と言えるだろう。

追跡を確認しようと洋一が一瞬うしろを振り向いた時、横合いから

ひよこつと女の子が出てきて、モロに二人がぶつかる。

ヒールを軸に洋一はかかしのように回って吹っ飛び、女の子はほとんど尻餅をついた。

「痛っ！」

「ごめんなさい！」

シネマの早回しのように素早く洋一は立ち上がると、女の子の出てきた方へと身をひるがえして走り去る。

こっちなにか言おうとしたが、相手がいなくなってしまったので、女の子がデニムのスカートのすそを払いながら立ち上がった時、大男が目の前にあらわれ、ビクツとすくみあがった。

男はフンゴフンゴと息を吐きながら叫ぶ。

「どっちいった？チャイナの人どっちいった？」

「あ、あっち・・・」

その迫力に負けて、つい女の子が去っていった方向を指差すと、チームのような鼻息を吐いて、大男はそっちにむかって駆け出した。数秒、女の子は啞然としていたが、すぐに目が輝きを帯びたかとおもうと、大男の後を追って走り出した。

――― いつもメイドとは限らない。さっきのが噂の人だ！

記者のカンがそう告げている。

カモシカのようにしなやかな動きで大男に追いつこうとしている女の子。

もうおわりの通り、女子高生ライターの玲であった。

薄暗い路地裏。

アスファルトの上に、規則正しく鳴り渡るピンヒールの音。それにつづく荒い男の息と、軽いスニーカーの足音。

頭上で輝く様々な原色の見本市のようなネオンサインが、走る真紅のチャイナドレスをストロボで映し出す。

次に熊、そして少女。 もとい、洋一、牛島、玲だ。

三人の姿は、まるでスクラップスティックな映画の1シーンのようだ。

チャイナドレスの背中に牛島が叫ぶ。

「お、お名前を！」 「イヤッ！」 「じゃ、住んでるところを」 「もつとイヤッ！」

コメディを演じながら駆ける二人の後ろでは、真剣な表情をしてバツグに手を差し入れる玲の姿がある。

「あっ」

突然、洋一の姿が闇に沈んだかとおもうと、アスファルトの上を転がった。

彼の俊足に耐え切れず、ヒールが折れてバランスを崩したのだ。

肩を押えて立ち上がった洋一の目の前に、両手を上げて牛島が立ちふさがる。

「さあ行きましょう・・・今すぐ・・・」

あらぬ妄想を鼻から噴出しながら、牛島は歩み寄ってくる。

その姿に、洋一の防御センサーが彼を敵と認識した。

ふたたび高まるバイオレンスの予感。

だが、その緊迫を打ち破る声が牛島の背後でした。

「そこの男どいて！ 影になってて写らない！」

「えっ」

玲の叫びに牛島がおもわず振り返った時、洋一の身体が路面スレスレまで沈んだかとおもうと、弾のように前へと突進した。

玲の目には洋一の姿が消えたように見えた。

だが洋一は、瞬時に牛島の懷に飛び込むと、みぞおちに強烈な掌底突きを放ったのだ。

拳での打撃と違って、掌はインパクトを広く深く内臓へと波及する。牛島の目がくると裏返ると、ズーンと音をたてて沈み、洋一の姿が玲の前にあらわになった。

―――― チャンスッ！

構えていたデジカメのシャッターが切られ、フラッシュが辺りを白く染める。

しかし、カメラが捉えたのは、真紅の背中だけだった。

シャッターより早く、鮮やかターンで身をひるがえして駆け出す、チャイナの女。

玲は1チャンス1ヒットに失敗して、強く唇をかみ締めてその姿を見送る。

そんな彼女の背後10メートルの位置で、壁に身を隠して一部始終を見ていたシンがつぶやく。

「玲……… なんておまえが………」

湿りを感じる路地裏で、残された三人はそれぞれの姿で、影となつて動きを止めたのだった。

兄妹 1

牛島騒動からしばらくたったある日。

いつも通りに事務所にやってきた洋一は、デスクに陣取ってゆったりとシンの淹れてくれた紅茶を楽しんでいた。

あの騒動の翌日、持病の痔が急に悪化した父・義隆の代参として神戸に行っていた洋一は、ひさしぶりに女装ができるとワクワクしている。

ひさしぶりといってもわずか一週間なのだが。

「―――今夜はなに着よっかなあ。メイド、チャイナときてるから、次も定番の和服？ いやでも、和服は髪をアップにしなきゃ決ままないし……」

そんなことを考えている目の前で、お盆を片手に、シンが沈鬱な表情でたたずんでいる。

「おうシン、どした。なんか話でもあんのか？」

「いえ……別にありません。失礼します」

表情を消してシンは、いつもの丁寧な礼をして部屋を出て行った。

「なんだあいつ……妙な顔してたな」

そういぶかしがる洋一が、ティータイムを再開しようとカップに目を向けたとき、デスクの先、ちょうど入り口との間の床に紙が一枚落ちていたのが見えた。

何気なく立ちあがって手にとってみると、それは毎週この街で発行されているタウン情報誌だった。

シンが落としていったのかと思い、興味がでて中に目を通してみると、ほとんどが店舗のPRやクーポン券で占められている、どこにもあるパンフレット風の冊子であった。

紅茶を口に運びながら、何の気なしに後ろのページの占いなどを見ていたが、つまらないのもう一度パラパラとめくって捨てようとしたとき、大きなあおり文句とスナップ写真が目に残り広がっていった。

その途端、洋一の口からダラダラと紅茶がこぼれだした。

「WANTED!

ワルと戦う 戦闘コスプレお

姉様!」

大きなゴシック体でそう書かれた下には、スリットから白い足を覗かせて駆け去る、真紅のチャイナドレス姿の自分がいた。

そのまた下に小さな活字で、洋一がこれまでに起こしてきた事柄が克明に記事として書いてあり、末尾の言葉はこう結ばれていた。

「この女性の情報を編集部では求めています。ささいなうわさでもOK! 電話・FAX・メール等でお送りください」

ジノリのティーカップを持つ手が震えているのを感じながら、洋一は口中の紅茶を全部吐き出してそこに立ち尽くした。

「玲ちゃんすごいよ反響が! こんなになるとは思わなかったな俺」
「ねっ、あたしの言った通りでしょ? 絶対にこれ当たるって」

送られてきたお姉様情報のメールの数を見て、玲は得意そうに胸をそらせる、タウン情報の記者にそういった。

彼女の目論見どおり、平和な街の退屈に飽きていた人々から、たくさんのお姉様情報に対する有象無象の情報が送られてきた。

その内容はどれも玲の集めた情報の域を出ないものだったが、自分の記事が大きな反響を呼んで、彼女の心はワクワクとはずんでいた。

「続報も頼むよ、玲ちゃん」

記者は笑顔でそういうと、またかかってきたお姉様情報の電話へと対応しはじめた。

「はい、まかせといて！」

そう元気よくこたえたとき、ポケットの中でケータイが振動した。見ると兄からの着信である。

ピッとボタンを押してでた。

「兄ちゃんめずらしいね、自分からかけてくるなんて」

「……玲、ひさしぶりだな」

彼女の耳に爽やかなアルトの声が聞こえてきた。

「どしたの、なんかあった？」

「いや、これから会えないか？」

「うん、いいけど……」 どしたの？ 兄ちゃんから電話で会おうなんて、なんか不思議」

「会ったときに話す。今どこにいる？」

「タウン情報の編集部。兄ちゃんには言ってなかったけど、あたしライターやってんだよ。さっきもさあ……」

「知ってる。じゃあ今からいうところで待ってるから」

玲の言葉を途中でさえぎると、兄は編集部近くにある喫茶店の場所を彼女に伝えてから電話を切った。

いつもと違う兄の態度に玲は首をかしげたが、まあ会えばわかるよ

ねと、編集部の入っているビルを出ると、軽い足取りで歩き出した。

待ち合わせの店へと行きながら、兄にも戦闘お姉様のことを聞いてみようと考えていたとき、ふと気がついた。

———— あれ？ あたしがライターやってるの知ってるっていつてたけど、なんでかな？

玲の親でも知らないことを、家を出ている兄が知っていたというのがおかしかったが、人に大っぴらに言えない職業だからどこかできいたのかもと軽く思inaおして、早足で歩道を歩き出した。

兄妹 2

その夜、洋一は母のマンションでうなだれて考え込んでいた。

――― どう考えてもマズいよね、また女装で街に出るのは・・・

ため息を一つついて、テキーラのグラスを傾ける。

だが、今夜も彼はバッチリ女装していた。

青と白を基調に、胸元に豪華にフリルをあしらったブラウス。パニエで大きく膨らませたフレアースカート。首には臙脂色のリボンタイを締めて、不思議の国のアリス風メイドであつた。

だがそれだけではない。

今夜の彼の頭の上には、なんとネコ耳カチューシャが装着されていたのだ。

そのなんとも言えぬ困った空気を醸し出している姿は、もはや女装などと簡単にくくれないほど複雑怪奇で、まさに「変態!」としか形容しようがない。

トドメはそばに置かれてある、手持ちの小さなトートバッグだった。中味は煙草とケータイ。

「出る気満々やないかい、ワレ!」と読者諸兄は突っ込まれるだろうが、まずは彼の言い訳も聞いてやって欲しい。

心の病だかなんだかわからないが、ここで女装お出かけを辞めてしまふと、ストレスで稼業の方にも影響が出てきて、きつとんでもないヘマをやらかしてしまうだろう。

というか、そもそもまず出てゆくことを止めるのが不可能に近い。

しかしこれもまた不思議だが、なぜか俺はタウン誌にマークされている。

だから目立つ格好でのお出かけはもう辞めよう。

地味なOLかホステスっぽい格好でならマークもかわせると思うから、これからはそれで我慢することにしよう。

コメント不能なムチャクチャな理論だったが、いちおう結論らしきものが出て、洋一は立ち上がるとキツと顔を上げて叫んだ。

「よし、だから今夜は最後のメイドナイトだ！」

バッグを手にすると、洋一は玄関へと小走りで駆け、用意しておいた黒い厚底のシューズに足を通して、ドアを勢いよく開けて外へと飛び出していった。

まるっきり正常な判断ができなくなっている洋一から少し時間を戻そう。

太陽が沈みかけ、街が紫色に染まる夕刻。

待ち合わせの喫茶店へと着いた玲は、目立たない奥まったボックス席に座っている兄の姿を見つけて手を振った。

軽くなづいて答える兄。

もうお気づきかとおもうが、それは紅椿一家二代目付きのシンだった。

「わあ、兄ちゃんの顔みんのひさしぶりだあ。元気だった？」

にこやかに笑いながら玲はシンの前の席に座ると、注文をとりにきたボーイにミルクティーをオーダーする。

「ああ元気だ。すまないな、急に呼び出したりして」

「ううん、別にいいけど。それよりどしたの？あたしに話なんて初めてじゃん」

無邪気に話しかけてくる妹から目はずすと、シンは言いよんどんで黙り込む。

静寂が訪れ、しばらくは店内を流れる小粋なジャズだけが、二人の間に漂っていた。

ミルクティーが届くまでたつぷりと黙り込んだあと、おもむろにシンは切り出した。

「今週のタウン誌の記事を書いたのは玲か？」

なぜ知っているのかと玲はいぶかしんだが、こくりと一口ミルクティーを飲むと、軽くなづいた。

「うん、そうだけど。なんで兄ちゃん知ってんの？」

「あの記事に載っていた人をこれからも探すのか？」

質問に質問が返ってきた。

いつもの兄とは違う、性急な物言いにとまどいながら玲が答える。

「うん。さっきも編集部で顔出したらすんごい反響でね、電話やメールもバンバン来てて。記者の人にも続きよろしくって言われちゃってさ……」

「それ、やめてくれないか？」

言葉をさえぎられて、おどろいて玲はシンの顔を見つめる。

玲に対して優しい笑みを絶やさなかったシンが、真剣な目をして自分を见ている。

その表情で気がついた。

「あの人って兄ちゃんの知ってる人なんだ……」

今度はシンがおどろいた顔になり、息を飲んで目をそらせる。

「兄ちゃんの彼女が好きな人なの？」

玲の問いかけに、兄の肩が小さく揺れた。

「やっぱそうなんだ。それで……」

「ちがう！ あの人はその人のじゃないっ」

おさえた声音だったが、玲がビクツとしてしまったほど強い否定の声だった。

またうつむいてしまった兄の姿を見つめながら、玲は思う。

「……ふーん……でも兄ちゃん。ちがうっていつもその仕草じゃバレバレだよ」

まあその辺はあまり刺激しないようにしようと冷静な判断を下すと、玲は話を進めだした。

「それはいいとして。知ってる人なのはほんとでしょ？で、なにか事情があって正体がバレると困る人」

そういったとき、一瞬だけけどシンの口元がイーッとゆがんだのを玲は見逃さなかった。

片目をつぶって、少し上目遣いに兄を観察しながら、カップに口をつける。

「兄ちゃん言いたくないんだろうけど、その事情を話してくれないとこっちも困るわけ。これでもちゃんとお金もらって記事書いてるの、あたし。だから高校生だからっていいかげんな仕事はできないの。兄ちゃんやっちゃんだから、仕事のケジメってよくわかってるよね？」

理詰めできた妹の言葉に、シンは額に汗が浮かんでくるのを感じた。
「……こ、こればかりは言えない……でも話さない、この強情な妹は絶対に兄貴を追うのを止めないだろう
パラドクスな問題に、シンは苦渋に満ちた顔をした。

そんな兄の姿を、玲はまるで実験を見守る科学者のような目で見ながら、また話し始める。

「それにライターとして聞くわけだから、秘守義務はちゃんと守るし、もちろん興味本位とかはいっさいなしよ。その人の生活に影響が出そうなら、記者の人に話して止めることもできるし」

はっとシンが顔をあげる。

その目に希望の光を見て取って、あと一押しと、玲は一気にたたみかけた。

「それに・・・・・・」

「そ、それに？」

「兄ちゃんあたしが信用できないわけ？兄ちゃんヤクザになってあたしやみんなに迷惑かけたけど、あたしが兄ちゃんに迷惑かけたことある？」

「ない・・・・・・」

「なら話さない！悪いようにはしないから」

肉親の情と兄の罪に訴えた、本職のヤクザも顔負けの、アメとムチの使い分けが絶妙な交渉であった。

シンより妹の方がその道にむいているのかもしれない。

証拠の凶器を目の前に置かれた容疑者のように、がっくりとシンは肩を落としてうなだれた。

玲が目でもう一度うながすと、兄は二代目の女装のことをぽつぽつと語り始めたのだった。

戦闘輪舞　一バトルロンドー　1

そして時はまた戻って……

マンシヨンのエントランスから出てきた洋一を見て、シンはうとうめいた。

「あ、兄貴！　それはいったいどんなお姿で……！！？」

「アリス風メイドね。よっぽど自信ないと決まんない服だからあんまし一般的じゃないけど。　てか、あのネコ耳が意味不明」

「そうじゃなくて！　なんであんなお姿に……　それにちゃんとあの冊子を落として警告したのになぜ」

「知らないよそんなの。好きだからでしょ、きつと。ああいうのは自分じゃ止めらんないもんなの！　それより兄ちゃん、いくよ」

すっかり兄妹の立場が逆転していたが、そのことに気づかないシンは、玲の後について洋一の追跡を開始した。

あの後、洗いざらい打ち明けた兄に妹は言った。

「ふーん、そういう事情ならこっちも考えるけど……　でも兄ちゃん。あたしが記事にしくってても、このままあの人があの格好で出歩いてたら、絶対に噂はおっきくなるよ。もう火はついちゃってるわけだし。　その二代目だっけ？　その人にちゃんと話して辞めさせる方が先じゃない？」

「それはできない！　つらい稼業の息抜きで楽しんでらっしゃる行為を舍弟に見られて説教されたなんてことになったら、もう兄貴のメ

ンツは丸つぶれ。俺も組に、いやあの人のおそばにいられなくなってしまう」

「へえ、いろいろとめんどいのねえ、やっちゃんも」

火をつけたのは自分なのに、まるつきり同情していない口調で玲はそういって、冷えてしまったミルクティーをまずそうに飲む。

そして、うーんと顔を上にあげて考え出した。

「こっちから言えないとなると………そだ！あたしがあの人に言うってのはどう？」

「えっ」

「もう、にぶいなあ！ だから、あたしがあの人が決定的な瞬間を捉えてから、出てってはなすわけ。それならあの人でも兄ちゃんもダメージ少ないっしょ？ だってあたし赤の他人だし」

「そ、そうかなあ？」

「じゃ、ほかにいい方法ある？」

黙り込んだシンを見て、玲は言ったのだ。

「決まりね。今夜から兄ちゃんとあたしであの人を尾行よっ。今度は必ずチャンスつかんでやる！」

「おい。それなんか意味ちがってないか？」

兄の言葉はもう妹には届いていなかった。

そして兄妹は今夜、洋一の後をつけているのだ。

「また街に出て行かれるのだろうか」

「うーん、そうだとしたらそうとーキテるわね、あの人」

そう話す二人の前、100メートルほど先で、チラリチラリと青白いスカートが揺れている。

その光景にゴクツとつばを飲み込むシンを見て、玲は目をイヤそうに細めていった。

「てか兄ちゃん。ほんとあの人のこと好きなんじゃないんでしようね？」

「バカ！ 兄貴は男だぞ」

「そうだけど・・・ なんか兄ちゃんの反応がおかしいから」
「俺はノーマルだ。その気はない」

玲は、ふーんとまだ納得せずうなりをあげていたが、洋一の姿が角を曲がって消えたので、いそいで間を詰めて走った。

ぼくぼくとアリスメイド洋一は夜道を歩いてゆく。

その足は繁華街とは別の方向へと進んでいて、少しだけシンは安心した。

やがて洋一は、街の中心から少しはずれた市民公園へとたどり着いた。

入り口の逆Uの字の柵のあいだを通って、彼の姿は闇の中へと消えてゆく。

深夜の公園なので人影はない。

ここでは騒動など起こるはずがないとシンが胸をなでおろしたとき、洋一の目の前にバツと黒い影が現れたのが見えた。

何か二言三言はなす声が聞こえてきて、シンが前に出ようとしたら、

影がものすごい勢いで真横に吹っ飛んで倒れた。

それを見て唾然としたが、当の洋一は、もう後ろも見ずに鼻歌をうたいながら歩き出している。

二人にはよく見えなかったのだが、黒い影は痴漢で、隠れて獲物を待っていたところ、おいしそうなメイドさんが現れたのでこれはラッキーと飛びついて、したたかに洋一に殴られたのだった。

凶器は、左手に持ったテキーラの瓶であった。

なんだかよくわからないが、シンはなぜか用意していたロープで男を縛り上げて転がし、玲が手帳に「この人変質者です！」と書いたページを破って背中に貼り付けた。

その作業を一分とかけずに終わらせて、また尾行を開始する。

アリス洋一が公園を出てゆくまでの一時間の間にその被害者は三人にもおよび、深夜の公園でのコスプレ姿がいかに関険であるかを知らしめた。

どういつも一撃で仕留められていたので、玲が出てゆく暇も無かった。

洋一は公園を後にすると、トコトコと歩いて、24時間営業の大きなリカーショップへと入っていった。

どうやら酒が切れたらしい。

面が割れているシンは出入り口の影に待機して、玲が中に入った。

彼女は大胆にも、たくさんの酒が並ぶ棚を一つ一つ吟味している洋一の後ろまで近寄っていつて観察した。

————メイクがイマイチね。明かりの真下でよく見たら、男ってわかつちやうかも

しかしとても30男でしかもヤクザには見えないな、などと思いなから、ゆっくりと後ろを通り過ぎた。

チラッとカウンターの方を見ると、レジに立っている男が、好色そうな顔をほころばせてメイドさんを見ているのがわかり、ムツとする。

——— なんてかわいい女の子のあたしじゃなくて、女装男の方を見るかな、もう！ メイド服に騙されちゃって……これだから男はバカね

世の男性にはあまりに酷い感想をつぶやくと、玲はまた洋一の方を見た。

彼はバーボンの銘酒・ブツカーズを手にしてレジへむかっていた。そして支払いを済ませて店を出てゆく。

店員の顔は最後までほころんだままで、まったく洋一の正体には気がついていないようだった。

戦闘輪舞　―バトルロンド―　2

外に出た洋一は、店の駐車所の奥の暗がりまで歩き、フェンスにもたれかかると、ブッカーズの封を切ってグビリと一口あおった。そして酒瓶を下に置き、バッグから煙草を取り出し火をつけた。

口から吐き出された白い煙が、漂うそばからすぐ消えてゆく。なにやら納得がいけないといった表情をしていた。

―

――― うーん・・・ やっぱ公園とか店はつまんないなあ
煙草を口に運びながら洋一は考える。

そして、やはり街を歩きたい、そう思った。

洋一は、盛り場のあの猥雑な空気が好きだった。

そこにはたくさん種類の店があり、またそれ以上に様々な人々がいる。

その二つが醸し出す妙にウキウキとした、けれどもどこか少しあやうげな香りがする、夜の街が彼は好きだった。

だが、そこへこの姿でゆくことはもうできない。

そこまで思って寂しさにうつむいた時、洋一の頭の中で魔性の声がした。

――― またお酒買ってホームレスの人たちに持っていくてあげようよ。それだけやって帰ればきつと大丈夫だってっ
甘い甘い誘惑の声であった。

じんわりと快感がこみ上げてきて、洋一は自分の身体を抱いた。
もうダメだった。

しばらくそうして震えていたが、やがて店へと取って返して大量の酒とツマミを買い込むと、洋一は地下街への道を颯爽と歩き始めたのだった。

地下街に天使が舞い降りた。

ふいにやってきた美しいメイドに、そこに住む人たちはおどろいたが、彼女が前に酒とあたりめを投げ込んで消え去ったチャイナの女だと気づいた辰さんが、仲間にそう説明したので、みんな警戒をといて集まってきた。

冷たい夜風に震える人々に惜しみなくアルコールを配り、嫌がることなく輪の中に入って話を聞くメイドさんに、彼らは神性を感じた。

「こないだはありがとよ、お姉ちゃん。今夜もこんなに差し入れ持ってきてくれて」

「ねえちゃん色が白くって彫が深いけどハーフかなんかか？」

「いける口だねえ、ほらドンドン飲んでっ」

突然はじまった深夜の宴の中、人々は口々にメイドさんに話しかけ、彼女もまたそれに笑顔でこたえた。

口数が少なく、その正体もわからないけれど、事情があってここに住む自分たちにちゃんと接してくれるメイドさんに、みな好意を抱いている様子だった。

冷たい世間の風もその周りを避けてゆくような温かい宴はずっと続くかにみえたが、終わりの突然やってきた。

「おおーっ！今夜はメイドさんがいるよオ」

あざけるような声が宴の輪の外でした。

声のした方を見ると、5人の若者が手にバットや木刀といった物騒な物をさげて、こちらを向いてニヤニヤと笑っていた。

先頭に立っている長い金髪の男が、手のひらに特殊警棒をピタピタと叩きつけながらいった。

「かわいいねーメイドさん。俺らといっしょにこの臭いのいじめて遊ばない？」

男たちの発する負の空気におびえて、ホームレスたちは後ずさりしながら固まってゆく。

「街のおそうじ屋さんさ、俺らは。こうやって！汚いのを！かたづけてさ！」

シャーッと音をたてて警棒を伸ばすと、男はゆがんだ笑い声をあげながら、ダンボールハウスを一つづつ潰してゆく。

「うわあああ！」

一人のホームレスが恐怖に耐え切れなくなり逃げ出した。

木刀を持った男がすばやく走り、地上へと続く階段に逃げたその影に斬りかかる。

鈍い音がして、悲鳴が暗い闇から響いてきた。

警棒の先をメイドの顔にむけて、金髪がいう。

「それともなに？ あんたも偽善者でこいつら守る方なわけ？」

男がうつむいたメイドの顔をあげようとした時、冷えた声がした。

「・・・臭いねえ」

「あア？ そりゃ臭いさ、ここは」

そう答えた男をあざける高い笑い声がメイドの口から飛び出す。

そしてよく光る目で男を見据えて言った。

「いくら香水振りまいて隠しても、消せないくらいバカなガキの匂いがして臭いっていつてんのさ」

彼女の押し殺した声に、男たちの笑いが止まる。

メイドはゆっくりと立ち上がった。

「ハッ！おもしろいこと言うね、おねーさん。じゃ、おじさんたちの後で遊んだげるよ。俺、気が強い女が泣くところ見んの好きなんだあ」

鼻で笑いながら言った金髪の言葉に、後ろの男たちがククツと笑った時、メイドの左手に光るものが現れたかとおもうと鋭く横になぎ払われ、同時に右手が閃いた。

金髪のズボンの股間が切り裂かれ、バットを持っていた男の顔面に焼酎の瓶が突き刺さる。

次の瞬間にはもうメイドの身体は金髪の懷へと飛び込み、人差し指と中指をコの字に曲げた拳が鼻下の急所に炸裂した。

吹っ飛んで倒れた二人にかまわず、木刀男が走りこんできて、メイドの頭を狙って上段から打ち下ろす。

逆らわず、かえって進んでそれをかわして相手のみぞおちを狙う彼女に、手元に鞭のように引き寄せられた木刀が、鋭い突きとなってまた襲いかかる。

あきらかに剣の心得があり、しかも暴力に慣れた動きだ。首だけでそれを避けて、さっとメイドは後ろへ飛んだ。

さっきまで彼女がいた空間に、チェーンが叩きつけられる。連携のとれた動きに、残る男たちもかなりの手錬れだと思われた。

木刀が正面を、チェーンが右後ろ斜め。そして真後ろをナイフの男が固めてメイドの動きを封じる。

どの男の顔も人をいたぶる悦びに歪み、そして醜い笑いを張り付かせていた。

不穏な空気がまた高まってくる。

三人が一斉に仕掛けた。

わずかにナイフの動きの方が早いと見たメイドが左へと飛んだ時、そこへ木刀が待っていたように振り下ろされ、それをかわす少しの動きの間に、彼女の右手にチェーンが絡みついた。

かろうじて後ろのナイフを蹴り上げてかわす。

左を開けておいたのも、三人の攻撃のズレもすべて罠だった。

鉄でできたチェーンはどういう仕組みなのか、メイドの腕に絡み付いて離れない。

「ちょっと！ 服汚したツケ、高いわよ」

動きを封じられてもなお、メイドは不敵にそう叫ぶ。

囲む男たちはニヤニヤと笑っているだけだ。

誰も口をきかないところが、かえって隙がないことを感じさせて不気味だ。

「兄ちゃん、これヤバいって！」

階段で木刀に襲われた男を介抱しながら下を見ていた玲が、隣のシンの腕を引いてそういった。

出てゆこうか迷っていたシンが、もはやこれまでと足を踏み出した時、また三人が動いた。

チェーンが強く引かれ、腰を落として耐えたところへナイフと木刀が斬りかかる。

どちらかが動きのとれない彼女に当たると、玲は目をつぶった。

その刹那、メイドの左手が二度光った。

斬りかかる寸前でナイフと木刀の動きが止まり、フリーズしたような一秒の間の後、二人がどっとその場に崩れ落ちる。

気絶した二人の顔のそばには、細長く光る短刀のような物が落ちていた。

「兄貴の小柄術だっ。初めて見た……………」

啞然としてシンがつぶやいた。

戦闘輪舞　一バトルロンドー　3

「さあて、あんたには服のお返ししなきゃね！」
肉食獣の瞳がチェーンの方へとむけられ、睨まれた男がビクツとする。

メイドがグイッとチェーンを引いた。

釣られて男が固く握り締めた時、白い網ストッキングに包まれた足が高く上がり、まず真横、そしてしなるように正面蹴りへと変わって、男のわき腹と顎に決まった。

テコンドーばりの二段蹴りに、男の身体が吹っ飛ぶ。

が、握ったチェーンに絡まってまた前へ帰ってきたところで頭がかえられて、重い膝蹴りが入った。

鼻骨が碎ける鈍い音が階段の上まで聞こえてきて、顔をしかめて玲がつぶやく。

「・・・・・・・・痛ったそう」

四人を完全に鎮圧してしまったメイドさんに、わーっとホームレスたちが駆け寄った。

「すげえ！あんた強いなあ」

「こいつらに仲間が何人もやられてんだ」

「よかった・・・これでしばらくゆっくり寝られるよ」

賛辞と喜びの声が寄せられる中、メイドさんがはにかんだ笑みで彼らに答えていたとき、地下街の照明とは別のまばゆい閃光が辺りを照らした。

はっとメイドさんが光の方を向いたときに、もう1フラッシュ。
そしてすぐ、少し鼻にかかった声が響き渡る。

「そこまで！ バッチリ撮ったからね、あなたっ」

トントんと軽い足取りで階段を駆け下りてきながら、頭上に高くデジカメを掲げて見得を切った女の子に、メイドさんの顔が凍りついた。

「ありゃあ、タウン誌のおじょうちゃんじゃねえか」

「ひさしぶりおじさん。元気だった？ さっきやられた人はあたしが手当てしてもう大丈夫だから。」

おどろいた顔でホームレスの一人がそういったのに笑顔でこたえながら、ゆっくりと玲はメイドに近づいてゆく。

口と目を三日月のように歪めて笑う女の子に、メイドさんが震えだす。

「あの子は大丈夫だよ、おねえちゃん。 記者だからついでに記事にしてもらえ。街の有名人になれるぞ」

あれほど強かった彼女がなぜこんな少女を恐れるのか不思議だったけれど、ホームレスの辰さんは気をきかせてそういった。

が、その言葉に、ダーツとメイドさんの顔に黒いすだれが下りてしまふ。

「ダメだ……終わった……俺の人生……」

小さくそうつぶやく洋一の姿を見て、階段の上にいたシンがうなだれる。

「……すみません兄貴。でもこうするしかあなたを守ることはできないんです……許してください」

こうして洋一と玲は出会った。

ボーイ・ミーツ・ガールならぬ、ヤクザ・ミーツ・JKであつた。

天女

「うわぁー、なにこの数と種類！？ しかもオーダーメイドっぽい服ばっかじゃん！ これって全部あんたが集めたわけ？」

「いや、俺の母親で・・・」

「うっ、見たことない高つかそうなブランドのバッグがいっぱい！ あんたの母さんってお金持ち？」

「うん。かあさんは関西の本部筋の組の娘だから・・・」

洋一の女装姿をカメラに収めて、半ば脅迫気味にやってきた彼の母のマンション——いや、すでにこの名は適切ではなく女装ルームと言った方がよからう——で、そのコレクションを見た玲は、ど胆を抜かれたというかあきれたというか、表情に苦勞してふーっとため息をついた。

———— 意外とこの男の女装壁って母親の影響じゃないかな？ するどいカンであった。

リビングに戻ってソファーにどっかりと座ると、うなだれて立っているアリスメイドの男をじろりと見た。

「・・・メイク落としてきて」「え？」「早く！」「あ、はい・・・」

小走りにバスルームへと駆け去る洋一の背中を見送って、ふんと意地悪そうに鼻を鳴らす。

「ほんとにあれでヤクザなわけ？ 信じらんない」

バスルームからもれる水音を聞きながら、あらためて部屋を見渡してみる。

普段人が住んでいないとはとても思えないほどきちんと清掃され、また整理されていた。

赤い一人がけのソファや、明るく柔らかい色のカーテン。壁に掛けられた絵や数々のインテリアを見て、玲は洋一の母親の趣味の良さを感じた。

「……でも息子がアレじゃあねえ」

またふーっとため息をついていたら、バスタオルを肩にかけた洋一が戻ってきた。

「……落としてきた」

「じゃ、そこに座って」

ちょこんと向かいのソファに腰をおろした洋一を、じろっと見る。完全に男に戻っているが、こちらをビクビクとした目で見上げる仕草がまだオンナだ。

そんな男がおそるおそる口を開いた。

「あの……写真なんだけど」

「ちょっと待って！　まずはこうなった経緯から話して。それから考えるから」

「……」

ぴしゃりとさえぎられてまた洋一はうなだれたが、尻尾を完全に掴まれて観念したのか、ぽつぽつと女装へと至った道を語り始めた。

ヤクザの息子という立場で育ってきた自分と本性との葛藤。

そしてヤクザ渡世に対する不安と不満。

あの夜の女装子との出会い。

女装による快感と解放感。

とつとつと語る洋一の告白に耳を傾けながら玲は、特殊な環境で育ってきたこの男の人生を想像して、なにやら感慨深いものを感じた。やがてそれは彼女の中であることへと変換され、熱く大きくなっていく。

うつむく洋一を見つめる玲の瞳に、いつしか力強い輝きが宿っていた。

「・・・わかった。あんたがやむをえず女装に走ったその気持ち、あたしにもわかる」

すべてを話し終えて大きく息を吐く洋一に、玲は優しくそう言った。その言葉に、はっと彼は顔を上げる。

玲と洋一の視線が空中で絡み合い、彼は彼女の目の奥に、自分に対する自愛を感じて顔を輝かせた。

―――― ああ、この子はわかってくれる。この誰にも言えない苦しみと立場を・・・・・・ この子ならきつとあたしを悪いようにはしないはず

突然あらわれた理解者に、恋の予感にも似た歓喜を感じながら、ドキドキする胸を押えていった。

「じゃあ写真は・・・・」

「これからバンバン女装しなさい！あたしがサポートしたげるっ」この娘は女神かと本気で思い、感動に心はむせび泣く。

洋一は目を輝かせながら、両手を組んでいった。

「そ、それじゃあ写真は・・・・」

「メイクや今風の格好も教えたげる！このままじゃ昼間とか違和感あるし」

「あ、ありがとう！それで写真を・・・・」

「そうね。メイドをベースにもっとコスプレ要素を加えて・・・・」

で、街に巣食う悪党と戦う……」

さすがに話がかみ合っていないことに洋一は気づいて不安になったが、毒を食らわば皿までとおもってまたいった。

「あの、それで写真はある？」

「戦闘乙女？ いや、違う…… 天使？ これも違うわね。てかエ
ンジェルって年じゃないし」

「なにいつてんの？ それより写真はどくなるの？」

「うっさい！ ちよいだまって」

「……」

数秒考えてから玲はガバツと立ち上がると、指を洋一に突きつけて叫んだ。

「天女！ そうよ戦闘天女！ あんたはこれから、人々に愛と平和をあまねく与える天女として生き、そして伝説をつくるのよっ！」
顔を上に上げて、狂ったように高笑いしはじめた玲を見て、洋一の顔が蒼ざめる。

「おい、なんだよそれ！ おまえ魔法少女物の見すぎだろそれ！」
ソファから飛び上がって立つと、声を男に戻してヤクザアイで睨みつける。

だがこの娘は、その鋭い視線をかゆいとも感じてはいない。
舌打ちするといった。

「チツ、ほんとうっさいわね。男のくせに細かいことをウジウジと」
「細かくねえ！ おまえ普通じゃないぞそれ。言ってることムチャクチャじゃねーか！」

「女装コスプレのヤクザにいわれても、なーんにも感じないよーだ」
ぐっと言葉に詰まる洋一に、ニヤリと気味の悪い笑みを浮かべると、

玲はゆつくりとポケットから腕を引き抜いて、握っていた手を彼の鼻先で広げた。

手のひらにちょこんとのっていたのは、小さなボイスレコーダー。それを見た洋一が、瞬時にガマガエルのように汗を噴出させる。

「ふふーん。さっきの告白もちゃーんと録音させていただきましたあ。でもあたし脅迫とか好きじゃないから、自発的に協力してほしいんだけど……」

「メツチャ脅してるじゃねーか！ てめえ本職脅してどうなるかわかってんだろーな！」

「うん！ あたしがどうにかなるってことは、あんたもそうなるってことでしょ？ つまりあたしたちはペア……チームってわけよね。あ、ちなみに写真はデジカメからSDチップでケータイに移し変えてメールであたしの部屋のパソコンに飛ばしてあるから。」

玲になんかあったらこれを公表してください！ って書いてねっ」
「……」

「そだ！ 神戸の本部だっけ？ そっちがよかったかなあ……ね、どっちがいい？」

「こ、神戸だけはカンベンしてくれ！」

「じゃあ神戸にしようっ♪」

ぐうとうなると、洋一は床に膝をついた。

その肩にポンと玲が手を置く。

「やだあ。そんなに心配しないでよ、悪いようにはしないって。それにこんなのただのお遊びじゃん。ね、おじさん？ きっと楽しいよ、これから」

軽く微笑んでそういう玲のことを、キレた目つきで睨む。

———— 悪いようには、なんていうやつは絶対に悪いようにするんだって！

さすが本職、的確な読みだ。

奥歯をかみ締めて心中でそう叫んだが、事態は己の手を離れてこの娘に握られている。

従うしかないのだ。

そう思ったとたんに、鬼のようだった洋一の顔がだらしく歪み、咽喉から嗚咽がこみ上げてきた。

「えっとね、あしたまでに綿密なプランたててくるから、メアドとケー番おしえといて。あ、そうそう！あしたはあたしがメイクしたげるから。もっとうまく化けるよ、楽しみねっ」

男泣きになく洋一の前で、玲は自分の世界に入り込んでペラペラとしゃべっている。

彼女の目にはすでに彼の姿は映っておらず、爆発するように湧き出すこれからのプランをまとめるのに夢中になるのだった。

雄五郎

「いたぞ、こっちだ！」

男の声があがり、数人が自分の方へと駆け寄ってくる。

ヤバいと身をひるがえして逃げ出す背中に、フラッシュの嵐が襲い掛かった。

———— あんな娘の言うことなんか真に受けなきゃよかった！

その夜も玲の指示通りに女装して街へ出た洋一は、待ち構えていたギャラリーにたちまち捕捉され、逃げ回っていた。

だが、走っても走っても、物陰や店から黒い人影が湧いてきて、必ず見つかってしまうのだ。

「わっ！」

足をひねって転倒した。

痛みに顔をしかめて足元を見ると、靴のかかどが折れている。

洋一はハイヒールを脱ぎ捨ててまた駆け出した。

だが数メートルもゆかぬうちに、コンクリートで囲まれた袋小路に入り込んで、立ち止まってしまう。

咽喉の奥でうなりをあげる間に、ものすごい数の人に取り囲まれて、目もくらむようなストロボがたかれた。

「やめろ！写真を撮るなっ、カンベンしてくれ」

顔を手でふさぎ、うつむいても、眩しい白い閃光は止まない。

やがて自分を囲んだ人々の中から、たくさんの手が伸びてきて・・・

「・・・若、若」

「ううっ、ゆるして・・・」

「若っ！　どうしたんです若！」

「ぐわあああああ！」

はっと目覚めると、そこは組事務所の中にある自分のデスク。
白髪の男が正面から、シンがすぐ横から困った表情で自分を見ている。

———— ああ・・・夢・・・だったのか

動悸うつ心臓を静めながら、洋一は額の汗を指でぬぐった。

「若。どこか身体でも悪いんで？」

白髪の男が野太い声でそうたずねてくる。

中肉中背だが、ダークスーツの上からでもそうとわかる、鍛えた身体をした初老の男である。

浅黒い顔に、白目が勝った三白眼と左頬の赤黒い刀傷が見え、それがこの男もヤクザであることを示していた。

二代目の相談役。つまり洋一の極道渡世指導教官兼、お目付けの真ま渦うず雄五郎ゆうごろう60歳であった。

「医者の手配をしましょう」

そういつて雄五郎はシンに目配せをする。
うむを言わず病院へと連れてゆく気だ。

洋一がうなされていた原因に、なんとなく心当たりがあるシンは、
そういわれてとまどう。

「いや大丈夫だ。ちょっと昨夜のみすぎちまってな」

「一度医者に見てもらいましょう。二代目に何かあったら、俺がエ
ンコ飛ばしたくらいじゃおっつきませんから」

重々しくそう告げる雄五郎の顔を睨み付けながら、小さく叫ぶ。

「俺がいいって言ってんだ。ヤクザがいちいち身体がどうのって騒
ぐんじゃねえ！それこそかつこがつかねえだろうがっ」

「……さすが若。見事な渡世の心意気です。これも日々の任侠
道の賜物ですな」

暗に自分の指導のおかげ、という部分を濃厚に匂わせて雄五郎がつ
ぶやく。

舌打ちしたいのをこらえて、洋一はそっぽをむいて煙草をくわえた。
彼はこの雄五郎が煙たくってしかたないのだ。

思い起こせば、まだ自分が幼少の頃からこの男はすでにそばにいて、
事あるごとに極道として生きることとその精神を強要してきた張本
人の一人だった。

ヤクザの道に疑問を抱いていた洋一は、ことごとく雄五郎に逆らっ
てきたのだが、この脳が極道という巖で出来てる男は、彼をなだめ
もすかしもせずに直球、上段から心を打ち据え、真直ぐに渡世へと
引っ張ってきたのだった。

こういう人物に少々の手管は通用しない。

なので洋一は、父・義隆以上にこの男が苦手なのであった。

煙草に火をつけて、煙を天井へと吹き上げながらたずねる。

「で、なんか用か？」

「はい。組外の義理事の件です」

「言ってみろ」

「会長の指示で、これまでできるだけ若に義理掛けに行ってもらっておりましたが、どうも若は積極的に他の組との友誼を深めてくれません。今日はそのことを一つ申し上げに参上しました」

ようするに、お小言をいいにきたのだった。

洋一の目の前で雄五郎は、とうとうと極道同士の付き合い、つまり義理事の必要性を語って止まない。

その小姑のような口調と態度が嫌いな彼は、顔をしかめて煙草を吹かす。

だが二代目オーラをそよ風とも感じぬこの老極道にはかなわず、ただ聞いているしかない。

お説教は小一時間に渡り、洋一 of 精神を痛めた続けた。

ようやく話が終わってほっとした顔をする二代目に、雄五郎はぼそりとおつぶやいた。

「このままでは示しがつきませんので、若をどこかの組織に一時預かりしてもらって、一から渡世のことを学んでいただこうと……」

「ちょい待て！そりやおまえが言ってるのか？」

話を途中でさえぎると、洋一は剣呑な声をあげた。

「いえ、会長です」

「チッ！」

こらえきれず舌打ちしてしまう。

———— あのエロヤクザが！てめえは1ダースの妾とよろしくやってんのに、まだ俺を檻に閉じ込める気かよっ

好色で銭金にがめつく、息子であっても心を許さないという、ヤクザになる為に生まれてきたような義隆の顔が脳裏をよぎって、その不快感に身震いしてしまう。

あの美意識のかけらもない男を洋一は呪っていた。

その分だけ、真逆である母を慕ってきたといっている。

考え込む洋一に最後に雄五郎は告げた。

「とにかく。このままでは会長の指示通りに行儀預かりにせざるをえません。相談役として申し上げます。もっと身を入れて極道渡世、ひいては義理に精を出してください」

そう言い終え、びしっと一礼すると、老極道は部屋を出て行った。

ボタンとドアが閉まってから、煙草をひねり潰して洋一が罵る。

「なーにが相談役だっ。口を開けば渡世渡世って、おまえはアザラシかっての！」

「兄貴…… それを言うならオットセイです」

「お、そうか？」

気の毒そうな目で自分を見つめているシンに、強いて明るくいう。

「ちゃんとうりますよ。これまで以上にきっちりキリキリって、このツラ見せて回ってやるわ！」

おどける兄貴にシンが引きつった笑みを浮かべる。

実は彼の心配事の全ては二代目の女装癖にあるのだが、そんなこと

は知らない洋一は、無理に笑顔を繕い、変な声で笑い続けた。

メイク

そして太陽が沈み、やがて月がのぼって夜になる。

午後10時。

母のマンション改めここ女装ルームで、玲と洋一の初女装ミーティングが開かれていた。

何を強要されるのかとおどおどする洋一だったが、まずはメイク講座ということ、ほっと安心した。

「いい？まず女装前に大事なこと。それは髭、ヒゲの処理ね。あんた、自分はヒゲが薄いから大丈夫とか思ってるんだろうけど、全然ダメ！照明あたればバレバレよっ。剃ってもね、隠し切れないの。毛穴のポツポツとかも女の子じゃないしね。で、まずは抜く！」

そういつて銀色に輝く毛抜きを出してくると、ぎよっとする洋一の耳をしっかと掴んで、情け容赦なくヒゲを抜き始めた。

「いたい、痛いつて！せめてタオルで温めてから・・・」
「うっさい！あんたヤクザでしょ？こんくらい我慢しなさいよ、ほら修行だと思ってさ」

「そんな修行あるか！」

聞く耳を持たず玲は毛抜きを使い続け、やがて全てのヒゲというヒゲが抜かれて、洋一の顎は血だらけになった。

「これでよしと。後はあたしが持って来たSPコンシーラで毛穴

を隠せばOK。あとあんだね、アイラインの引き方がヘタ！シャドウのぼかしとかも。昭和のオカマじゃないんだから、ベツタリ塗ればいいってもんじゃないの。いい？鏡見てなさい」

洋一の顔を鏡の正面に向けると、自分は彼の膝の間に座り込んで、チューブから褐色の液を手の甲に少しづつ出して塗り始めた。

見る見るうちに顎が平らになってゆき、やがて完全に毛穴と青い部分が消えてしまつて洋一はおどろいた。

「これ舞台用の強力なやつだからね、市販品よりいいよ、高いけど。

あ、領収書もらつてきてるから後でお金おねがい！」

ヤクザに領収書つて、と鼻白んだが、彼女はそんなことにはかまわず、今度はアイビュラーとリキッド状のライナーを出してきて、まずまつ毛をグリングリンに上へと跳ね上げてから、慎重な手つきでアイライナーを引き始める。

「まつ毛のね、根本をちょんちょんつてつつく感じでまずは埋めていくの。あんたいいきなりベタツつていつてたでしょ？」

うんうんとうなづくと、頭をはたかれた。

人生初の頭はたきに唾然とする彼に玲がどなる。

「うごくな！ズレてへんになるじゃない、もう。リキッドのライナーは決まると目がパッチリだけど、その分むずかしいんだからねっ」

玲は、ものすごく真剣なまなざしをして、二重まぶたの下、まつ毛のギリギリのラインを縁取つてゆく。

「よっし！次はシャドウね。お水とかならパールでもいいけど、今夜はもうちょいナチュラルにラメとかも控えめでいくね」

たくさんの色が並んだパレットに、シャドウスティックをはたはたとつけ、ポンポンとまぶたの上あたりにはたくようにつけてから、

ささっと指で広げてゆく。

やがて出来上がった自分の目を見て、洋一は驚嘆の声をあげた。

「わぁ！ すんごいパキッとした、目が」

「でしょ？　じゃ、落としてきて」

「え？」

「え、じゃないわよ。次は自分で最初っからやるの！ 覚えらんないっしょ、やらないと」

「・・・あい」

それから玲のメイク指導は、若干いじわるの気味に二時間に渡って続いた。

「まあはじめはこんなとこかなあ。あとは回数かさねて慣れたからね」

なんとかお許しのでた顔を、改めてじっくりと見た。

「———— たしかに今までとは全然違う・・・ さすが本職だ！

胸が高鳴ってくるのを感じる。

そして頬を喜びでほころばせていると、また玲のきびきびとした声が飛んできた。

「次、ウィッグ付けて！ 髪のセット教えるから」

「はい！」

なぜか女子高生に顎で使われて、喜んで従っていることに彼は気づいていない。

多種類のブラシや櫛の使い方、服やイメージによる髪型の整え方など、一から彼女は教えてゆく。

「女装でも普通のお化粧でも、なんでもイメージなの。それを綺麗に描いてその通りに演出する・・・つまり自己自演の自分を絵に描くみたいな感じ？ だからこれからは女性誌とか見てもっとイメージをふくらませなさい。ほら、買うの恥ずかしいだろうと思って持ってきてあげた」

そういつて玲はスポーツバッグからたくさんのファッション系雑誌を取り出すと、洋一の鼻先に突きつけた。

ついでに領収書を渡すのも忘れてはいない。

それでもまだミーティングは終わらない。

服の着付け、またその種類や見た目に対する印象など、日付が変わっても指導は続く。

「で、今夜はどんなかつこしたいわけ？」

「・・・・・・・・ナース」

顔を真っ赤にしてうつむけた洋一が、消え入りそうな声でつぶやく。

「はア？この真性のヘンタイがつ！そんなのあるわけ・・・・・・・・あれ？あるじゃん。なにこれ！？ あんたのお母さんっていった・・・・・・・・」

その先を言おうとしたが、あまりに洋一が恥ずかしそうにしているので止めておいて、玲はなぜかワードローブにかかっていたピンクのナースセットを取り出すと、さも嫌そうな顔をして前に突き出した。

「自分で着て！ ヘンタイコスはあたしの範囲外だから」

「・・・・・・・・」

しかたなく洋一は一人でそれを着た。

玲はふてくされた顔でそっぽを向いていたが、要所ではちらりと見て短く指導する。

やがてナースへと変身を完了した洋一に彼女はいった。

「まずそこに座って！」

「はい」

なぜかフローリングの床の上に正座したので玲はおどろいたが、ソファーに座れといい直すのも面倒だったので、そのままにした。

「これから言うのが一番大事なことね。まずは戦闘天女のコンセプトです」

「すみません・・・・・・・・その名称は確定ですか？」

控えめに言った質問は無視された。

「いい？きのうあんたがホームレスの人たちに差し入れしてるの見て思いついたの。天女はまず、街の弱者に喜びを運ぶ役目をします」

「それってどういうこと？」

「ええっとね。差し入れとかはもちろん続けてもらうけど、どっちかっていうと、変な男に絡まれてる女の子を助けるとか、道いっぱいに広がって通行の邪魔になってる奴を指導するとか、そんなトラブルシューターみたいな感じかなあ、たぶん」

こいつ本当は思いつきで言っただけで、そう洋一は感じて玲をにらんだが、彼女がこっちをむくと笑顔になっていった。

「えっと、じゃあいままでみたいに不良をやっつけるってことでいい？」

「うーん……… ほんとはもっと慈善的なことしてもらいたいんだけど……… まあそれはまた考えとく！」

「………」

「なによ？ ちゃーんとあんたが大っぴらに女装できるように考えてあげてんのになによ、その目は？」

「いえ……… なんでもないです」

嫌な目つきで玲は洋一を見ていたが、やがてふんと鼻を鳴らすと話しに戻る。

「でね。あんたのその活躍をあたしが記事にして、やがてそれは街の伝説に………」

「ちよい待った！ それ話がちがうし。バラさないってあんた言ったっしょ！」

「はあ……… 言葉遣いも指導しなきゃだわ。それは置いていて。うん、あんたの正体はバレないようにちゃんとするよ。そのために完璧なメイクも教えたんだし」

「でも写真でバレバレだろ！ しかも記事なんかになって大勢が見にくかったら………」

昼間に見た悪夢を思い出して身震いする洋一に、こともなげにあっ

さりと玲はいう。

「だーいじょうぶだってば。もう一回鏡みてみなさい。その顔とポーズ頭でヤクザ顔のあんたを結び付けれる人なんていやしないって。それでも心配なら、昼間はもっと恐そうな顔してることね」

「・・・・・・」

「それに、他の手も打ってあるし」

「なにそれ？」

洋一の質問にはこたえず、腰に手を当てると、玲は高らかに宣言した。

「さあ、天女さまの初仕事よ！ きあい入れてこーっ」

黙って上目遣いで自分を見上げている洋一を玲が叱りつける。

「ほら、もっと楽しそうな顔しなさいよ！」

先行き不安でとても楽しめそうにはなれなかったけれど、今はこの娘のことを聞かなくてはならない。

拳を突き上げて気合を入れている玲に従い、洋一はアイライナーで書いた目尻を上げて、小さな声で「おーっ」といって手をあげた。

兄貴

「やっと出てきた」

マンション前に止めたありふれた紺色のワゴン車の中でシンはつぶやいた。

だが、玲と共にエントランスから出てきたピンクのナースを見て、思わず目をそらせてしまう。

「兄貴・・・・・・・・今夜はナース、ですか・・・・・・・・」

大きなため息を吐き出してから、気を取り直して車を降りると、気づかれないように二人の後をつけ始める。

そう、彼こそが玲のいった他の手、なのであった。

彼女の指示や機転ではカバーしきれない出来事――一本職や警察の介入――といった事態が起こったとき、シンがこっそりと、あくまで洋一に気づかれないように処理する。

それと、自分たち以外の第三者が、洋一をスクープしようとした場合の妨害。

それが玲が兄へと与えた作戦だった。

暗闇から街灯の下へ。

そうして明かりの中にナース姿が浮かび上がるたび、シンはため息をつく。

「玲のやつ、兄貴をどうしようっていうんだ。もし少しでも迷惑をかけるなら、いくら可愛い妹でも、ケジメはつけなくては・・・・・・・・」

「
そう一人ごちるが、今のシンに玲の指示以上のことなどできそうにない。」

だから不本意ながら、こうして影で見守っているのだ。

「しかし、兄貴は女の姿になってもカッコイイ……」
うっとり洋一の後姿を追いながら、シンは初めて彼と出会った時のことを思い出していた。

目標のない大学生活にいやげがさしていた時、街でしつこいキャッチに捕まって往生していたサラリーマンを助けて、地回りのヤクザともめてしまった。

五人を返り討ちにしてしまい、残る一人が懷に飲んでいたドスを抜いて自分へとむかってきた時、洋一は現れた。

「バカヤロウ！ カタギに光りもんむけて、それでもめえ渡世人かっ」

その一喝でドスを納めさせ、次に輝く白い歯を見せながら洋一は自分に笑いかけた。

「兄さん。とんだ行き違いですまないが、ちよいと訳をあっちで聞かせてもらえませんか？」

そう誘われて入った静かなバー。

ここで何か無理難題をふっかけられる、そう緊張したが、洋一は気を使って店の奥に隠すように自分を座らせてから、ちゃんと話を聞いてくれた。

始めに突っかかってきたのは向こうで、こちらは非を正してから謝ったこと。

だが自分の指摘した非で、相手が激昂して殴りかかってきたことなどを、正直にシンは話した。

彼の性格なのだが、まちがったことが嫌いで、それゆえに大学でもプライベートでも孤立していた。

誰も自分の相手をしてくれず、言えない言葉ばかりが胸の内に貯まってゆく毎日だった。

シンの話を洋一は真剣に聞き、また地回りとキャッチの関係や立場も語ってくれた。

「たしかにやってることはひどいことです。あたしも少しはマシな稼業になればとおもってやってはいるのですが、まだ若輩の身で、なかなかうまくいきません・・・それで街の皆さんや兄さんにまで迷惑をかけてすまないと思ってます」

そういつてから、かなり立場は上だと思われる男は、自分に頭を下げて謝った。

その素直な態度にかえってシンの方が恐縮してしまい、こちらこそ怪我をさせてすまないと謝る。

話が収まったところで洋一は、はははと涼やかな声で笑うと、まるで子供のような目になっていった。

「それにしても兄さん強いねえ。あいつらうちの中でも腕っぷしじやかなり上の方なんだぜ」

がらりとくだけた口調になった洋一に、いつしかシンは心をほだされていた。

手打ちだといってその場で酒を酌み交わす内に、いつの間にかシンは、日頃かかえている鬱屈した思いまで語ってしまったのだった。

全てを話し終えた後、恥ずかしさで赤面してしまった自分に、優しくそんな目をむけて洋一はいった。

「シン……って呼ばせてもらっていいか？ おまえ、いい奴だな。俺はこの通りのヤクザなんだが、カタギの連れもほしいっていつもおもってたんだ。嫌でなけりゃ、たまに会って話を聞かせてくれないか？ もしおまえに迷惑がかかるなら、すっぱり目の前から消えるから」

始めは目をみながらぶつきらぼうにしゃべっていたが、言い終えると少しはにかんだ表情になって、洋一は顔をそらせた。

シンはその時、洋一が見せたわずかな揺らぎの中に、自分と同じ孤独を感じ取った。

——— この人は助けを求めている
そう思った瞬間、おもわず言ってしまうていた。

「あなたの元で働かせてください。おねがいします！」

洋一は笑ってその言葉を取り上げなかったが、日々日参するシンを持て余して、半年後ついに受け入れてくれたのだった。

こうしてヤクザとなってしまった今思い出せば、それは稼業としての人集めの一環だったろうとおもう。

だがシンは、あの時の洋一の顔と口調の裏に感じたものに間違いはなかった、いまでもそう思っている。

日々接する兄貴との時間の中で、その思いは色あせるどころか段々と硬く強くなっていた。

『兄貴を助けられるのは俺だけだ』

その思いが今のシンの全てを支えていた。

懐かしくも切ない回想が終わり、シンの目がふたたび己が兄貴の姿をとらえる。

―――― 兄貴・・・ あなたの背中はこの冴島 心が必ず守ってみせますっ

心中そう叫んだシンの視界に、桃色にうごめく艶めかしい腰が揺れている。

「あ、兄貴っ。でもその服はあまりに短すぎではないですか!？」

そう。

洋一の着用しているピンクのワンピース風ナース服は、膝上15cmのタイトなミニであった。

自分の発した言葉が、男に対するものではまったくくないことに、この忠実な付き人は気づいていない。

ため息をついたり顔を赤らめたりと、忙しい百面相をしながら、あくまでこっそりとシンは二代目をつけ回すのだった。

悲しい事実ではあったが、その姿は平成の世では、「ストーカー」と呼ばれる。

凜花 1

「ねえ。 あんたってめっちゃ強いけど、武道かなんかやってたわけ？」

お惣菜コーナーで、ありったけのお弁当を買い物かごに投げ入れながら玲がたずねた。

「んーっ、剣道と空手は学生の時にちよつとやったけど・・・

あ、あと母さんに教えてもらったのかもか。・・・てかちよつと！その「あんた」っていうのやめてくんない？なんか感じ悪いから」

棚に並んだ酒瓶を押しているワゴンの中に叩き落しながら洋一がこたえる。

「ああそうね」と初めて気がついたような顔をして、玲はうーんとうなって考え始めた。

「せめて苗字で呼んでよねっ」と洋一はプリプリしながらワゴンを押すと、今度はおつまみコーナーにある物をカゴへと落とした。

「あっ！ ペンネームじゃないけど、女装のときだけ女の子の名前にするってのどう？」

「声でけーって！」

シートと人差し指を口に当て、あわてて注意する。

だが玲はまったく気に留めずに、自分の思いつきに没頭していた。

本当にシンと同じ遺伝子を持って生まれたのかと疑いたくなるくらい、玲は自己中心的に洋一にふるまっていた。

ここで玲のために断っておくが、こういう態度は洋一に対してのみ

であり、高校生なのに半ば社会活動をしている彼女は、必要な場面ではいくらでもお淑やかに、そして女らしくふるまえるのだ。ただし、本性は今、なのだろう。

「あ、しじみの干物！」

洋一が喜んで見つけた獲物を手にしたところで、玲がすつとんきょうな奇声をあげた。

「凜花…… そうリンカにしよう！ 女装の時のあんたは凜花ね、きまりーっ！」

「だから声でけーってば！」

「リインカネーションからひらめいたのよ。あ、そういつてもバカなあんたにはわかんないよね、凜花？」

そういわれてもどう答えていいかわかりはしない。

ただものすごくバカにされているのだけは感じて、頬を膨らませてそっぽを向いた。

「あーっ、なんか急に親しみ湧いてきちゃったあ。ねっ、凜花っていいネーミングだと思わない？」

自分の後ろにまわって、肩にあごをのせてくる玲を適当にあしらいながら、洋一は考える。

———— 凜花かあ…… 母さんの凜って字がはいってるなあ

もう一度訂正しておくが、彼は世に言うマザコンではない。もっとも、違ったケースではあるかもしれないが。

いつの間にか考える洋一の胸元に潜り込んだ玲が、ナース服に付いていたネームプレートに「凜花」とペンで書いているのに気がつき、その頭をはたいた。

にらむ彼女の頬をネイルを施した爪で弾いて、洋—————これからは女装時は凜花と呼んでやろう—————は微笑んだ。

凜花の顔をとりんとした目で下から見上げながら玲がいった。

「ねえ……………凜花って男の子ともエッチできるの？」

ポツと凜花の顔が赤くなる。

いったい何を言うのかと思って玲をよくよく見ると、なんだかこの子の顔もほんのり赤い。

「あっ！ あんたお酒のんでる！？」

「うふふふうう あったりい！」

くきくきと凜花の髪を撫でながら、玲が笑顔でそうこたえる。

実は、女装ルームで彼がメイクを落としにバスルームへ出たり入ったりを繰り返しているとき、退屈した彼女は、凜の酒コレクションに目をつけて、それらをちよびちよびと味見していたのだ。

しかもセレクトされた酒は、ことごとくアルコール成分の高い蒸留酒であった。

「あはははは、酔うってこんな感じなんだあ。なんかきつもちいいっ！」

「ね、ねえ大丈夫なのあんた？」

「もっち、いけるわよー！」

凜花の目にはとてもそうは見えなかったが、玲は元気よくそう答える。

そういわれると主導権を握られているし、女装名・凜花とまで贈られた手前、さからうことができない。

「とりあえず出ましょ」
シブイ顔になってレジへむかうと、支払いを済ませてスーパーを後にした。

凜花 2

両手に大きな袋を提げて、颯爽と歩く桃色ナースと少女のペアは、深夜と言えどもかなりの注目度であった。

――ヤバいなあ。高校生といっしょじゃポリとか職質かけてきそう……

ハラハラする凜花の気も知らず、彼女は上機嫌で鼻歌をうたいながら、大手を振ってついてくる。

警戒のため、切れ長の鋭い目を辺りに配っていると、玲が持っている袋の中に手をつ突っ込んで、ヴェファイタジンの瓶を引っ張り出した。

あっと思ったが、すでにこの娘はオヤジのようにラッパ飲みして、「ぷっはあくっ」とかやっている。

「ちょっとあんた！高校生なのに飲みすぎだってば」
自分は中学の時から飲んでいたことを棚に上げて叱る凜花を横目でじろりと睨んで玲はいう。

「こら！凜花こそその「あんた」ってのやめてよね。玲ってちゃんとした名前があるんだから。だーいじょうぶだって。うちの家はお酒強いんだから」

ほぼ当てにならない根拠を元にした反論にあきれかえる凜花を尻目に、彼女はまたジンを口に含んでいる。

「ぷっはくあ。お酒って味ないけどなんかたのしいね。てかさっきの話のつづきなんだけど、あの夜にさ、ナイフ投げてやつつけて

たでしょ。あれも武術かなんかなの？」

「ああ、あれはナイフじゃなくなって小柄こづかね。昔の武士とかが使ってた、日本刀を小さくしたようなやつ」

「へえ、じゃ、あれは剣術かなんかなんだあ」

「うーん……まあそんな感じ？ 母さんの家が代々受け継いでる古武術ね」

急に玲の目が輝きを帯びた。

「おおっ！ じゃ忍者かなんかの末裔とか？ 凜花のお母さんっ家って」

「忍者って……映画じゃないんだから。そうじゃなくて、室内で戦う為の術って言ってた。母さんは一度に十本あやつれるけど、あたしはまだ五本がせいぜいだけどね」

「わあ！ じゃあじゃあ今夜もなんかあったらまた見れる？」

「だーめ。あれはほんとはあんまし人に見せちゃいけないものなの。てか玲。あんた騒ぎになるの喜んでない？」

きつい目になって睨む凜花に、ふるふると玲は首を横に振ってみせる。

そんなことを話しているうちに、地下街の入り口が見えてきた。

重い袋をよいしょとゆすりあげて、二人が階段のところまで来た時、横合いから和服の女がずっと姿をあらわした。

ぶつかりそうになったのを双方で避けると、女は小腰をかがめて会釈した。

その顔を見て凜花がうっとうめく。

———— あ、綾乃！

おもわずそう口にしようになって、あわてて手でふさぐ。

そう、彼女は洋一の愛のハーレムを構成している一人。

この街N01の夜の蝶、綾乃であった。

年は29歳と少々高めだが、抜群の肢体と静かな知性を併せ持つ、女帝といったオーラをまとう女人である。

「可愛い綺麗は当たり前」のこの世界で、男はもちろん何人もの女性から「姉さん」と慕われ尊敬されている彼女には、洋一だけでなくシンも一目置いていた。

目の前でフリーズしているナースに、綾乃は少し不審な目をしたが、そこは夜の嗜みですぐに温和な笑顔に戻ると、もう一度丁寧な会釈をして歩き出す。

そんな二人を交互に見ていた玲は、去って行く綾乃を見ながらささやいた。

「知ってる人なの？」

「あ、ああ……まあな」

言いよどんでいるし、男言葉に戻ってもいたので、これは彼女かなんだと察した玲が、ふーんとうなる。

「まっ、バレなくってよかったじゃん。あたしの言ったとおりでしょ？ その姿なら誰もヤグザだってわかんないって」

「しーっ、声でけーって！」

小声で注意してから、凜花が早く立ち去ろうと階段に足をかけた時、背後で

「あの……ちょっと失礼」

と涼やかな声がした。

ぎくりと立ち止まる背中に、とろりとしたおだやかな口調の言葉が降りかかる。

「どこかでお会いしてますよね？　ちゃんとご挨拶もせず、どうも失礼しました」

―――― や、ヤベえ！　声を出したら綾乃は絶対に俺だと見破るだろう。ど、どうしょ！？

脂汗を流す凜花に、道を引き返してきた綾乃がゆっくりと歩み寄ってくる。

「お召し物でわからなかったのですが、お店以外でお会いしてますよね。すみません、お顔をもう一度……」
『いえ、あなたのお部屋で何度も』と凜花はおもったが、そんなことは言えるはずがない。

もはや絶体絶命かと思われた瞬間、いきなり横からヴィファイタジンの瓶が突き出されて、凜花のわき腹に深く埋まった。

『！！？』

なんとかうめき声はこらえたが、痛みに身体がくの字に曲がる。

―――― な、なにすんの玲！？

かがみこもうとした彼女の腕を荒くつかむと、玲は大きな声で叫びだした。

「このインランお姉！　よくもあたしの彼氏に手えだしたなっ。毎回毎回、人の男に色目ばっか使いやがって、このエロ女！」

眉を吊り上げて突然怒り出した彼女に凜花は一瞬とまどったが、すぐにこれはこの場をごまかすための演技だと悟り、とりあえずここはこの娘に任せることにした。

綾乃から顔をそむけてうつむき、恥じ入るような悲しむような表情を作ってみせる。

容赦の無い一撃による痛みも、この芝居に一役買っていた。

「あたしがちょっと部屋を空けた隙に、彼氏とあんなこんな桃色三昧！うーん、ゆるせん！あれだけやっというてあたしが気がつかないとも思った？どうせまたそのエロいコスで誘惑したんでしょ。ちょっとこっちなさい！今日こそ決着つけようじゃないのっ」
言い終わると玲はくると綾乃の方へと向きなおし、

「ということで、どこのどなたかご存知ありませんが、あたしたちは取り込み中ですので、これで失礼します」

そう一方的にまくしたてた後、ぺこりとお辞儀すると、凜花の腕を引っ張って足早に歩き出した。

「このバカ姉！コスプレ好きのヘンタイ！それからえっと・・・
尻軽女！」

思いつく限りの罵詈雑言を口にしながら、風のように去って行く玲と凜花の背中を見送って、綾乃はその場に立ち尽くしていた。

しばらくそうしてポカーンとしていたが、やがて我に帰ると、「あらあらまあまあ」などとつぶやきながら動き始めた。

数歩行ったところで一度足が止まり、うふっと笑ったような気配がしたが、それも一瞬のこと。

綾乃はまたいつもの優雅な足取りに戻って、店への道を歩み始めた。

綾乃 1

結局その夜はそれから何事も起こらず、中央公園の一角に住んでいる人たちのところを訪れて酒や食べ物でねぎらうと、そのあと大宴会となり終わった。

翌日の午後まで眠ってから、洋一はいつものように夕方に組事務所に顔を出した。

自分のオフィスへと行こうと足を進めていたら、さっと横合いからシンが出てきて耳打ちする。

「おはようございます兄貴。・・・綾乃姉さんが見えになります」

「え？」

「お部屋の方にお通ししますので」

「・・・・・・・・」

なんの用だ、とは思わなかった。

「・・・・・・・・このタイミングでやってきたということは・・・・・・・・ダラダラと洋一の顔に黒い幕が下りてきた。」

その顔を、昨夜の一部始終を見ていたシンが、痛ましそうな目をして見つめている。

「・・・・・・・・兄貴・・・・・・・・お可哀想に。玲の奴、もっとうまい誤魔化し方はなかったのかっ

そう己が妹を恨んではみたが、綾乃と洋一の双方に顔を知られているので出るに出不れず、物陰で一人やきもきしていた自分にその資格は無いと悟って、口を強くつぐんだ。

がちやりとドアを開けると、デスク前のソファ―に腰掛けた綾乃がこちらをむいた。

昨夜とは違って、落ち着いた菖蒲柄の和服をしどけなく着ていた。すばやくいつもの爽やかな笑顔を作って声をかける。

「おう、綾乃、めずらしいな、事務所に来るなんてよ」

「おひさしぶりね、洋ちゃん。ずいぶんとご無沙汰だったから、ちよつとのぞきにきたの」

とろりとした声と笑みを浮かべて彼女が答える。

だが言葉の影には、ちくつとトゲがあった。

―――な―んだ。最近連絡してなかったから、いやみ言いにきただけかも

少し明るい気分になって、洋一は彼女の向かいに座ると、煙草に火をつけた。

『あれ、そういえばシンがいないな』と思っていると、綾乃の声がした。

「ここのとこちつとも顔を見せてくれないから、てっきりあの真子とかいう子のところかと思ってたけど……」

顔を何かチクチクとしたものが刺してきたが、百戦錬磨の彼はいつでもに動じず、さてなんと言い訳しようかと余裕をもって考えていたところに、すうーっと幽霊のように次の言葉がきた。

「まさかあんなおいしたして遊んでたなんて……」

煙草を口にしようとしていた手が止まる。

そんな彼の変化を楽しそうな表情で眺めながら、おっとりとした口調で綾乃はつづける。

「気づいてないと思った？」

「え、なんのはなし？」

「あらあらおとぼけ？おっほほほ」

口に手を当て、ころころと上品に彼女は笑う。

「かわいく化けてたわよねえ。いっしょにいたあの娘の仕業かしら？
でもこの綾乃の目をあんまり安く見てもらっちゃ困ります」

「・・・・・・・・」

「何度もこの肌で感じてきた、洋ちゃんの顔と身体ですもの、すぐにわかったわ」

そういつて白い指を和服の袂に揃えてみせる。

やがて固まってる洋一の腕へと手を伸ばすと、煙草を奪って自分の口に含み、うまそうに目を細めて煙を吐き出した。

「まあ、他の子のところじゃなかったから安心したけど・・・・・・・・
ちよつとああいふことになった事情を聞きたくってこうして顔を
出しました」

にこりと妖艶な笑みを浮かべて足を組む。
裾から美しい足がこぼれて、それがさらに凄まじい色気を醸し出した。

「話してもらいましょうか・・・・・・・・」

柔らかいが拒否は許さぬ口調だった。

こちらと壁に掛けられたアンティークな時計が時を刻む。

洋一から奪った煙草を吸い終えた綾乃は、西陣織の巾着からセーラムのメンソールを取り出すと、しなやかな指で一本つまみあげて火をつけた。

爽やかなミントの煙が二人の間をゆっくりと漂い始める。

5分、10分

洋一は『シンが現れないか』とか『電話が入ってこないか』とか期待していたが、一向にその気配は無い。

「えっと、ちょっとこれから仕事が……」

「今日の予定はシンちゃんから全部聞いてます。急ぎの仕事が無いってこともね」

言葉を途中でさえぎって、綾乃はさらりとそういった。

15分、20分。

二人の周りはまるで時間が止まっているかのように、物音一つ聞こえてこない。

「そだ！ コーヒーでも飲みながら……」

「大丈夫です。話が終わるまで誰もこの部屋に入らない……」

電話も取り次がないように頼んでおきました。あ、そうそう。携帯は切っておいてね、洋ちゃん」

「……」

25分、30分。

じれる洋一とは対照的に、どんどんと綾乃の腰はすわってゆく。

事がはつきりとするまでこの女は千年でもここにこうして座っているのだ、そう錯覚してしまうほど、堂に入った居座りぶりであった。そして一時間が経過した。

洋一は自分の煙草を吸いきってしまい、灰皿に目を落とす。そこにセーラムの吸殻は2本しかなかった。

フィルターに口紅の跡を残さない、たしなみのある吸い方に感心しつつ、テーブルに置いてあった彼女の煙草の箱にそろりと手を伸ばしたら、華奢な指が箱を上から押えた。おもわず見上げると、そこにはにこにこ微笑む綾乃の顔。

「話が終わってから……ねっ？」

洋一はまたがつくりと顔をうつむけた。

ふうーっと息を吐いて、彼女は困ったような顔で、最後の追い討ちをかけた。

「それとも……雄五郎さんに聞いた方が早いかしら」

なぜか自分と仲の良い老極道の名を口ずさんで、くすりと笑う。

完敗であった。

かくして洋一は誠に不本意ながら、己の女装癖を綾乃に白状することになった。

他の彼女たちならいざ知らず、綾乃にはどんな言い訳や色仕掛けも通用しないことを、彼はよく承知していた。

この街N01の称号は伊達ではないのだ。

全てを聞き終えた綾乃は、へんな大汗をかきながらうつむく洋一の前に、「ほほほっ」と楽しげに笑った。

「洋ちゃんはいずれこんなことになるんじゃないかって思ってたけど……まあゲイとかバイじゃなくてよかったわ」
そして今度はいたずらっ子の目になると、

「そういうことなら、この綾乃も協力させてもらいます。今度はもっとうまく、もっと綺麗に化けさせてあげるわ。おーっほほほほ」

そう高らかに宣言すると、手の甲を口に当て、甲高い声で笑い出した。
えっという顔をする洋一を見つめながらまたいう。

「なかなかうまく化けてたけど、まだまだよ。やっぱり高校生くらいのキヤリアじゃ、まだあのくらいのもんよねえ。でも大丈夫。今度はこの綾乃がお手伝いするから。本当の女つてものを魅せてあげるわっ！」

また口に手を当てて笑い始めた彼女を見ながら、『こいつ、本当は玲に対抗心燃やしてるんじゃないか?』と疑う。

しかし次から次へと自分の秘密を知る者が増え、そしてその人物たちがことごとくその秘密を大きくしていつているような気がしてきて、洋一は身震いした。

玲といい綾乃といい、彼の女装癖を叱責せず、かえって煽るようにそれに参加しようとしているこの二人。

実は彼女たちも普通ではなかったのだが、またやってきた新しい厄災に怯えるこの男には、それがわからないのであった。

綾乃 2

それから綾乃に半ば拉致され、女装ルームへと行かされた洋一は、やがてやってきた玲と彼女を引き合わせた。

なんとなくこの二人は合わないだろうなと思っていたが、案の定、玲と綾乃はすぐに角を付き合わせ始め、洋一を気まずい空気の中に叩き込んだ。

ナチュラルで可愛い路線を主張する玲と、艶やかで色気のある大人を演出しようとする綾乃が真っ向から対立して、目の前で争っている。

「ああ、もうっ！これだからお水の人はダメなんだからっ。凛花は元の顔がケバいいんだから、もっとかわいい感じにしなきゃいけないです！」

それに対して綾乃は、洋一と同じくらいの上背から、目を細めて玲のことを見下ろしてこたえる。

「ほほほっ、世間なれしてるようでも玲ちゃんはまだわかってないのよねえ。いい？洋ちゃんの濃いさを逆にもっと引き出して妖艶な風にしないと。だってその方が話題性も高くなって、あなたも記事にしやすいでしょ？」

口元に笑みを浮かべたままおっとりとした声で話す彼女に

「おい、それマズイって」

と洋一は突っ込んだが、綾乃はそれを一瞥だにしなかった。

黙り込んで考え出した玲に、勝ち誇った女帝はさらに畳み掛ける。

「コンセプトは天女さまなんですよ。だったら可愛いだけじゃダメです。もっとこう、きらびやかで気高くないと」

「……そもそも女装好きのヘンタイで、世間のつまはじきのヤクザに気高さを求めるのがまちがってると思うけど」

「あらあら、それじゃあコンセプト自体の変更を考えなきゃね」

ふてくされた玲の言葉に、綾乃は形の良いあごに指を当て、真剣に考えはじめた。

どうも基本設定から自分が考えて、一気に主導権を握ってしまおうというもくろみらしい。

すぐにそれを察知した玲が、わざとらしく壁にかかった大きなのっぽの古時計に目をやりつぶやく。

「ほら、綾乃さん。もう仕事の時間ですよ。こいつはあたしにまかせて安心してお店にいつてね」

コンマ3秒、綾乃の眼がギラリと剣呑な光を帯びたのに、洋一だけが気づいた。

「あらあらまあまあ、それじゃあ今日のところは玲ちゃんにおまかせするとして、私はちよつと行ってきますね」

口調は相変わらずとろりとしていたが、言葉に鋭いトゲを残して、彼女は微笑みながらソファアの脇に置いてあったバッグを取り上げようとした。

身体を傾けて拾い上げる瞬間、そこに座っていた洋一にだけ聞こえる声で早口にささやく。

「いいこと？ この娘の言いなりになちゃだめよ。もしそうなら……わかってるわよね？」

剃刀を首に当てられたようにビクツと背筋を伸ばした洋一にかまわず、綾乃は口に手を当てて「ではではまた」などと言って部屋を出

て行った。

キツと玲が怒った顔を洋一に向ける。

「ちょっとあの人なんなのよ、もお！横から急に口はさんできて、言いたい放題の狼藉三昧！腹たつなあ」

「……こないだから思ってたんだけど、おまえってちょい時代劇はいつてるよな、しゃべりが」

「うっさい！好きなよあの言い回しがっ。女子高生が時代劇ファンで悪いの？」

「悪かないけど……」

「そうじゃなくって、あの人なんとかして！」

「ムリそれ。だってバレちゃってるから、そんなことしようとしたら綾乃の奴は速攻で組中、いや街中にバラして回っちゃうし。そうになったら俺アウトだし」

「チッ、ヤクザのくせにだらしないわね！」

同じことで洋一を脅迫しているくせに、それを棚に上げておいて玲は舌打ちするとにらんできた。

それを無視して、洋一は煙草を取り出して火をつけると、プカーッと煙を吐きながらたずねる。

「で、今夜はどうすんだ？」

「あんたはどうしたいのよ？」

その言葉を聞いて、ジーンと恥骨にあの甘い痛みが走った。

「は、うーん……」

おもわず変な声がもれて、あわてて洋一は玲から顔を背ける。

———あの夜から恥骨の奥がおかしい……てかなん
なんだよこの感じは！？ 段々ひどくなっていってる気がするし
挙動不審な男に、玲が投げやりな口調でまたたずねてきた。

「でー、凜花さんはどうしたいのー、今夜は」

玲にはまだ、これはバレていないらしい。

己の変化におののきながらも、洋一は恥骨の疼きから眼をそらすよ
うに、今夜のチョイスを考え始めた。

実はその身体の変調は、ある意味でとても重要な変化の兆しかった
のだが、今の彼にはそれに気づく余裕はなかった。

陥穽

その頃、同じく自分の変化にとまどっている者がいた。

男は暗いワゴン車の運転席に深く身を沈め、険しい顔をフロントガラスに映している。

その鋭い眼は虚空へとそそがれていたが、外を見ているわけではなく、己の内側へとむけられていた。

「ふう・・・・・・・・」

細く息を吐いて、ドリンクホルダーに置いてあったおしるこドリンクの缶に手を伸ばし、一口すすする。

脳が溶けるようなこの甘さが男は好きだった。

だが『甘い』という単語が、男がさっきまで考えていたことを呼び覚ます。

目がちらりと助手席へとむけられた。

暗がりなのでよくは見えないが、何かスナップ写真のようなものがシートの上に重ねられている。

男は見ているいけない物に視線を走らせたことを恥じるように、あわててまた前を見た。

だが数分すると、またとなりを見てしまう。

どれほどそれを繰り返しただろう。

やがて絶えかねたように、そっと左手がナビシートへと伸びはじめ、上にある物をつまみあげた。

汚さぬように慎重に自分の前へともってくる。

ハンドル周りにわずかに差し込んだ月明かりに照らされて、男が見ているものがやはり写真であることがわかった。

そして、それを持つ手が震えていることも。

写真には、おどろいた顔でこちらをみている美女の姿が写っていた。

男の指が無意識に写真の美女の顔へ伸びる。

そこでハッと気がつき、伸ばそうとしていた指を拳に握って何かに耐えた。

やがて食いしばっていた口から、聞き取れないほど小さく声がもれだした。

「メイド・・・猫耳・・・ナース・・・ それは反則です
兄貴っ」

そう、もう皆おわかりのことだろう。男はシンであった。

そして写真の女人も予想通り、ネコ耳アリス、桃色ナースと女性化している洋一⇒凜花の姿だった。

なぜ自分がこの写真を見たくなるのか、シンにはわからなかった。妹からこれを預かった時まで、そういうことはなかったと思う。

「兄貴の女装お出かけの出待ち」という、普通の人なら情けなさで首をくくりたくなる状況の中、手持ち無沙汰で写真をながめているうちに、段々とそれはシンの心を浸してきたのだった。

そう思い起こしていると、また写真をうつとりと見ていることに気

づいてシンは固まった。

そろりとバックミラーに目をむけると、そこには自分に一番似合わない顔があった。

ミラーに映っていたのは、だらしなく口元を緩めて微笑む卑猥な男の顔。

叫びたくなるような自己嫌悪に襲われて、きつく目を閉じる。

やがて目尻に浮かんでくる涙。

シンは泣いていた。

あまりに浅ましい今の己の顔を恥じて。

だが口は彼の本心を吐露した。

「凛花さん、かわいいっ!!!!」

一人の男が甘い闇へと落ちた瞬間であった。

凛花と化した洋一のその夜のお出かけ服は、ハリウッド映画のスクリーンから抜け出てきたような、海賊女王だった。

マンション下のエントランスに彼女が姿を見せたとき、シンは頭をハンドルに打ち付けてクラクションを鳴らしそうになった。

頭にでっかいドロマークの三角帽、そして足首まであるロングコートを太いバックルの皮ベルトでキリリと締めたいかめしい後ろ姿を見て、「カッコイイ」としびれる一方で少し安堵した気分になる。微妙に頬を赤く染めながら、またドリンクホルダーに手を伸ばして微笑んだ。

「今夜は色気のある格好じゃないんですね、凜花さん」

その口調はまるで、露出ファッション好きの彼女をもってやきもきしている彼氏のようなだったが、当然シンは気がついてはいない。だが、くると凜花が自分の方へ身体をむけた時、ぶほおーっとするドリンクを吐き出した。

大胆に大きく前が開かれたコートからのぞいていたのは、膝上20cm以上は優にあると思われる、白いタイトなミニスカートだったのだ。

犯罪的なその短さは、ある意味、ネコ耳や桃色ナースより危険なエロティシズムを醸し出していた。

シンの手の中で、罪の無いしるこドリンクの缶がグキリと潰れる音をたてる。

「そ、それは……それは短すぎだよ凜花さんッ！」

わなわなしながら叫んでしまった自分の台詞に、すでに女装時の洋一を兄貴ではなく一人の女性として認識し始めていることを感じて、シンは己の変化に蒼ざめた。

なぜなら言葉にも口調にも、目上の者に対する遠慮の部分がまったく無い。

赤くなったり青くなったりしながらも、とりあえず二人を追うべくワゴン車から降りた。

敏捷で動きもしなやかな彼が、ドアを開けるととき転がり落ちそうになって車外へ飛び出したのは内緒である。

「ねえ玲。よくもまあこんな服もってたわね」

手をひよいと上にあげて、自分の着ているパイレーツクイーンの衣装をながめながら、半ばあきれた声で凜花がいう。

そう、今夜のチョイスは玲プロデュースだったのだ。

本当はボンデージファッションに挑戦してみたかったのだが――
――しかもそれが凜コレクションの中に当然のようにあった――
――さすがに恥ずかしくて言い出せず、その他の服をあれこれ選んで迷っていた時に、玲が自分のさげてきた紙袋から取り出してきたのが、いま着ているレディパイレーツだったのだ。

「学祭の舞台で演劇部が使った衣装でよさそうなの選んで持ってきてあげたの。ほかに軽音がライブで着た服とかもあるし」

くすりと笑って玲がそうこたえる

造りはさすがに母の物と比べると雑でチープだったが、これはこれでなかなか新鮮だと凜花は思った。

「それと裁縫オタクが友達にいてね。凜花のことは内緒にしてこっそり聞いてみたら、費用と時間をくれて好きなイメージを描いてもってきてくれたら、なんでも服をつくってくれるって」

「なんでも!？」

おもわずおっきな声をあげてしまって、あわてて彼女はグロスで照かる唇に手をやった。

——— なんでもって……… じゃあ、あんなのとかこんなのかも！？ うわっ、さすがにこれは大胆すぎかなあ

いったいどんな服をイメージしているのだろう。

真剣に考えはじめた凜花を横目でみながら玲は話をつづける。

「とりあえず今夜は街のパトロールからいこっか」

「パトロール？」

「そっ。 ケンカの仲裁、酔っ払いの保護、悪者の取り締まり」

「………それって警察の仕事じゃん」

ぽつりと突っ込んだが弱かったのか無視された。

「じゃ、アーケードの端から端までいってみよーっ！」

玲が早足で歩きだす。

あわてて凜花はその後ろに付き従ったのだった。

真紀 1

はじめに彼を見つけたのは玲だった。

「あれ、あの子って凜花のお仲間じゃない？」

そういわれて人気の少ないアーケード内を見回したが、ヤクザらしい男の姿は無い。

説明が足りなかったことに気がついた玲が、言葉を付け足す。

「仕事仲間じゃなくって、女装仲間よ」

おもわずぎょつとしてあわててもう一度前を見ると、100メートルほど先を、少しうつむきかげんに後ろ手を組んでこちらに歩いてくるメイドの姿がみえた。

「あつ、あの子こないだの……」

「え、こないだのって？」

「あたしが初めて会った女装っ子」

間違いないと思った。

現在は女装のおかげで記憶力・知性ともにメルトダウンしている洋一→凜花だが、あの女装っ子と出会った時はまだまともだったのだ。それにヤクザ稼業の基本は『人の顔、そして街の地理を覚える』なので、記憶は正確と思われた。

凜花Ⅱ洋一にとって『運命の人』とでも言うべき彼は、二人には気がつかない様子で、ゆっくりと小柄な身体をこちらにむけて歩いてくる。

「へえ、あれが凜花の女装癖の師匠なんだあ」

妙に感心した風に玲がいった時、とつぜん若い男の音がアーケード中に響いた。

「あーっ、マキマキみっけ！」

その大声に、あざ笑うような他の男たちの声がかぶさる。

そして、急に前を歩いていたメイドの彼が、つんのめって石畳の上に転んだ。

その後ろから姿を見せたのは、大学生かと思われる数人の男たちだった。

顔をしかめて起き上がろうとする女装っ子の肩を、一人の男が突き飛ばしてまた転ばせた。

そいつがニヤニヤと笑って話しかける。

「マキマキまだ女装してお出かけしてんのかよ。ほんと好きだね」口調はゆっくりとしているが、あきらかに転がっている彼をバカにしている。

どうもこの男に突き飛ばされて転んでしまったらしい。

怒っているような怯えているような表情で、横座りのままマキマキと呼ばれた彼は、自分を突き飛ばした男を見上げていたが、

「ほーんとマキマキは変態だよなあ、毎日こんなかっこうでお散歩してるんだからよ」

その一言でうつむいてしまう。

男たちはそんな彼を取り囲んで、中腰になって肩や顔を小突き始めた。

「ちょっと、あれ・・・」

玲が言い終わるより早く、凜花が前へと走り出た。
駆け去る瞬間にその横顔を見た玲が身をこわばらせる。

初めて見る、真剣な怒りの表情。

ヤクザ顔にも驚かなかった彼女が、その表情におびえた。

恐ろしいスピードで凜花は男たちに駆け寄ると、一番そばでかがんで女装っ子を小突いていた男の身体を、ローキックで吹っ飛ばした。

「うわぁ！」

後頭部を狙った容赦の無い蹴りに、男は一声叫んで床にのびる。
もうそれにかまわず、彼女は次の男にむかっていた。

凜花の行動にあやうさを感じた玲が叫ぶ。

「凜花！ やりすぎちゃダメッ！」

だがそういった時にはすでに、あと一人を残して全員石畳に転がっていた。

彼女の左手に光る物が出現したのを見て、玲が走った。

「斬り刻んであげよっか、僕？」

ひどく冷たい声が唇からすべり出て、凜花⇒洋一はおどろいた。

「――俺はなんでこんなに怒ってるんだ！？ たかがガキのじゃれあいなのに」

だがそのとまどいとは裏腹に身体は勝手に動いて、顔をゆがめて逃げ出そうとした男を足払いで転がすと、咽喉にブーツをめり込ませて締め上げていた。

怯える男を見下ろしている内に、またあの熱いものが恥骨の奥に宿

り、身震いするほどの快感と共に急速に成長してゆく。

だが今夜はその成長に比例して、今までに無かった、強烈な暴力への欲求が高まってくるのを感じた。

「凜花ッ、ストロップ！　そこまで！」

玲が自分の目の前でそう叫んで手を広げたので、ハッと我にかえった。

ゆっくりとブーツをどけると、転がっていた男は悲鳴をあげて逃げ出した。

「もお、やりすぎだって！　あんたが悪役になったら記事になんないじゃんっ」

ぷりぷりと玲は怒ったが、すぐに座り込んでいた女装っ子に声をかけた。

「大丈夫？　なにあいっら、知り合い？」

肩に手をかけて優しくそうたずねる玲に、恥ずかしそうに彼は顔をそむけた。

「とりあえずまたあいっらきたらいけないから、送って行ってあげる。さっ、立って」

手を貸して彼を立ち上がらせた玲が、凜花を見た。

彼女は呆然とした顔で、小柄をしまうのも忘れて突っ立っている。

「ちょっと凜花、どうしたの？」

その声にはっと身を震わせると、玲の方を見た。

「なんでもない……」

だがその表情と声に、玲は凜花の異変を感じた。

鋭いこの娘にしてはうかつだったが、これが明確に出た女装時の洋一の異変だったのだが、まだ若い玲には、その異変の意味を理解することはできなかった。

真紀 2

だが後ろ隠れて見ていたシンだけは、その異変を正確に察知していた。

凜花が男たちにむかって走り出した瞬間から、その姿に恐るべき殺気を感じていたのだ。

それはヤクザとしての洋一の時にも無い殺気。

理由まではわからなかったが、シンは危険を感じて、いつでも止められるように構えていたのだ。

――――凜花さんになっている時の兄貴には、なにか負の変化がある

玲に止められてすぐに攻撃をやめたことにほっとしながら、変化の意味を解こうとしたがわからなかった。

しかし胸に刻んで忘れないことにした。

その変化が、洋一の身に何か良くないことを起こしそうな予感がしたからだった。

シンが物陰でそうやって考え込んでいると、女装子らしき少年を先頭にして、凜花と玲が動き出すのが見えた。

思考をそこで中断して、ふたたび追跡を開始する。

三人はアーケードをそれて裏通りへと入ってゆく。

どうやら少年を保護して家まで送り届けてやるように見えた。

とりあえず急な出来事は起こりそうにない、そう判断して、ほっと

緊張をといた。

彼らの後を追いながら、今のうちにもう一度さっきの洋一⇒凜花の異変のことを考えてみることにする。

あの時の凜花から放たれていた殺気は、「半ば本気だった」そうシンは思う。

洋一の付き人になってから、ずっと彼のことを観察しているが、さつきみたいな危険なものは、まだ一度たりとも感じたことはない。組長代行という立場の人間なので、直接自分で手を下すことなどありはしないが、やはりヤクザであるから、怒気を発することはよくある。

シンはその執事的な洞察力で、他人のあらゆる感情を察知し、そして見分けることができたが、そのカンをもってしても、今までの洋一からあのようには剥き出しに近い殺気など感じたことはなかった。しかもそれを発した対象は、別に恨み重なる奴とかでもない。

殺気も気になっていたが、シンはこちらの方がもっと問題だと思った。

どう表現したらいいのかわからないが、それは制御の効かないとても危ういものに思えてしかたがなかったのだ。

――― どうも気になってしかたがない…… 後で玲にもあの時の凜花さんの様子を詳しく聞いてみよう

そう考えて、前を行く三人にまた意識を向け直した。

アーケードのある繁華街より少し北の方角。小高い丘を越えて下った辺り。

大学や大きな病院が立ち並ぶ区画の中に少年のアパートはあった。その二階にある彼の部屋に玲と凜花はいた。

別に招かれたわけではなく、女装子という者に興味をもった玲の記者スキルがまた発動して、半ば押しかけ気味に乗り込んでしまったのである。

しかしそこは彼女の期待していた、ズラリと女物の服が並ぶ魅惑の部屋ではなく、男にしてはきれいに整頓された普通の一人暮らしの部屋で、少しがっかりしてしまう。

まあ落胆の理由は、凜花の女装ルームを初めに見てしまっている、というのが大きかったのだが。

女装子さんは自分のことを、みやびの雅野 まき真紀と名乗った。

「名前まで女の子みたいね」

玲の口から率直な言葉が音速で飛び出し、となりに座っていた凜花が彼女のわき腹を肘でつつく。

「はい。 そうなんですけど、それ以外でも僕は小さい時から女の子っぽくて…… それでよくいじめられてました」

丸いガラステーブルをはさんで座る二人の前で、正座して話し始めた真紀は、そういつて少しうつむいた。

「女の子の服や持ち物が気になったりと、僕も前からヘンだなんて自分で感じてたんです。それが大学に入って一人暮らしをするようになって、その思いが段々と我慢できなくなってきて」

「で、ついにやっちゃったと」

真紀の言葉を引き取って玲はそういうと、ふーんとあらためて目の前の男をながめた。

身長ギリギリ160cmの自分と同じくらいの、小柄で細い体型をしている。

メイクで本当の顔はよくわからないが、キリッとしているとか男らしいとかではなく、優しいユニセックスな顔立ちなのだろうと思う。着ている服やかぶっているウィッグは、凜花が身に付けている物と比べたら、全然お話にならないくらい安物に見えた。

―――― まっ、凜花は特別なヘンタイだもん、比べちゃこの子がかawaiiそうだわ

じろつと横目で玲が自分を見たので、凜花は居心地悪そうにモジモジとする。

「はじめは部屋の中で一人で楽しんでただけだったんですが、そのうちにどうしてもこの姿で外を歩いてみたくなって……それで思い切って外出したときにあいっらに見られてしまって……それから会うたびにいじめられるようになったんです」

とつとつと語る真紀の話を聞きながら玲は、ほぼ同じ経過をたどって女装化した凜花の方にまた目をむける。

―――― この真紀って子には同情するけど、なんで凜花には

そういう感情がまったく湧かないのかな、あたし
それは凜花に変化していない時、すなわち元の洋一に、「可愛げ」
とか「か弱さ」とかがまったく無いのがそう思う理由だったが、ヤ
クザの二代目を一時的に支配下に置いているこの女子高生は気づく
はずが無い。

真紀 3

「でもさっきは助けてくれてありがとうございます。最近あいつらのやってくるのが段々ひどくなってきたんで……」
ほんとはさっきもすごく恐かったんです」

真紀はわざわざテーブルから離れると、深々と二人に頭を下げた。

「段々として、どんな風に？」

「あの…… ちょっと女の子の前では言えないような……」

言いよどんでまたうつむく。

恥ずかしがっているのかと思っていたら、肩が震えていることに気がついて近寄ってみると、真紀は泣いていた。

「見つかったらひどいことされるのはわかってたんです。でも、どうしてもこの格好で出歩くのをやめられなくて。もう最近はこのままどっかに飛び込んだじゃおうかって……」

「ちょっと待ったっ！ そんなにひどいことされてるわけ？」

辛さなのか羞恥心なのかわからないが、真紀はポトポトと涙をこぼすだけで、いじめの内容はいつてくれない。

玲はさっと凜花のそばにすべると、耳にささやいた。

「凜花、あんた聞いたげなさい。 ほら、あんたおとこ……」

「

ばっと凜花が玲の口をふさぐ。

そして彼女の身体を抱え込んで玄関まで連れてゆくと、目を吊り上げて怒った。

「バツカ！おまえ口軽すぎだつてっ。いま言いそうになったろ？」
口調がすっかり元に戻っている。

「うるさい！　てか今のあんたのしゃべり方でモロバレじゃん」
つい正体を明かしそうになったことは棚に上げて、玲は逆ギレして
ブンツと横をむく。

「——こ、こいつ・・・身内ならエンコの一本も飛ばして
るとこだぞっ。絶対にこいつは俺の味方じゃない！
ワナワナしながらこつちを睨んでいる姿を見て、少しバツが悪くな
ったのか、玲はあわてて話を元に戻した。

「それよりちゃんと話聞いてあげなきゃかわいいそうでしょ？あたし
じゃ言えないっていうんだから、あんたしかいないじゃん」

「聞く必要ないって。だいたいわかつから」
「えっ」

おどろいた玲から顔をそむけると、嫌そうに言葉を吐き出した。

「ほら、あれだよ。性的ないやがらせっての？服を脱がすとかそん
なの・・・」

「・・・」

「いるんだよ、そういう性根の腐ったガキがさ」
本当はもっと酷いことをされているんだろうと見当がついたが、玲
に遠慮してソフトに作り変えて話したのだ。
それでも彼女はショックを受けたようで、目を見開いて固まってし
まった。

やがて見ている目の前で、玲の頬に涙が伝った。

「ひどい・・・それはひどいわ」

それを見て凜花⇒洋一は舌打ちすると、「だから言いたくなかったんだよ」と苦い顔でつぶやく。

だがいつまでもそうして涙を流している玲の姿を見て、いつものエセフェミニンがよみがえったらしく、ガリガリとウィッグを黒い爪先でかき回しながら奇怪な声をあげた。

「わかったよ！　なんとかしてやりやいいんだろ？　やるよ、やりますわよ、オホホホッ！」

やけくそで甲高くわめく言葉を聞いて、玲の瞳に力が戻る。そして凜花の腕をつかんで揺さぶった。

「ほんと？」

「うん。まあ他人事とも思えないし」

「さすが凜花！」

そう叫んで笑顔でハグしてきた玲を引き剥がしながら、ふと嫌な考えが頭をよぎる。

————　実はさっきの涙も仕掛け・・・・・・・・ってことはないよね！？

しかしこの娘ならやりかねない罠だとも思ってしまう。

その戸惑いこそ、玲のことをイマイチ信用しきれていない証であった。

少々早まったかなとも思ったが、大学生の一人ぐらいにバレても、いざとなればなんとでもできると考え直して、玲と二人でまだ泣いている真紀のところへ戻った。

「少年。　ほら、泣くなよっ。俺がなんとかしてやっから」
突然聞こえてきた男の声におどろいて、真紀が泣くのをやめてきよ

とんとした顔で見上げる。

「え・・・男の・・・人？」

こくりとうなづいたのを見て、ポカンと口をあけた。

「気がつかなかったです・・・きれいな女の人だと思ってました」

「そう？　ありがとうっ」

今度はちゃんと洋一⇒凜花に戻って、妖艶な笑みを浮かべて笑ってやる。

まだ目を白黒させている真紀の前で、仁王立ちになって腰に手を当てた玲が叫ぶ。

「真紀くん、あたしたちにまかせといて！　世のため地のため人のため、街の悪党はこの戦闘天女が許しておかぬっ。さあ凜花、あなたの出番よ！」

「・・・・・・・・だから時代劇入り過ぎだって、それ」

だが今回も凜花⇨洋一のぼやきは、やはり玲の耳には届かなかったのであった。

嵐の前 1

結局その夜は、真紀の部屋で女装お散歩……。いや、玲の言う天女活動は終わった。

詳しい話は次の夜に凜花の女装ルームで聞くことにして、三人は解散すると、それぞれの場所に帰って眠りについた。

翌日。

いつものように夕方に事務所へ行き、一時間ほどヒマをつぶしてからそこを出た洋一は、夕日に照らされたビルの前で大きく伸びをした。

「おつかれさんしたッ、二代目！」 「お疲れさんッス！」

男臭さMAXの声に見送られながら、煙草を口にくわえて「さあ、女装ルームへいくか」と微笑んでいたら、

「りーんーかあああああああっ！」

という明るくでっかい声がして、ブツと煙草を吹き出した。

声が出た方にさっと目をむけると、女子高の制服である紺のブレザー姿の玲が、満面の笑顔で手を振ってこちらに駆け寄ってくるのが見えた。

洋一はすばやく背を向けたが、むこうの足の方が早かった。

二代目の手を取り、子犬のようにまわりつく女子高生を見た見送りの組員たちは、その光景に度肝を抜かれて、それぞれの表情で固まった。

とりあえず逃げるしかない判断した洋一は、自分にじゃれついてる玲を引きずりながら、早足で組事務所を後にした。

啞然としていた男たちの一人、中堅組員の狂介は思った。

————二代目ってなんでもアリなんだな……いいなあ
別な意味でそれは的中していたのだが、狂介にわかるはずもなく、仲間といっしょに夕日の中で立ち尽くすのであった。

事務所が見えなくなった地点で、洋一は玲の頭をわきの下に抱え込むと、小声で叫んだ。

「てめエ、絶対わざとやってんだろ、あア？ 秘密守る気なんか全然ないんだろ？ 俺を破滅さす気かこのやろう！」

楽しくまとわりついていた玲は、手を放すとポンツと横をむく。

「だーいじょうぶだって！ ちゃんと凜花って呼んだし。わかんないってばあ」

「おまえが俺に引っついてきた時点でおかしいんだよ。 てかなんで組まで追っかけてきてんだ！」

「ああ、真紀くんいっしょに迎えにいかうかと思って」

この娘の妙にズレたフレンドリー感覚についてゆけず、洋一は頭を抱え込んだ。

そんな二代目の姿を、玲は不思議そうな顔をして見ている。

「・・・・・・・・あのなあ。　ちっとは俺の立場っての考えてくれよ・
・・・・・・・・」
力なくつぶやいたが、やがてあきらめた。

―――　こいつは悪気なく人をドツボに落としてしまう天然小悪魔だ。・・・・・・・・おまけにちよつとマッドも入ってる。　へたにいらねえこと言えば、ますますこいつの罠にはまるだけだ

己の超弩級の変態ぶりを、成層圏の彼方まで吹っ飛ばしてのあまりな評価だったが、あながち間違っていないのが恐ろしい。

当の玲はといえば、もう先ほどのことなどすっかり忘れて、にこやかに笑いながら歩いている。

なるべく離れてその後ろをついてゆきながら、洋一はどうすればこの娘が持ってくる厄災から逃れることができるのかを真剣に考えるのだった。

嵐の前 2

同時刻。

真渦 雄五郎は紅椿一家会長の屋敷にいた。

おそろしく広い、四十畳はあろうかとおもわれる座敷の隅に端坐して、彼は背筋を伸ばして目を瞑っている。

開け放たれたふすまからは、見事に生い茂った松と大きな池が見えた。

街中にあるというのに車の音ひとつ聞こえてこないのが、この屋敷の広さを物語っている。

ただ、無音という訳ではない。

かすかだが、この端正なたたずまいの空間に不似合いな、荒い女の嬌声がしていた。

それが聞こえているはずなのに、雄五郎は顔色も変えずじっとしている。

やがてひとときわ高く甲高い声があがったかとおもうと途絶え、しばらくたってから、髪の薄い色白で小太りの男が座敷の中へと入ってきた。

趣味の悪いベージュのガウンを着込んだ男は、上座までゆくと、無遠慮に畳の上にごろりと身体を横たえた。

雄五郎は、ガウンからむき出しになった毛脛をがりがり搔くその男のそばににじり寄ると、野太い声で話し始めた。

「会長のお言葉を若に伝えてきましたが、納得していない様子でした。それにここ最近の若を見ておりますと、どうも稼業のことを嫌っているように思えてなりません。今はまだ大丈夫ですが、いずれ二代目となられるお方があの様に腰が据わっておられぬのでは、少々心もとなく感じます」

言い終えた後、しばらくは静寂が座敷の中を支配していた。

やがて紅椿一家会長・義隆は、煙草を取り出すと、口にくわえて火をつけた。

ふーっと煙を空へと吹き上げ、その口から、妙にねばりつくような声をだした。

「ヤクザ辞めたそうなんか？」

一拍おいてから雄五郎が答える。

「はい会長。この目にはそうみえました」

眠そうな目が雄五郎の顔を見た。

ある種の両生類をおもわせる、ぬめりとした眼だった。

「墨、入れたれ」

口の端に煙草をくわえたまま、畳に灰を撒き散らしながら言葉をつづける。

「カタギなんぞになれんように、立派な彫りもん背中にしよわせたれ」

「・・・・・・」

「そしたらちつとは腰も据わるやろ。それでしまいじゃ」

義隆はそういつて、鼻から煙を吹いた。

「わかりました。腕のいい彫り師をすぐ手配します」

その場で一礼すると、雄五郎は一度も表情を変えずに座敷を去っていった。

ひとりそこに残った義隆は、ゆっくりと煙草をふかし続ける。

薄く細められた目は、丹精に手入れされた樹木に向けられていた。

深沈とした一時の後……

ペキッ

虫のささやきさえ聞こえぬ無音の間に、何かを握りつぶす音がした。

無表情な義隆の手の中で、折れた煙草が白い煙をあげている。

次の瞬間に、それを庭にむかって投げ捨てるとつぶやく。

「……わしになつかん可愛げの無いガキやが、まあやることやってもらわんとのオ」

灰を散らして立ち上がると、また妾の下へといくために廊下に歩み出た。

義隆の背後で、庭に投げ捨てられた煙草がくすぶり、揺れる白い煙を立ち上らせている。

すぐそばを、大きな蛾がよたよたと横切るのが見えた。

嵐の前 3

洋一と玲が待ち合わせの場所であるアーケード西口に着くと、もう真紀がそこにきて立っていた。

少し短めの黒髪をして、チェックのシャツにデニムという、普通の男の子の姿だ。

「真紀くーん！」

うれしそうに手を振って駆け寄ってくる彼女に、真紀は自分も笑顔をみせたが、すぐ後ろにいる洋一の姿を見つけて顔をこわばらせる。玲はその変化にすばやく気づくと、短く耳打ちした。

「これ凜花だから。ヤクザだけど大丈夫、あたしがちゃんと管理してるからね」

うふふと笑うその顔をみながら、真紀は「ヤクザ」という言葉に口をゆがめた。

「ほんとに平気だってば。ほら、こわくないし、これ」

ヤクザを物扱いして腕を組んでくる玲をあわてて振り払う洋一の姿をじっと見つめながら、『本当にこれが昨夜の綺麗なお姉さんなのか!？』と疑ったが、自分を助けてくれた彼女を信用して、歩きはじめた二人についていく。

ただその足取りはまだビクビクとしていたが。

だがマンションに着いて女装ルームへと足を踏み入れた途端に、真紀の心配は吹き飛んでしまった。

「わぁーっ、すごい……」

感想が言葉にならない。

自分の持っている物とは数も種類も質もまるで違う、「凜コレクション」を目の当たりにしてしまったのだから無理はない。

見ているうちに段々と目と仕草が女性化してきた真紀を見て、玲がおかしそうに笑う。

今は己の所有物となっているコレクションを誉められ、洋一も満更でもなさそうな顔になると、ソファに腰を下ろして煙草を取り出そうとした。

その時、緋色の絹織りに菖蒲柄という、ド派手な和服を着込んだ綾乃が部屋に飛び込んできた。

彼女は場違いな若い男がいたので一瞬、おやつという目をしたが、すぐにきりつとした表情になって洋一の方へ駆け寄る。

「洋ちゃん。ちゃんと新しいコンセプトを考えてきました。わたしが思うに、やっぱりちゃんとした豪華なドレスを仕立ててヨーロッパの世紀末風でいきましょ。ほら、こんな感じで」

そういつて綾乃がバッグから取り出して見せたのは、どう見ても「ベル薔薇」の漫画本だった。

「・・・・・・・・綾乃。宝塚じゃねえんだぞ」

「いいじゃないの。天女なんかよりよほどちゃんとした設定よ」

そのセリフを耳にした玲の目が、コブラを前にしたマンダースのように戦闘的な光を帯びる。

「ごめん綾乃さん。もう天女活動はきのうから始まっちゃってるのー。ちよっとおそかったね、あははっ」

あははとか言いながら、まったく目は笑ってなどいない。

しかもどう聴いても、その口調には嘲りの要素が多分に含まれていた。

しばらく綾乃は玲を睨んでいたが、やがてその目が洋一に移される。

「ちょっと洋ちゃん。これはどういうことかしら？」

『あれだけ釘を刺しておいたのに、それを破ってどうなるかわかってるんでしょね？』

と、その怒りの瞳は語っていた。

正確にそれを読み取った洋一が、答えに窮して目を泳がせる。

突然勃発した争いに巻き込まれた真紀は、おどおどしながら三人を交互に見ていたが、危険を感じてきたので逃げ出そうとした。

「あのお・・・お忙しそうなんで、また今度にします」

少しづつ玄関の方へと移動しながらそういった言葉に、綾乃が反応した。

「あら、あたしがいないうちになんか悪だくみでもしてたのかしらねえ」

「ちがうってば！ 真紀くんはあたしたちの仲間になったのっ。それにこの子はこのおじさんの女装の師匠なのよ！」

考えつく限り最悪の紹介をされた真紀が固まり、「おいおい、いつからチームになったんだよ」と洋一は突っ込んだが、目の前の二人は聞いていない。

やがて綾乃のトゲを含んだ薔薇の目が真紀の方をむいた。おもわずビクッと震えてうつむく姿を彼女は見ていたが、尖ってい

たその目が急に緩んだ。

そしてすると彼の目の前までいくと、品定めをするように上から下まで遠慮の無い視線を這わせる。

真紀が身体をまさぐられるような居心地の悪さに耐えていると、突然ふわりと抱き寄せられてぎよっとした。

「それじゃあ、あたしはこの子をいただきます。そして洋ちゃんなんかに負けない立派な女の子にしてみせるわ！」

あまりな展開にさすがの玲もついてゆけず、啞然とした顔をする。

——こ、こいつ。別に俺にこだわってたんじゃないで、自分で好きなように女装させれる奴がほしかっただけかつ！
さすがに付き合いの長い洋一は、すぐに彼女の真意を悟って憮然とした表情になる。

いきなり凜花をも軽く越える無敵の美貌を誇る女人に抱きしめられ、あまつさえそのふくよかな胸に身体を埋められて、真紀はむせ返るいい香りにクラクラしながらもわけがわからずに混乱した。

「よく見ると可愛い顔立ちだし、洋ちゃんより素質ありそうねえ」
綾乃は艶然と微笑むと、しなやかな指でつるりと捕まえている少年の顔を撫でた。

「あ……」

いけない喘ぎが真紀の口から漏れて、洋一と玲がぎよっとする。

その声に、綾乃がちろりと赤い舌を出して唇を舐めた。

「あらあらまあ、可愛い声で鳴くのねえ、ボーヤ。 そうだね！ お化粧が終わったら別の事も教えてあげましょうね」

彼女の言葉に己のプライドをいたく刺激された二代目が立ちあがって咆える。

「てめえ綾乃！ 俺の目の前でよくもそんなことを」
だが、彼は最後まで言い終えることができない。壮絶な色香をまとった女帝の眼が自分を射抜いたのだ。

そのある種の欲望をはらむ捕食獣の瞳を見て、ぞくりと背筋に寒気が走る。

―――― え、もしかしてこいつ、ちょいやバい趣味！？

どうやらこの綾乃、両刀使いの気があるらしい。

今や彼女に捕獲されてしまった真紀が、子羊のように震えている。

もう何がなんだかわからないまま、緊張の水位がひたひたと高まる。その最中、とつぜん玲のケータイが大音量で鳴りはじめた。

ダッダダダッ　ダダダッ　ダダダダダダダ♪　じい〜んせー
い　らくありゃ　くう〜もあるさあ〜♪

予告なく流れ始めた特徴のありすぎる歌と声に、空へ昇る龍のように高まっていた険悪な気が一気に落ちて地を突き抜け、リオデジャネイロまで到達したと言う。

しかもその着うたは、北島三郎ヴァージョンであった。

別な意味でフリーズしてしまった三人を睨み

「なによ！ 水戸黄門の、さぶちゃんのどこが悪いつてのよ」

と玲はぶつぶつ言っていたが、やがてパチンといい音を鳴らしてケータイを開くとボタンを押してでた。

それが合図だったように、三人はそれぞれの位置で座り込んでしまった。

「水戸黄門って・・・しかもさぶちゃんって・・・ おまえ俺よりヘンだぞ、それ」

ヤンキー座りでガリガリとボーズ頭を搔きまわしてぼやく洋一の耳に、はしゃいだ玲の声が入ってくる。

「わあ、レイラさんおひさ！なんか病氣ってきいてたけど大丈夫なの？・・・え、そなの？へえ〜いろいろ大変だったんだね」

玲を睨んでいた目をふと綾乃の方へむけると、彼女はまだ真紀の身体を抱えたまま、はんなりと横座りしている。

もがくこともできないあわれな少年の、首筋あたりを無意識にそつと撫でている仕草が、恐ろしいほど倒錯的だった。

「えええ！？ こっちに来るのレイラさん！ え、なんで？え、マジで？ えっえっ、それでそれで？」

洋一はやたらと「え」と「？」が混じる会話を聞きながら、ぶつちよう面で煙草をくわえると火をつけた。

ふうーっと紫煙を天井へと吹き上げながら、「さて、これからどうしようか」と考える。

綾乃のことはなんだか気にさわるが、別れる切れるという話ではないのでこのまま成り行きにまかせることにして、今日はここで解散しよう。

・・・とみせかけて後で戻って、今度こそ一人で思う存分女装を楽しもうと決めると、三人にバレないようにほくそ笑んだ。

その時、耳が痛くなるほど元気のいい叫びが鼓膜を刺し、おもわず煙草の煙を飲み込んでしまった。

「わかったレイラさん！このあたしにまかせといてよっ。 ううん、

迷惑だなんてぜんぜん思っていないよ。……たまりにたまつたそのうっぷんを、晴らしてやるのがあたしらの商売！ さあ泣くのはよしにして、どーんとまかせて！」

玲の仕事人口調を聞いた洋一の口が、イーッと横に大きく伸びた。
——— まずい！ こいつがこのしゃべりをしたってことは、
とんでもない事が起きる！

まだ火のついていた煙草を灰皿に投げ捨てると、脱兎のごとく逃げ出そうとした。

だがそれより早く、高そうなダークスーツの襟元がしっかと掴まれる。

引き離そうとしても、藻のように絡み付いて放れない。

「うんうん！ じゃあ詳細決まったらまた電話するね。レイラさんもそれまでおとなしくしてて、じゃ！」

ピッと切ったケータイを片手に、女子高生はニヤツと気味悪い笑みを口の端に浮かべた。

「送ってもいいの？ 神戸に……」

その言葉で、あの女形役者に三味線の弦を弾かれた悪人のように、がくりと二代目の首が落ちる。

泣くのがいやなら さあゝあゝるゝけゝえええ♪

でかい鼻の穴から抜ける歌声が、耳に聞こえてきた気がした。

嵐の前 4

少し時間が戻って、ここは紅椿一家の組事務所。

まさか玲が待ちうけているとは知らない洋一が、ウキウキとビルの階段を降りるのをみて、シンがすぐに追いかけるべく動き出そうとした時、おもわぬ人物から呼び止められてしまった。

「おう冴島。ちょっとこっち来てくれ」

やたらと重圧感にあふれる野太い声を背中に投げかけられて、胆の据わっているはずのシンが、斬りつけられたようにビクツとする。振り返るまでもなく、声をかけてきたのは相談役の雄五郎であった。早く追いかねければと、内心あせる気持ちを毛ほども見せず、慇懃に礼をして近づいてゆく。

「二代目の部屋までつきあってくれや」

そういつて歩き出した背中についてゆきながらも、彼はその執事的カンを働かせて、何か嫌な気配を感じ取った。

「お前、最近一人でよく動いてるみたいだが、いったい何やってんだ？」

応接用ソファにどかりと腰をすえ雄五郎はそう尋ねると、首を傾けてシンの顔を見上げた。

直立不動でその三白眼の圧力に耐えながらこたえる。

「二代目の言いつけで、フロントにできそうな商売と物件をあたってます」

嘘ではなかった。

洋一はヤクザとしてはとても使えないシンのことをあんじて、せめて組員籍から名前を消して、資金を自分が出してまっとうな会社をやらせる―― フロント・つまり企業舎弟 ――― つもりで、彼に準備するように言いつけていた。もちろんこの話は組内にも流してあり、相談役である雄五郎も耳にしているはずだった。

―― カマをかけられている。何かを疑ってるな、この男は瞬時で兄貴の忠実な番犬モードに入ったシンは、雄五郎のことをすでに上司とは見ていない。

こうなるとこの男は、普段の慎み深い遠慮というものが嘘のように消えてしまい、表面上はおだやかだが内面では極めて好戦的で疑り深い人物に変身してしまう。

そう、シンは己が兄貴のことでのみ、ヤクザになるのだ。

「何かそのことで支障でもおありですか、相談役」

「いや、別にねエよ。ここんとこ二代目の動きが妙につかめなくてな。それでなんかやってんじゃねえかとおもって聞いたところって腹よ。仮にも俺は目付けだからな。で、冴島。他には何も言いつかってねえんだな？」

「いえ、ございません。失礼ですが二代目はまだ組長修行中ですので、これといった仕事もございませんし。ですから女のところを渡り歩いておられると思います」

洋一の悪口を口にして、ズキリと胸が痛んだが、ここでこの面倒な男に目をつけられるのをさけるために、しかたなくそういつて雄五郎を見た。

わずかだが、目の前の男が息を吐きだしたのを見逃さなかった。

そして表情と照らし合わせて出た答えは、落胆と決意。

「ま、今のところはそれもしかたねえだろ。お前もお守りは大変だろうが、気入れてやってくれや。なんか困ったことがあったら俺に言ってくれ」

表面上は自分をいたわっているようなその言葉に、シンも儀礼的に礼を言う。

「話はそれだけだ。引き止めて悪かったな」

そういつて雄五郎は立ち上がると、大股な足取りで扉へとむかった。ドアを開ける前に一度立ち止ると、振り向かずに背後で見送るシンいった。

「冴島。 おめエが俺を見る眼……まるで仇みてえだぜ。 気をつけな」

びくっとしたシンを見もせず、雄五郎は部屋を出て行った。

絶対に気づかれていないと思っていた自信が音をたてて崩れてゆき、洋一のデスクに手についてうつむく。

無意識に手をやった額に、汗が浮き出ているのを感じておどろく。

「――― もっと気をつけて対応しないといけない、あの男には。

しかし「今のところは」とはどういう意味なんだ？ 正式に組長に就任するまでは、ということじゃなかった気がする。何かあるのだろうか？

見破られた驚きを上回る不安が胸中に生まれ、考え込んでしまう。しかし情報量の少ない今、その答えは見つかるはずもない。

「――― 兄貴の女装に気を取られているうちに、何か組内で事が始まっているのかもしれない。もっと俺が気をつけなくては

次に打つ手を考えながら、シンは女装ルームへとむかった洋一の元へ行くために、部屋を出ていった。

イレギュラーズ

またまた舞台は女装ルームへと戻る。

そこでは、着うたによって争いを防ぐという荒業を披露した玲が、あらぬ方向に燃える視線を投げながら演説をおこなっていた。

「いい？ 次の天女活動はすごいわよー。なんとライブの開催！」
三人の頭の上に？ が浮かぶ。

綾乃にぬいぐるみのように抱えられたまま、真紀がおずおずとたずねた。

「あのお・・・まったく意味がわかんないんですけど」
そうだそうだと残る二人もうなづく。

つい先ほどまでの争いなどけろりと忘れて、素直に話を聴き始めている洋一と綾乃を、真紀がヘンなものを見つけてしまった顔で見ている。

「えつとですねー。さっきあたしの友だちのレイラさんからテルきて・・・あ、彼女プロの歌手なんだけどね。それで・・・」
「ちょっと待て！ おまえ今さらっと大事なこと言わなかったか？ プロの歌手ってなんだよ」

話の腰を折られた玲が、ものすごく嫌な顔をする。

だがヤクザは人の言葉尻を捉えてイチヤモンをつけるのが仕事なのだ。

わからないことはそのままにしておけない。

しかしこの変わった女子高生に、そんなことは通じなかった。

「チッ、はじめは黙って聞きなさいよね！ まあいいわ。レイラさんはあたしがタウン誌の手伝い始めてすぐの頃に取材で知り合った人でね。そのときにファンになってずっと追っかけてただけど、一年前くらいかなあ、プロデビューして東京に引っかったの。それから電話でたまに話すくらいだったんだけど………すんごく歌うまくってね、マキシやアルバムでたらすぐ買って、みんなにも推してさあ………」

「待てコラッ！ 話がずれてきてっぞ。 てかレイラってあのソウルのなんとかって言われてるねーちゃん？　ぐわっ！？」

おどろいて疑問をぶつけていたところに玲の蹴りが腹部にはいり、洋一は悶絶した。

どうも二度目の待ったはNGらしい。

平然とヤクザに蹴りを入れた彼女を、真紀が目丸くして見つめている。

「聞けよ、まずはぜんぶ！　そうよ、ディーバって言われてるのよ。そのレイラさんがこっちに帰って来てライブやりたいんだって」

「あらあら、でもそれっておかしいわ。だってあの子ならこの街のホールでも足りないくらいの大物じゃない。それが玲ちゃんにライブやりたいなんて、なにか事情があるんじゃない？」

綾乃にまで突っ込まれて、玲は一瞬クワツと目を剥いたが、さすがに女帝に暴力を振るうわけにもゆかず、ダルそうな口調ではなしだす。

「それをいまから言おうとしてたんです。彼女が二ヶ月前から休養宣言してるのは知ってるわよね？　病气ってことになってるけど、

そうじゃないの。レイラさんほんとにロックやりたいらしいのね。こっちにいたときもロックバンドのボーカルだったの。でも彼女の声に目をつけた事務所はソウルでデビューさせた。そしてこのままその路線で売りたい。それでいざこざになって精神的にまいっちゃってダウンしたのが真相」

皆が聞き入るモードに入っただのを確認してまた語りだす。

「で、なんとか立ち直ったんだけど、まだ心は迷ってるらしいの。それで再スタートをきるためにこの街に戻って、もう一度だけロックでステージをやりたいって。でも事務所を通してそんなの実現できるわけがないから、自力で会場とか探してシークレットライブとしてやりたいんだって。それであたしのところに連絡してきたみたい」

語り終えたあと、この部屋に不似合いな静寂が漂う。

みんなそれぞれの表情で考え込んでいる風だったが、やがてカリカリと首筋を掻きながら洋一が口を開いた。

「大体わかったけどよ。おまえ簡単に請け負ったみたいだけど、これって大ごとだぜ」

「なんでよ？ あたし街の人に顔効くし、あんたもヤクザなんだからライブハウスの一つや二つ、すぐ話つけれるでしょ？」

「……………あのなあ。それやっちゃまうと会場を引き受けた方が迷惑すつだろうが。絶対に事務所側から圧力かかってくつぞ。そうなっちまったらヘタすりゃ経営難だぜ？ それがわかってっから、そのレイラって子も悩んでたんだろうが」

玲が言葉に詰まるのを、洋一は初めて見た。

心の中で『やった！』という快感が泡のように浮かんだが、困ってしまった顔を見てすぐに萎んでしまう。

「そりゃ俺がすこめば会場はどこでも押えられるぜ。……でもそれはやりたくねえ」

シンが聞けば「さすがです兄貴!」と、ナイアガラ瀑布のように涙するであろうセリフだ。

さつき洋一を脅したことは忘れて、玲は自分もそれはしたくないと思う。

これから取材で御世話になるし、またいつ別の職業の者と仕事をするようになるかわからないのに、街の人に迷惑はかけられない。妙に真剣な空気が流れ初めた時、かわいい小さな声がした。

「あのお……ストリートで、ゲリラライブでやればいいんじゃない……」

おどおどと真紀がそういった瞬間、三人の変わり者の目が一度に自分の方をむいたので、ヒツと悲鳴をあげてしまった。

「それーっ! いいアイデア! 真紀くんさっすがあ」

「おお少年、頭いいなおまえ」

「すごいわ真紀ちゃん。後でご褒美あげましょうね」

綾乃に額にキスされた真紀が「あわわ」といって目を回す。

それをムツとした顔でながめる二人。

「よしっ! じゃそれでいこー! ライブのくわしい段取りはあたしがするね。で、凛花は機材の調達と場所のセッティング」

「あのお……場所とかは決めないで、トレーラーかなんかあったらどこでもできて逃げやすいんじゃない」

「やっぱ真紀くん頭いいわ! じゃ凛花、そのトレーラーも用意してっ」

「ちょい待て! それってほとんど俺一人でやることになってねーか、

なんか？」

「あら、あたしもお手伝いするわよ。なんといっても玲ちゃんより顔が効きますから、おほほほ」

「……綾乃さん、あたしたちのチームに入るの？」

「あらあら、ここまで聞かせといてまだそんなこといつてるの？」
またにらみ合いを始めた二人のあいだに、真紀が割ってはいる。

「とりあえずここは臨時チームってことでどうですか？　僕もレ

イラのファンなんです。だからできたら手助けしてあげたい。ここは一時、手を組んでもらえませんか？　うぷっ！？」

話の途中で、いきなり今度は正面から胸に抱え込まれて、窒息しそうになる。

「気に入ったわこの子！　わかりました。貴方の為ならこの綾乃、目をつぶって手を貸します」

「……目をつぶるのはこっちの方だったのっ」

そっぽを向いて玲は小声でつぶやいたが、やがてあきらめたように承諾する。

「わかりました！　ここにいる四人が臨時チームであることを認めます！　とにかく急いだ方がいいみたいだから、各人すぐ準備に入っ
て。あたしは今からレイラさんにこのこと伝えて話を煮詰めるね」
うなづく綾乃と真紀に微笑むと、玲はケータイを開いて電話しはじめた。

「おい！　俺の話はどうなんだよ！？　てか女装全然関係ねえじゃん
それ！」

ほぼ9割方面倒な仕事を押し付けられたまま、三人に無視されて、
洋一は一人ワナワナと震えるのであった。

焦燥

イレギュラーズが結成されてしばらく経ったある夜、一軒の場末のバーにシンの姿があった。
客は彼ひとりである。

二日泊まりで他県で行なわれる会合に出席する洋一に、シンがついてゆこうとすると、

「おまえここんとこ休んでないだろ？たまにはゆっくり遊んでこい。組にも顔ださなくていい」

そう言われて、無造作に万札の束を渡されて置いていかれた。

安心して空港で二代目を見送りながら『そういえば兄貴が女装をはじめてから休んだことがなかったな』とぼんやりとおもった。
けれども、急にできた休日にはシンはとまどった。

洋一の世話以外、やりたいことがないのだ。

ほぼ無趣味のシンが、わずかに気を惹かれるのが甘い物だったが、それも店まで出かけてというほどではない。

なので休めといわれても、やることがなかった。

はじめに考えたのが、この機会に雄五郎の周りを探ってみることだったが、組に顔を出すなといわれているので断念した。

しかたなく部屋にもどって念入りに掃除・洗濯などしてみたが、それも午前中に終わってしまい、後はすることもなく本を読んだり映画を観たりして時間をつぶす。

しかしそれもすぐ飽きてしまい、ごろりとベッドに横になると目を閉じた。

すると、すうーっとまぶたの裏側に凜花の顔が浮かんできて、あわてて目を開く。

だが一度浮かんでしまったその顔は、もう消えてくれなくなった。

——— なんだ？　なんで俺はあの人のことなんか思い出しているんだ？

焦りながら寝返りをうつうちに、右手がシャツの胸ポケットに伸びそうになって、あやうく手を止める。

このまま部屋にいては危ない、そうおもって、シンは急いで起き上がると、ネクタイを締めずにスーツを羽織って外へと出た。

所在無く、行くあてもないまま、街を彷徨っているあいだも、凜花の顔が脳裏をよぎり続け、彼を悩ませる。

あるときはナース。そしてネコ耳。

そしてチャイナにレディパイレーツと、凜花は次々とその姿を変えては、シンの頭と心を翻弄する。

『シン！』

凜花が自分と呼ぶ声が聞こえてきて、シンは路上で固まった。

彼女が自分の名を呼ぶはずがない。これは己が造り出した幻の声・

・
・
・

そう気づいたときシンは、自分は気が狂ってしまったのかと愕然とした。

——— 凜花さんは兄貴なんだ。　そして兄貴は男なんだ！
ありえない、それだけはないッ

きつく目を閉じて耐えた。
だが身体が震え、額には汗が浮かぶ。

一度大きく傾き始めた心は、彼をどこかへと連れて行こうとしていた。

それを止めるために、シンは目の前にあったバーの扉を押し開けたのだった。

「お兄さん・・・・・・・・ かなり飲んでるけど、ぜんぜん酔えないみたいだね」

かすれた声が聞こえてきて、シンの意識が現実に戻った。

声がした方へ目をむけると、いつの間にか隣に女がひとり座っていた。

カウンターの上に頬をあずけ、バーには不似合いな猪口を手にもちらを見ている。

「憂さ晴らし・・・・・・・・ ってわけでもなさそうだし、普通に悩んでる感じでもなさそう」

頭の中を覗かれた気がして、シンがおどろいて目を開く。

女は徳利をつまんで酒をつごうとしたが、中が空なのに気づき、舌打ちしてそれを高く掲げて振った。

カウンターの内側にいた、見事な白髪をオールバックに撫で上げた口ひげのマスターが無言で徳利を受け取ると、足元から一升瓶を取り出して詰めようとする。

それを見て、女がぼそりとつぶやく。

「コップにして。このお兄さんの分も」

やがて、何の変哲もないガラスコップに波々とつがれた日本酒が、受け皿にのせられて二人の前に置かれた。

「飲んでよ」

いつもなら他人からの酒など丁重に断るのだが、今夜のシンはやはり少しおかしかった。

何も言わずに黙礼すると、コップを掴んで、縁から酒がこぼれるのも気に留めずに、一息で飲み干してしまった。酷く甘ったるい安酒だった。

となりでは女が組んだ腕の上にあごをのせて、ちびちびとコップの中身をすすっている。

シンが音を立ててコップを受け皿に戻すと、マスターの手が伸びて、また酒が満たされた。

三人とも一言も口を利かず、ただ酒と時間だけがなくなっていく。その静寂に包まれているうちにシンは、自分がほんの少しだが落ちて着き始めたことに気がついた。

ふと視線を感じてとなりを見ると、うつぶせで顔をこちらに向けていた女と目が合った。

にやりと彼女は笑うと、そのままの姿勢でいった。

「マスター。そろそろ出してもいいよ」

ロマンスグレイのマスターが、今度は足元にあったアイスボックスの中から一升瓶を取り出す。

栓を抜いた瞬間、シャンパンやダージリンのファーストリーフに似た、みずみずしい芳香が立ちのぼり、おどろくシンの鼻をくすぐった。

慎重な手つきで、マスターはその酒を新しく出してきたコップに注ぐと、指で静かにカウンターの方へと押し出した。
出された酒を口に含んで絶句する。

濃い米の旨味が口中を満たし、次に得も知れぬ華麗な香りが鼻へと抜けたのだ。

さきほどの安酒とこれが、同じ日本酒だとはとても思えなかった。

「浦霞の大吟醸……これは一気に飲まれちゃ嫌だからとつといたの」

『また読まれていた!』

シンの心臓がびくりと大きく波打った。

自分より少し年上。二十代のどこかだろう。

ゆるいウェーヴのかかった赤茶けた髪を、そっけなく垂らしている。
きつそうな眼が印象的だった。

その眼を見た時、なぜかシンはデジャヴを感じた。

彼女は見られていることなど気にも留めず、無表情で浦霞を舐めて

いる。

その姿に気後れして、声をかけそびれてしまった。
シンがまた前をむくと、ふたたび静寂が訪れた。

顔を少しうつむけて、薄明るい照明の中、揺れるコップの中身を見つめながら味わって酒を飲んでいると、マスターがパイプを取り出して火を入れた。

浦霞とは違った芳香と煙がコップの上をゆっくりとよぎり、二人のあいだを漂う。

それを嗅ぐうちにシンは、普段は吸わない煙草が欲しくなってきた。すると、さーっとテーブルの上を滑って、ジタンの箱が目の前で止まった。

しばらくそれを見つめていたが、また女に黙礼すると、一本取り出して口にくわえる。

ボウッと隣でマッチの火が点り、少し間を空けてから近づいてきた。身体を寄せてそれを受けると、ゆっくりとジタンを吸い込んだ。

硫黄の香りがきれいに飛ぶまで待ってから、自分のところへと持ってきて来た女の仕草をみて、シンはさっき感じた擬似感の訳がわかった。

人の考えることを先読みして動く。そこが自分と似ているのだ。そう感じてしまうと、めったに他人に興味を示さないのに、つい口が動いていた。

「冴島 心と言います。失礼ですがお名前は？」

「あたし？ あたしは、ひめ」

「姫・・・・・・・・」

「燃える火の女と書いて、火女」

おそろしく古風な名を口にして、火女は燃え尽きたマッチの軸を灰皿に投げ入れた。

話はそれで終わりとでもいうように、またカウンターの上に身体をあずけて、ちびちびと酒を飲み始める。

その素っ気無さが今はありがたい、そうシンはおもい、前をむくとジタンをふかした。

マスターの吐き出す濃い煙のヴェールに、自分の煙が絡み合うのを見ながら、コップに手をやり、一口飲んだ。

飲むほどに香りと旨味が強くなってゆく、そう感じる。

この人はどんな仕事をしているのだろう。

少し崩れた空気をまとっているのか、はじめはこちらサイドかとおもったが、立ち振る舞いを見ると品がある。

かといって普通のOLとか水商売のように、女っぽいものは感じない。

「あたしは娼婦……」

またシンの心を読んだ火女がつぶやいた。

絶句してしまった気配を気にせず、口調も声を変えずに、彼女は言う。

「男の望みを身体でかなえてやるのが仕事……最近援交だのなんだのってきれいな言葉で飾ってるけど、やってることは昔と同じ……だからあたしは娼婦、いつもそういつてる」

素直なのか投げやりなのかわからない台詞に、めずらしくシンがとまどっていると、急に火女がこちらに顔を向けた。
その姿を見て息がとまった。

さっきまでの男っぽいスレた空気はかき消されたようになくなり、
息苦しいほど美しい女がそこにいた。

酔って幻覚を見ている、そんな気さえするほど妖しく変化した火女
が、溶けるような優しい声を出した。

「今は必要ないみたいだけど、もしあたしがいるならまたここに来てよ」

火女はそういうと、怠惰な猫のようだった身体に力をみなぎらせて
立ち上がると、するりとシンの後ろを抜けて、出口へと歩き始める。
ドアの前で、一度片手を上にあげてヒラヒラと舞わせてから、彼女は
バーから出て行った。

あっけにとられるシンの目の前で、マスターが同じ姿勢でパイプを
燻らせていた。

二人の夜間飛行 1

シンが不思議な女、火女と出会ってから一週間ほどたったある日の夜。洋一の姿が女装ルームにあった。

めずらしく一人である。

玲はタウン誌の仕事、綾乃と真紀からは連絡がない。

つまり待ちに待った「自分だけナイト」なのだ。

洋一はソファの横にちんまりと正座して、さきほどから床の上に並べてある物をじーっと見つめている。

それは人肌の色をした、こんもりと柔らかそうな物体だった。

その半月状の物を見ながら、頭の中ではエンドレスで女帝の妖しい声が響きつづけていた。

「洋ちゃんにいい物あげるわ・・・・・・・・これ。つけ方はここに書いてあるから。特注だからね、うふふ・・・・・・・・まあ、ゆっくりと愉しんでちょうだい。おほほほほ」

そう、いま洋一が熱心に見つめている物。それこそは究極の女装アイテム、シリコンパット。

通称「偽パイ」であった。

神か悪魔か。

綾乃は臨時チーム結成で湧くドサクサにまぎれて洋一に近寄ってくると、そっと彼をさらに深いカオスの海に沈めてしまう危険物を渡したのだった。

眼をランランと輝かせ、ありえないほど荒く呼吸しながらパットを

見つめている洋一の姿は、混じりっ気なし・純度100%のデンジヤラスパーソンだった。

さつきから手は、パットの手前で行ったり来たりを繰り返していた。かろうじて残っている、紙のように薄くなった理性が警告を発して、それを手にすることを止めろと言っているのだ。

これを装着するだけならいいだろう。

しかしそうすることによって、更に大胆な衣装をまとして外に出してしまうのは一目瞭然。

それこそは、二度と戻れぬ航海―――すでに戻る意志は無いのだろうが―――への旅立ちを意味していた。なので、最終防衛ラインを死守しようと、最後の理性が発動しているのだ。

だがもうお分かりの通り、こういう場合はすでに秒読み段階である。きっかりタイムを計ること10分後。

洋一は万引きする子供のように、さっとパットをひったくると、寝室に駆け込んでドアを閉めた。

「わっ、ほんものみたいにやわらかい！ うおっ、たぶたぶ揺れるのか！？ すっげーっ！」

これ以上は見るに耐えないので目をつぶるが、一時間ほどの試行錯誤の結果、この道二十年の歴史を誇る業界の老舗、「ジュパリデ・デオン」社謹製のシリコンパットは、二代目の胸に収まった。

それからまた一時間が経過して、やっと寝室のドアがカチャリと音を立てて開いて、凜花にチェンジした彼が廊下にすくつと立った。

道行く人の下肝を抜くこと間違いなしの、大きなウサ耳。片方は当然、ペコツとかわいく垂れている。

黒い粗めの網ストッキングに包まれて伸びる脚線。

そしてなんとと言っても「隠す気ないだろ！」と突っ込まずにはいられない、バニーの衣装。

上から羽織っている、燕尾服風の黒い上着がろうじて露出度を下げているが、後は目も当てられないモロダシ振りである。

バニーになった瞬間から、どんどん高まる恥骨の奥のうずきに、すでに凜花の目は大きく開き、イッてしまっていた。

小脇に抱えた黒いステッキをくると空で回すと、熱い声を漏らした。

「さあ、いってみよっか」

そして凜花Ⅱ洋一は、奈落より深く、沼のように魂を絡め獲る、妖しい夜間飛行へ旅立ってしまった。

バニー姿の凜花を車の中から見た時、もうシンはおどろかなかった。ただ「ああ………」と、かぼそい声をもらしただけだ。

だが、口を開けて、泣き笑いの表情で、彼は静かに涙を流していた。

到底、言いあらわすことなどできぬ喜びと感動と幸せが、心の中の

とまどいと想いに混じって、彼から言葉を奪ってしまっていた。

好きなんだ。そう今ならはっきりわかる。

認めるとか認めない、男とか兄貴とかは、どこかへ消し飛んでしまっていた。

シンは夢遊病者のように車から降りると、凜花の後について歩き出す。

もういつものように物陰に隠れることはしなかった。

凜花も違っていた。

見られることへの喜びのみ感じ、破滅とか恐怖はみじんも心の中に無い。

瞳孔が開きっぱなしの眼を辺りに向けながら、颯爽と繁華街へむかって足を進めて行く。

——— もっと高めなくっちゃ…………… もっと気持ちよ
くならなきゃダメ……………
それだけを求めている。

やがて街に出た彼女の姿は、人目を惹くどころの騒ぎではなかった。
客の送り出しで店の外に出ていたクラブのお姉さんまで、あんぐりと口を開けて、目の前を悠々と通り過ぎてゆくバニーを見送ってしまふ。

「どこの店の子、あれ？」

「いあ、どっかの店に来てるショーの人じゃない？」

丸くてふわふわの尻尾が揺れるのを、老若男女問わず、おもわず振り返って見つめてしまう。

凜花の胸のドキドキと恥骨の甘い痛みは留まるところを知らず、人々の視線を受けるたびに、彼女をめくるめく恍惚の世界へといざなうて行く。

飲み屋街を抜けてアーケードに足を踏み入れた凜花は、見覚えのある男たちを見つけた。

横に大きく広がって、大声で話しながらこっちへむかってきているのは、地下街でやりあったあの若者たちだった。

あの夜の喧嘩を思い出した途端、一段と強いうずきが奥を駆け抜けて、声を漏らしそうになる。

躊躇うことなく凜花は足を前に進めると、彼らに気づかれるより先に「はあーい」と声をかけた。

急にあらわれて微笑むバニーに、男たちはぎよつとした顔をした。だがすぐにあの時のメイドだと気づいて、くるつと背を向けると逃げ出した。

「あらあ、つまんないの……」

快感を得られる機会を失って、がっかりとしてまた歩き始める。

暴力を求めている自分への驚きとか疑問すらなくなってしまった。

気持ちよさにとろりとしていた瞳が、肉食獣のそれに変わっていることにも気がついていない。

凜花の後ろをふらふらとついて行っているシンも、彼女の変化に気づかず、放心気味に足を運んでいる。

はつきりと自分の想いを知ってしまったシンは、もうどうしていいかわからなくなって、心のままに行動していた。

——— 凜花さん、綺麗だ・・・・ この世のものとはおもえない・・・・

光りに集まる虫のような、人々からの好奇の視線を浴びて歩く凜花だったが、その華麗な行進が終わるときが来た。

彼女の目の前に、バラバラと20人以上の男があらわれ、行く手をふさぐ。その中にさっき見た顔があった。

男たちは逃げたのではなく、仲間を呼びにいただけだったのだ。

あの夜の凜花の膝蹴りで、まだ鼻が微妙に曲がっている男が、こつちを指差して朗らかな口調でいう。

「おねーさん。しかえしにきたよーっ！」

笑っているが、眼がいびつな暗い光を放っている。

凜花の望んでいたものがついにやってきてしまった。

二人の夜間飛行 2

凜花は、不敵な笑みを口の端に浮かべて、ゆっくりと左手に持っていたステッキを刀のように構えた。

さっと男たちが輪を作って取り囲んでくる。

いつもなら出鼻に2・3人倒してから逃げて少人数に分けるのに、凜花はそうせずにいた。

この場で全員を徹底的に痛めつけるつもりだ。

一時のにらみ合いの後、左右から木刀が襲ってきた。

腕の動きが見えないくらいに早さでステッキがそれを跳ね上げ、間髪をいれず、その先端が二人の男のみぞおちに埋まる。

だがそのときにはもう、前後から金属バットが唸りをあげて落ちてきた。

おそろしく重いはずの一撃が、ガキツという金属同士が擦れる音と共に止まる。

素早くステッキを手放した凜花が、両手首に仕込んである小柄で受けたのだ。

力任せに押し切ろうとするバットをなんなく弾きかえした彼女の両手の指のあいだに、ギリリと光る小柄が二本づつ握られた。

途切れずにまた襲ってくる前後左右の4人に向かって、それが一斉に放たれた。

飛んできた小柄の動きを見切った男が、首を傾けてかわそうとする。その時、矢のようにまっすぐに走っていた刃が急に下に向きを変え、男の股間辺りで跳ねて、峰の部分で急所を強打した。

他の三人に飛んだ小柄も、それぞれ鞭のように不規則な変化をして、

腹・腕・顔を峰で薙ぐ。

一瞬生まれた空白の間に、凜花の手首が閃いて、放たれた小柄が、指に結わえた細引き紐に手繰り寄せられ、また元の位置に収まる。

予測できない動きをする小柄を紐で操る――それが母・凜が洋一に残していつてくれたものの一つ、菊池流小柄術だった。

8人の攻撃を退けたバニーに、男たちが怯む。

そんな彼らを見つめながら、余裕の笑みを浮かべて凜花は、平べったく横幅のある奇妙な造りの小柄をちよいと爪のように動かして挑発した。

「ほら！ まだまだこれからだよっ、ぼくたち」

天女ではなくディアブロー――悪魔と化したバニーが叫んだ。

――熱い・・・・・・ さっきから奥が熱くてたまらない・
・・・・・・

ふたたび襲い掛かってきた男たちを軽く弄びながら、凜花はそう感じて、段々と息を荒げる。

小柄の峰や自分の手足が、男たちの身体のどこかに埋まるたびに、

電流のような心地よさが全身を貫き、そしてその快感は、消えないでどんどん溜まっていくのだ。

しだいに手足が震えてきたのに気がついたが、その時にはもう快感の波は止まらなかった。

四本の小柄すべてが、一斉に殴りかかってきた男たちの顔面を叩いた時、それは頂点に達して、弾けた。

「あああああーっ!!!!」

甲高い絶叫と共に、びくんっと凜花の身体が魚のように跳ね、目の前が真っ白になって崩れ落ちた。

仲間を倒したバニーが、なぜか自分で道にのびてしまったのを見て、一瞬男たちは顔をみあわせたが、恍惚の表情でピクピク痙攣している姿を見て、今がチャンスとまた近寄ってきた。

いつものシンならもっと早く助けに入っただろう。

しかし一時的に心神喪失状態だった彼が、目の前で倒れた凜花を見て、はっと我に帰った時には、もう何人かの男がバットや木刀を振り上げて、倒れている彼女に打ち下ろそうとしていた。

———— 間に合わない！

それでも駆け出そうとしたシンの視界に、大きな影がさっと脇道から走り出たのが見えた。

ドム、ボン・ドン！

硬い物が肉を打つ音に、失神していた凜花が目を覚ました。

ポタッ。

生あたたかいものが、上から彼女の白い頬に滴り落ちる。

「だ、だいじょうぶですか？ チャイナの人……」
そういつて、血を流しながら微笑みかけてきたのは、あの牛島のごつい顔だった。

実らぬ恋と知りながら、牛島はあの夜からずっと、凜花の姿を探して夜の街を彷徨った。

そして凜花の危機を見て走ったのだった。

「うおおおお！」

きれいにバットや木刀が決まったのに倒れず、牛島は雄たけびをあげると、その場にいた男をかたっぱしから掴んで投げ、殴り飛ばしはじめる。

「てめえら！ この人に手え出しやがって、半殺しじゃすまねえぞ、ゴラァ！」

狂ったブルドーザーのような大男の乱入に、周りを囲んだ男たちがぎよっとしているあいだにも、暴風と化した牛島はめちやくちやに暴れまわる。

エクスタシーの余韻でふらつきながら立ち上がった凜花に、コンバットナイフを持ち出した男が、腰を落として突っ込んできた。
その殺気に、凜花の危険な部分がまた反応する。

回し蹴りでナイフを弾き落とすと、ジンジンとする奥のものに突き動かされるまま、手にした小柄の刃を男に向ける。

今度は峰打ちではなく、白刃を突き立てる気だ。

また高まってきた快感に押されて、必殺の一撃を放とうと構えた時、

目の前を黒いものがふさいだ。

「どけっ！」

錯乱した凜花が、刃を横に薙ぎ払おうとした腕を、強い力が押えつける。

ぐいっと前に引き寄せられ、踏ん張った時、身体が熱く大きなものに包まれた。

「凜花さん、だめだ。それだけはやっちゃいけない」

刃の先を自分の心臓に向けて、シンは言った。

信じられない声を耳元で聞いて、はっと身をこわばらせる凜花の身体をもう一度強く抱きしめて、シンがささやく。

「ずっと知ってたんです、見てました・・・・・・・・・・だまっ
ていてすみません」

凜花の全身から力が抜け、手から滑り落ちた小柄が、カラッと虚しい音をたてて道に転がる。

「・・・・・・・・・・ずっと知ってた・・・・・・・・・・見てた
ってどういうこと？」

「あなたを守るのならなんでもします。だから一線を越えてしま
うのだけはやめてください。俺は、おれはあなたを・・・・・・・・・・」

「

ピリリイイイイ！

笛の音がして、シンの言葉が途中で止まる。
音のした方を見ると、数人の警官がこっちへと走ってくるのがわかった。

「そこのおまえっ。その人つれて逃げろ！」

牛島はそう叫ぶと、駆けてくる警官たちへと突っ込んでゆく。
足止めする気だ。だが遅かった。

その時には、アーケードに突っ込んできたパトカー三台に、凜花とシンは囲まれていた。

一斉にドアが開き、そこからまた警官がはきだされる。

凶暴さを失って、彼らに小柄を振るうこともできず、唇を噛み締める凜花を優しく離すと、シンは彼女を背中にかばっていった。

「俺が逃がします。これ、かけといてください」

肩越しに顔を隠す黒い大きなサングラスを手渡す。

凜花がそれをかけるのを確認して、シンはすばやく前に走ると、目前までできていた三人の警官にむかって目の醒めるような連続突きを腹に食らわせると、うめく彼らのあいだをぬって、凜花の手を引いて駆け出す。

「まて、おまえ！」

すかさず追ってきた警官にかまわず、疾走してシンは脇道にはいると、エンジンをかけたまま路上駐車していた配達の軽トラック見つけて凜花をその中に押しこみ、自分も素早く飛び乗って急発進した。間をおかずに追ってきたパトカーのサイレンとまぶしい回転灯が背後から迫ってくる。

——— この軽トラじゃ逃げ切れないっ
あせる彼のとなりで凜花は、異常だったさっきまでの自分と、すぐそばにシンがいるということにまだ混乱していた。
そんな凜花を、透き通った目でシンはちらっと見た。
ほんの少しの時間ためらい、そして口を噛み締めて何かに耐えたあと、いった。

「凜花さん………」

「え？」

話しかけられて、おもわずシンの方を向いた凜花の腰が、彼の腕に引き寄せられる。
唇が一度、額をさわった気がした。

「凜花さん………俺は」

つづく言葉をサイレンが掻き消した。

抱かれたことにとまどいながら、「え、なに？」と聞き返したが、もうシンは微笑むだけでこたえてくれない。

「次の交差点で車とめます。すぐに外へでて走ってください」

「シンは、シンはどうするの？」

「逃がします。大丈夫です」

ちゃんとした答えを聞く間もなく、すぐに交差点に軽トラックはさしかかり、シンがサイドブレーキを強く引く。タイヤが悲鳴と軋む音をあげ、車が横滑りして道をふさいで止まる。

「さあ、行って！」

シンの手にドンと突き飛ばされた凜花が、外へと飛び出してすぐに

駆け出す。

それを追いかけようとした警官の前にシンが素早く回りこむと、足払いをかけて転倒させた。

「あつ、おまえ紅椿の！」

一人の刑事らしい男が自分を見て叫んだのに笑みでこたえと、シンはちらつとうしろを見た。

暗闇の中へと白く丸い尻尾が消えたのをみてから、シンはどかりと道に座り込むと、両手を上げた。

その腕に、鈍く光る手錠がかけられた。

『シン。 知ってたってどういうこと？』

出るはずの無い問いを続けながら、走って凛花は逃げる。

やがてサイレンの音も、追ってくる足音もないことに気がつき、もつれそうな足をとめた。

荒く呼吸しながら、サングラスをむしりにとって路上に投げ出す。

顔を上にあげて、路地裏のほこりっぽいビルの壁にもたれかかった。左手が持ち上げられて、自分の額を触る。

「あれは、あれはなんだったの？」

そうつぶやくと、強く抱きしめられた感覚までよみがえってきた。

凛花はその場に崩れ落ちると、頭を抱え込んだ。

翌日。朝早く事務所にいった洋一は、シンが警察に拘束されたのを知り、すぐに弁護士の手配をすると、身柄引き受けのために組員を署へと向かわせた。

本当なら自分で飛んで行くはずなのにできなかった。いまシンと顔を合わせるのが恐かったのだ。

デスクの前で手を組んでじりじりと待っているあいだにも、きのうから頭を離れない疑問がずっと洋一を痛め続けた。

いつもと違う、殺気立った二代目に恐れをなしたのか、誰も入ってこない部屋の中で、おびえながら洋一はシンを待った。

夕日が窓から差し込む頃、デスクの上の電話が鳴りだした。受話器をひったくって息を詰めてたずねた。

「シン、か？」

「いえ、狂介です。二代目。シンの奴をなんとかガラ受けしてきたんですが、あいつ、少し目を離したらいなくなっちゃって。もうそっちに帰ってますか？」

「え・・・・・・・・」

言葉を失ってしまった洋一の耳に、まだ狂介が何か話しかけていたが、もうその声は届いていなかった。

そしてシンは、洋一の前から姿を消してしまった。

電話 1

シンが失踪してしまった日の夜。

仕事にむかう綾乃のそばに、本格英国風メイドの姿があった。

ごきげんで小唄などを口ずさみながら、彼女はしっかりとメイドの手を握って歩いている。

輝きはじめてネオンに浮かび上がった顔をよく見てみれば、それは女装した真紀だった。そして着ているメイド服は、いつかの洋一が着ていたものと同じだ。

どうやら綾乃が女装ルームから勝手に凜コレクションを持ち出して、真紀に着せてあれからずっと連れまわっているらしい。

古風なメロディを奏でていた綾乃が急に唄をとめ、となりの真紀を見つめながらしゃべりだす。

「真紀ちゃん、どうしてもあたしの部屋にくるのいや？」

「あ、いえ……いやとかそういうんじゃないって、同棲っていうのはちょっと……」

「じゃ、真紀ちゃんの今の部屋、遠いし中也狭いから、あたしのマンションの近くに引越しましょ！ お金はだしてあげるから、あした不動産屋さんにいきましょうね、うふふ」

「ちょ、ちょっとそれは！ それってヒモですよね？」

真紀の抗議は届いていない。

そうしましょそうしましょ、などと妙な節をつけて歌いながら綾乃は歩いていたが、ちょうど前からきた二人連れの男たちを見て、「あら、雄五郎さん」とつぶやいた。

真紀が彼女の視線をたどって、うっとうめく。

まともに雄五郎の三白眼と目が合ってしまったのだ。

「雄五郎さんご無沙汰してます」

丁寧にお辞儀して挨拶した綾乃は、仕事のくせですばやく連れの男の人体を確かめた。

四角い顔に小柄で痩せた身体。そして細い目をしている。

「――お仲間……じゃないわね。それにしても怖モテじゃないし。頑固な職人って感じね

そう判断してから、また嫣然と目の前の二人に微笑みかけた。

「飲みにいっちゃったの？」

「ああ、そうだ」

「じゃわたし今からお店だから、同伴してくださいさる？」

ほんの少しの間だったが、雄五郎の目にとまどいが走ったのを綾乃は見逃さなかった。

「おほほ。でもお客さまの都合もありますから、無理は言えませんがね」

「また後で顔だすよ」

「そうしてくださいな。では失礼します」

頭をさげた綾乃につられて真紀もひょこつと会釈したが、二人の男はそれを見ずにまた歩き出す。

「だれですか？あのこわそうなおじさんたち」

「ああ、洋ちゃんとこのえらい人よ。お連れさんは初めてみる人ね」

「や、ヤクザですかっ、やっぱり！」

怯える真紀を無視して綾乃は何か考えていたが、やがて彼の方をむいた。

「真紀ちゃん。ちょっとあのおじさんたちつけて、どの店に入っただけ来て教えてくれる？」

「ええっ、マジですか!？」

こくこくとうなづく綾乃に、真紀はものすごくイヤそうな顔をして見せたが、彼女には通じない。

強引に背中を押されてしまった。

勘弁してもらおうとしたが、にこにこしながらも拒否を許さない目をみてあきらめると、おどおどした足取りで雄五郎たちの後を追ってネオンの海に入っていた。

同時刻。組事務所を出た洋一は、女装ルームにいた。

じっとシンを待つことに耐えられなくなって、逃げるように事務所を出て、ふらふらとここにやってきてしまったのだ。

酒も煙草も口にせず、安心してソファに沈んでいると、玲の元気な足音が聞こえてきた。

リビングに飛び込んできた彼女は、洋一の姿をみて、大声でしゃべりながら近寄ってくる。

「凛花! あんた昨日なんかやったっしょ? アーケードでバニーが大あばれしたって……」

心ここにあらずともいうように、自分に目も向けずにじっとして

いる洋一に異変を感じて、途中で口をつぐむ。

「・・・・・・・・・・なによ、なんかあったの？」

「いなくなっちゃった・・・・・・・・・・」

「だれが？」

「シンが・・・・・・・・・・」

うわごとのような声でつぶやいた洋一の口から兄の名前がでて、玲は眉を吊り上げた。

「ちょっと。それどういうことか聞かせなさい！」

語らせるのに手こずりながらも、昨日おこったことのあらましをだいたい聞き終えると、玲はケータイで兄を呼び出す。

だがコールして流れ出したのは、電源が入っていませんという不吉なアナウンスだった。

キツとした顔で玲が洋一に食って掛かる。

「あんた兄ちゃんになにしたのよ！」

「・・・・・・・・・・にいちちゃん？」

「そうよ。あんたの部下の冴島心はあたしの兄ちゃんよ！ そんなことはどうでもいいの。なんであんた逃がした兄ちゃんがいなくなるのよっ」

玲とシンの関係を聞いておどろいたのだが、それもすぐにしぼんでゆき、「わからねえ、俺にもわけがわかんないんだよ・・・・・・・・・・」と力なくつぶやく。

ふぬけになっている洋一にこれ以上聞いてもなにも得られない。

そう判断した玲は、いそいで部屋から駆け出した。

「――――とりあえず兄ちゃんがいなくなった警察署までいけばもっとくわしいことがわかるかもしれない」

そう考えて、玲は勢いよく道を走り出した。

だが甘かった。

署まで行っただけはいいが、事は暴力事件でシンはその主犯にされてしまっている。

女子高生がいくら食ってかかっても、どの警官も相手になどしてくれない。

あきらめきれずに、ロビーの待合いに座って考え込んでいた玲の顔を、どこかで見たことのある男が通り過ぎた。

反射的に立ち上がると、大きなガラス扉を抜けて門の方へと歩いてゆく、頭に包帯を巻いた男の背中を呼び止めた。

「ちょっとまって！あんたあの子の大男よね？
．．．．．
たしか、牛島！」

「あア？」

剣呑な声で振り返った牛島は、呼び止めたのが女子高生だったので妙な顔をした。

だがすぐに、あの夜カメラを構えていたこの娘のことを思い出して、こたえるより早く、彼女の肩をつかんで揺さぶる。

「あのチャイナの人、いや、バニーの人は？」

「え、いるけど」

「じゃ、うまく逃げたんだな？」

「あ、うん．．．．．たぶん」

すごい剣幕で質問されたのでついこたえてしまうと、「よかった．．．．．」そう万感の思いで牛島はつぶやくと、男泣きに泣きはじめ

た。

「ちょ、ちょっと！いいからこっちなさいよっ。こっちまで変な目で見られてるじゃないの！」

玄関に立っていた警棒を持ったおまわりさんに睨まれて、玲はあわてて大男の手を引くと、重いその身体に舌打ちしながらも彼を引きずって警察署を後にした。

電話 2

雄五郎たちの後をつけて入った店を確かめた真紀は、すぐに綾乃に連絡して教えたが、彼女にとりあえず自分のところへ帰ってくるようにといわれてため息をついた。

「これで解放されるとおもったのに・・・」
そう一人ぶつくさつぶやいたが、しかたなく綾乃の勤めるセブンシ
ーズへむかった。

そこで真紀を待ち受けていたのは、人間ぬいぐるみとしての歓迎だ
った。

「わぁ、かわいー！ この子が姉さんの新しい彼女？」 「そう
よ」

「えっ男の子！？ うわぁうまく化けてるう！」 「でしょ？
あたしがやったんだもの」

「いいなあ姉さん。 あたしもこの子ほしい！」 「あら残念。
それはあげられないわねえ」

控え室にいた、色とりどりの夜の蝶たちに、抱かれ撫でられ頬ずり
されて、あげくの果てには物扱いである。

いくら元が男の子で周りが綺麗なお姉さんたちでも、さすがにげっ

そりした。

やがて店が始まってみんなが出て行ってしまったので、ほっとしたのも束の間。

すぐに誰かが帰って来て、根掘り葉掘り聴かれたあげくに、テディベアのように弄ばれてしまう。

すでにお気づきの方もおられるだろうがこの真紀。どうも女性の保護欲を刺激するタイプらしい。

彼の目の前のテーブルには、入れ替わり立ち代りやってくる彼女たちからの差し入れのオードブルや酒のグラスがまさに酒池肉林といった風に並んでいた。

実はこの状態は、現在店内の一番高いブースに座り、綾乃たちトップレベルの美女たちをそばに侍らせている某社長よりも豪華なのだ。しかも真紀への差し入れの御代は、ちゃっかりとこの社長の勘定につけられていた。

今のセブンシーズで一番のVIPは、この女装子メイドなのだ。

店で適当に社長をあしらっていた綾乃は、化粧直しという名目で彼の手からのがれると、カウンターの奥から店の裏に入り、雄五郎が入店したオンディーヌというクラブへ電話をかけた。

出た黒服にある名を告げると、すぐにその人物の声が聞こえた。

「ミキちゃん元気？」

「あ、綾乃ねえさん、ごぶさたしてまーす」

「ちょっと聴きたいんだけど、紅椿の相談役、そっちにいつてないかしら？」

ミキという子の声が、あっと気まずいトーンに変わる。

雄五郎が綾乃の上客であることは、この街の夜に働く者なら誰でも知っている。

「すみません。ちょうどあたしがついちゃって……で
もなにもしてませんから」

「あらあらちがうのよ。そうじゃなくて……ちようどよか
ったわ。実は雄五郎さんのお連れさんなんだけど、ご同業の人かし
ら？」

綾乃が優しい声を出したのでミキはほっとした声になり、うーんと
彼女の質問を考えていたが、やがて元気よくこたえる。

「いや、ちがうとおもいます。でもなんかヤバ筋っぽかったから、
仕事とかきかなかったんですけど、チラッと話に彫玄って出たんで、
そっちだとおもいますよ」

もっと詳しく探ろうかとたずねてきたミキに、できればお願いとた
のんで綾乃は電話を切った。

キャリアの長い彼女だが、さすがにタトゥ系には詳しくない。

とりあえず休憩で入ってくる子にたずねようと控え室にいった
ちようどそこで真紀と遊んでいた麗菜という子に聞いてみたが、彼
女もよく知らないらしく、首を横に振った。

そのとき、ソファに横にされて撫で回されていた真紀が、顔をあげ
ていった。

「パソコンあるならすぐ調べれますけど」

彼の言葉に二人の美女はああと手を打つと、すぐに黒服に店のノー
トパソコンをもってこさせ、真紀に与える。

少し時間がかかるというので、そのあいだに雄五郎が行きそうな店
に次々と綾乃は電話すると、あの老極道の連れのことを探るように
依頼した。

どの店にもかならず数人はいる彼女の崇拝者たちは、こころよくそ
れを引き受けた。

ヤクザとはまた違う夜の情報網を、この女帝は完全に握っているのだ。

そうしているうちに、真紀が彫玄の情報を探り当てた。

「えっと彫玄……いまは十二代目!? 江戸時代から続く関西の老舗彫り師で、おもに某広域暴力団の幹部を相手に腕を振るう、その筋では有名な名人である、ですって」

それを聞いて、綾乃は何か嫌な予感をおぼえた。

紅椿一家の二代目以下の幹部連は、全員中年から初老の男たちばかりで、ほとんどの者が背中にガマンを背負っていた。

なのでいまさら新たに刺青など入れようなどという者に心当たりがないのだ。

胸騒ぎがして、綾乃はケータイを取り上げて洋一に電話したが、長いコール音のあとに留守番電話サービスにつながってしまい、そのまま切った。

———— まあ急ぐ話でもないでしょうからね
また明日にでも連絡してみようと決めて、まだパソコンをいじっている真紀を弄ぶべく、彼の手を取った。

電話 3

「ほオ。 本家の直系の二代目からお願いとは光栄ですなア」
ざらざらと耳ざわりな声が、薄暗い応接室に響く。

義隆が身体を前に倒して、長くなっていた煙草の灰を大きなクリスタルの灰皿に落とすと、革張りのソファが猫が鳴くような音を立てて軋んだ。

耳に当てている受話器から流れ出す、優雅だが酷薄な若い男の声を、ふんふんとうなづきながら聞いている。

「はアゝ歌手ねエ。そんな有名人がこっちにおったんですか。え、こっち出身？ ははアゝ、ほんで帰ってきとるかもしれんて？ はは、しかし鬼小島さんとも手広おやつとりますな。もちろん手伝いますわ、うちのもんにも声かけときます」

ジジッと煙草の赤い穂先をもみ消したところで、聞こえてくる男の声が低くなった。

それと同時に、死んだ魚のように光のない義隆の目が脂ぎった色を見せはじめる。

「これを機会にうちが本家の直系に？ そらええ話やけど、まった銭がよおけいるんでっしゃろ。あはは、まあそれはなんとかできますけんどなア」

組織の本家――本部に上がれば、もう田舎の地方大名ではなく、全国に力を及ぼす事も可能だ。
ただそうなれば、今まで以上に上納――金がかかる。

その打算と慾。　ギラギラとした眼の奥では、それらが無い混ざって、るつぼの中のようにドロドロと煮えたぎっている。

義隆は半ば楽しみながら、ゆっくりとそれをかき混ぜていた。

富とある程度の名声が手に入れば、次に権勢が欲しくなるのは当たり前。

極めて通俗だが義隆はそう考え、またそれを恥じる心などカケラも無い。

腹を空かせた赤子のように、欲しいものをひたすら貪欲に求める。

そして手に入れる手段に対する善悪の基準もない。

「無い」という単語が似合う男はヤクザにごまんというが、空っぽの大きな虚無の空洞を内面に待つ義隆は、その慾の質量で他の極道たちを抑え、出し抜き、ここまで来たのだ。

「いやしかし、鬼小島の二代目は頭が切れますなア。うちのボンクラと大違いですわ。　え？　いやいや、あれはあんとと違ごおて性根が座つとりませんのや」

義隆は新たな煙草を口にくわえたまま、組内の者には聞かせぬ愛想のよい口調で相手にしゃべりつつづけている。

だが、闇のどこかを見据えたまま動かない眼は、何か次の獲物を見つけた猛禽のように、まばたき一つしない。

黒渦に似た、慾の闇に吸い込まれたように、カーテンがゆらりと揺れて、義隆の背中に張り付いた。

義隆が電話を終えた頃、彫玄をホテルに送った雄五郎は客の絶えたロビーにいた。

背後に付き人の組員を立たせ、ソファに深く腰を下ろして雄五郎は、トレードマークの三白眼を細めてどこかを見つめている。

「おい、煙草買ってきてくれや」

はいとこたえた付き人がガラス扉の外へと駆け出していくのを待っていたように、テーブルに投げ出していた携帯が震えだす。

ゆっくりと身体を起こすと、節くれだった手で掴み、耳に当てた。

表情を変えず、雄五郎は受話器の向こうで相手がしゃべる話を聞いている。

一分ほどして、一言も口をきかずに切った。

そして元の位置に携帯を置くと、また初めの姿勢に戻って、目を閉じて考えはじめた。

微動だにしない身体の中で、右手の指だけがじれるように動いている。

しばらくして、なんとも言えぬ唸りを一つあげると、またテーブルの上の携帯を手に取り、誰かに電話をしはじめた。

長い呼び出し音の後、相手がでたところで、背筋を伸ばす。

「ご無沙汰しております。…… そちらはお変わりありませんか？ は、いえ、若のこともありますが、実は……」

野太い雄五郎の声が、めずらしく人をはばかりる小声に変わった。

まるで無声映画の役者のように、口だけが動いている、そう感じられるほど低く聞き取りにくい声だ。

口調には普段の傲岸さがなく、逆に恐縮するようなものが混じっていた。

そうやって10分ほど会話の内容が聞こえぬ状態がつづいていたが、やがて話がついたのか、雄五郎の鋭いまなこに奇妙な明るい光が走った。

その後すぐにいつもの胴間声に戻っている。

「申し訳ありません。組内のことでお手を煩わせしまいました。は？ いえ、こちらこそ痛み入ります。はい、では失礼します」

見えぬ電話の相手が目の前にいるかのように、雄五郎はきっかりと頭を下げると電話を切った。

携帯をスーツのサイドポケットに落とし込むと、腕を組んで目を閉じる。

表でハイライトを買ってきた付き人の組員が、走って雄五郎のところへ行って、渡そうとして目を見開いて動きを止める。

自分は極道です、いつもいっているような雄五郎の顔が、穏やかに微笑んでいたのだ。

彼は二年ほどこの老極道に付いているが、そんな表情は今夜はじめて見た。

気配で帰ってきたのを察して、目を閉じたまま口を開く。

「一本くれや」

「は、はい！」

あわててフィルムをはずすと、封を切って一本取り出し、口にくわえさせて火をつける。

くるくると唇を器用に動かして、ハイライトを口の端に持っていくと、穂先を下にたらし、両手をスラックスに突っ込み、足を開いて煙を吐き出す。

ふかす紫煙と共に、つぶやきが漏れた。

「うめえ・・・・・・・・」

楽しげに口元が歪んだ。

光臨 1

シンがいなくって三日が過ぎた。

少し気を持ち直した洋一と玲は、あらゆる手とルートを使って彼の居場所を探したが、痕跡ひとつ見つけることができない。

だが、執念深さでは共通している二人は、諦めずに、今も女装ルームでお互いの情報を交換していた。

「で、あんたのアンテナにも兄ちゃんのいそうな場所はかかってこないわけね」

「ああ」

「てかほんとにそれでもヤクザなの？ 人ひとり見つけれんないなんて」

「・・・・・・・・すまん」

すっかり大人しくなってイジメ甲斐がなくなった洋一に拍子抜けして、玲はふうーっとため息をついた。

両手を上に突き上げて大きく伸びをすると、どかっと背中をソファにあずけて考える。

なんとなくだが、玲は兄が姿を消してしまった理由に見当がついていた。

そして、それに関すること、洋一が自分に話していない事があることにも。

今まではどうしてもそのことに触れなくなかったし、またそうしなくても見つけ出せると考えていた。

しかし今になっても手がかりすらわからないとなっては、もうこの

問題を棚上げにはおけない。

玲はためらいながら、洋一に話しはじめた。

「あのね、兄ちゃんといっしょにあんたを尾行しだしたときね、あたしなんかおかしいっておもったの。兄ちゃんの様子が」

目の前のソファに座る洋一の肩が、わずかに揺れた気がした。静かにそれを見つめながら話をつづける。

「本人は気がついてないみたいだったけど。そうやってつけてるうちにね、兄ちゃんはあるたを……。いや凛花のことを男って見てない気がどんどんしてきたの。本当の女の子として凛花をみはじめてきてるんじゃない。……そうおもった」

洋一の目が大きくなり、動きが固まる。

弱い者を虐めるようで気が進まなかったがいった。

「あんたが暴れたあの夜。それに気づくようなことがあったんじゃないの？」

一番いいにくいことをたずねた。

洋一はまだ固まっている。いや、動けなかったのだ。

それを見て玲は、自分の予想以上のことがあったのだと悟り、そこから先の言葉を失った。

頭が次を考えることを拒否している。

無敵なはずの玲も、うつむいて目を閉じてしまった。

玲の質問を受けて、洋一の身体から頭だけが独立してしまったかのように、意思に反してあの夜の出来事を再現しはじめる。

やはり錯覚とかではなく、あの時のシンの行動はそういう意味だったのだ。

玲の話で、あらためてそれを認識させられ、洋一の混乱は頂点に達した。

もう何をどうしたらいいのかすらわからない。

ただわかったことは一つ。自分のせいでシンは姿を消してしまっただのということ。

それに対して何一つ行動してやれないばかりか、考えることすら頭は拒否している。

シンが嫌になったわけではなく、その先を思うことが恐かったのだ。

「どうすりゃいいんだ、おれは……………」

初めて迷った子供のように、おぼつかない声が口から漏れる。

それを聞いて玲が目を開けて洋一を見た。

しかし彼女も同じで、言うべき言葉が見つからない。

重く苦しい沈黙が支配するこの部屋の中で、二人はそれぞれ黒い陰となって黙り込むしかなかった。

その翌日の昼間。この街の空港に雄五郎の姿があった。彼は運転手も付き人も連れず、自らの運転で年代物のロールスロイスファントムで乗り付けると、ロビー出口の脇に立った。

到着を告げるアナウンスが流れ、多くの観光客やビジネスマンが横を通り過ぎる中、雄五郎だけが直立不動で動かないでいる。

なにげなくその姿にちらっと目を向けた者も、スカーフェイスを見てあわてて目を背けると、足早に離れてゆく。

薄く目を開けて、雄五郎はじっとガラス越しに中に視線を注いでいた。

着便が到着してから30分がたち、機内から出てきた客はほとんどいなくなった。

地方都市の空港なので、迎えの人まばらになったロビーは閑散としはじめている。

そこに突然、白い彫像が立った。

そんな錯覚をしてしまうほど、目に突き刺さる美しさをもった――
――ひとりの女性だった。

つばの広い純白の帽子を小粋に頭に乘せ、同色のシルクサテンで出来た、ボディラインにフィットした足首まであるドレスの裾が、優雅になびいている。

彼女はヒールの音も高く、出口に向かって歩みだした。

その姿はまさに西洋の類稀な彫像か絵画のモデル。

「だれあれ？ 女優さん？」

「いや、海外のモデルじゃないか？」

そうささやきながら自分を見つめるロビー全ての人々の視線などと

こ吹く風で、彼女は平均台の上を行くようにまっすぐな足取りで進む。

綺麗な曲線を描く口元が、わずかに微笑んでいた。

その白い天女がロビーのガラス扉をくぐった時、雄五郎は、この愛想のない男のどこにこんな声が隠れていたのかと怪しむほど優しい声音で彼女に呼びかけた。

「おかえりなさいやし、姉さん。　ご足労いただき恐縮です」

自分に向かって深々と腰を割る老極道を、彼女は輝く瞳で見おろした。その目には恐怖も疑問も浮かんではない。

頭を下げたままの雄五郎の頭上に、教会の鐘のように澄んだ笑い声が降りかかった。

やっと姿勢を元に戻したその傷顔を、穴が空くほど彼女は見つめる。何者にも動じない雄五郎が、鳶色の眼を見て逸らしてしまう。

その仕草を見て、彼女は形の良い口元を開いてまた笑うと、雄五郎に話しかけた。

躍動するフルートの声であった。

「ひさしぶりね、雄さん。　でも「あねさん」はないんじゃない？　もう組とはなんの関係もないんだし」

「失礼しました。　ですが俺にとって、一生涯「姉さん」と呼ぶ方はあなたひとりなのでつい……」

虎が照れるような顔をして雄五郎がそういった。

その答えを聞いて、彼女はとても可笑しそうに口に手を当てて上品に笑っていたが、やがてガラリと口調を伝法に変えると、久しぶり

の日本の空を眺めながらつぶやいた。

「まア、せっかくこうして帰ってきたんだ。ここにいるあいだくらいは、あんたにあねさんって呼ばれるのも悪くないねエ」

青空を見る眼が細められ、瞳が女神のそれから、日本刀の冷たく冴えた輝きになる。

そう彼女こそ、旧姓・幽姫。名は凜。

湿った空気を吹き飛ばす、爽やかな風をその身にまとい、洋一の母・凜が帰国したのだった。

光臨 2

雄五郎の運転するファントムで自分のマンションに帰ってきた凜は、中に入るなり、迷わず寝室に向かった。

確かめるように室内を見回してから、ワードローブを勢いよく開いて中を確かめる。

念入りに引き出しまで調べてから、次にドレッサーにいくと、そこにある物を眼でさっと追った。

付き従う雄五郎に背に向けた彼女の表情はよくわからない。

次にキッチンに足を向けると、右手のバーカウンターを一瞥した。

そしてリビングに歩き、西向きの窓のカーテンをさーっと開いて外に目を向けながら、綺麗にとがったおとがいに細い指を当てて、うーんと声をあげた。

何かを考えているらしい。

その後ろに、背筋を棒のようにぴしっと伸ばして、雄五郎がたたずんでいる。

考え込んでいた凜の表情が、雲の隙間から急に太陽が顔を出したように明るいものになった。

そしてすぐ、いたずらっ子の笑みに変わる。

かかとの綺麗なターンを決めて、雄五郎の方へと向き直ると、素敵な笑顔のままこういった。

「なんかおもしろそうなことになってるじゃないっ
「は？」」

意味がわからず、不審な顔をする雄五郎にかまわずまたいう。

「雄さん。どっか別の部屋とってくれる？」

「え、ここじゃないか都合でも悪いんで？」

「ま・・・そんなとこかなア。なんならあんたところで毎晩飲み明かしてもいいんだよ。まアイロが家にいなきやだけどねエ・・・ふふふっ」

優雅から急にまた伝法と、くるくると猫の目のように口調を変えて、凛はからかうように雄五郎の顔をのぞきこむ。

ご冗談を、と頬の傷をゆがめて彼は顔をそむけた。

ふふーんと困る雄五郎を眺めていたが、凛はまた外へと目をやると、青空に負けない透き通った声で笑いだした。

凛が帰国して二日たったある日。

急な連絡を受けて、玲はあわてて待ち合わせの中央公園へ向かっていた。

落ちる陽のかげりで、芝生や道に行く人々がモノクロ写真に見える中、走っている玲の影だけが気ぜわしそうに動いている。

広い公園の西側に並ぶベンチの前まできて息をついた。

等間隔に横一列になったベンチの中央にある席で、ほっそりとしたシルエットがこっちに手を振っているのが見え、また駆け出す。

薄暗かったその姿が段々とはっきりとして、日本人には少ない、彫りの深いインディオのような若い女性が姿をあらわした。

浅黒く精悍な顔立ちで、流れる墨色の髪をそっけなくうなじのあたりでまとめていた。

目の前まできた玲が、肩を波打たせながら、両手を膝について彼女を見上げる。

洗いざらしたワークシャツとふくらはぎの下でカットしたデニム姿の彼女は、スニーカー履きなのにやたらと大きく見える。

玲にはその訳がわかっていた。あの頃とはもう、身にまとうパワ―の大きさが違っているのだ。

「ひさしぶりー、レイ……あ、清水さん！」

「あはは、気つかわなくていいって玲ちゃん。ここならレイラっていつでも大丈夫だよ。ひさしぶり。ありがとね、きてくれて」

笑うと凛々しいものが消えて、人懐っこい顔に変わる。

このアンバランスさと恐るべき声量の歌声で、ミュージックシーンに現れるや否や話題をさらった彼女こそ、REIRAの名で呼ばれる歌手の清水麗羅だった。

じろじろと遠慮のない視線でレイラの姿をもう一度みてから、玲は少し声をひそめる。

「でもレイラさん。変装とかしてなくっていいの？ ほら、サンダラスとかさ」

「大丈夫よ。夜だし。それにアイドルじゃないんだから見つかっ

ても他人の空似でOK！」

ハスキーな声でこたえてから、レイラと玲は目を合わせると、同時に笑った。

その声と立ち姿のせいで、とても23には見えず、もっと年上の大人の女性に玲には思えた。

「やっぱかっこいいなあ……レイラさんって」

ほやーっと呆けた顔で感じたままを素直に玲が口にする、レイラはなにも言わずに微笑んだ。

背後で燃え落ちる夕日を背負い笑うレイラの顔を見て、また玲はうつとりとした表情になる。

レイラがうながして二人は後ろのベンチに座った。

玲がまた顔を向けて話し出す。

「でもびっくりしたよー、もうこっちに来てるって聞いて。ライブは来月の頭の予定だから、てっきり直前に帰ってくるっておもってたし」

「あっちにいと雑音多くってね……それで早めにこっちきちゃった。メンバーには言ってきたけど、事務所にはナイシヨ」

レイラが少しうつむく。

その横顔を見つめながら玲は、いろいろと葛藤があるんだな、と感じた。

「じゃ、実家とかには？」

「うん、帰ってない。ホテルを転々と……かな。これ以上迷惑かけられないし」

「あたしん家泊まればいいよっ。それならバレないっしょ！」

「ありがと。でもね、まだ不安定だから、もう少し一人でいたいたかなあー、って…………ごめんね」

あわてて「ううん、いいって」とこたえながら、いらないことを言ったと後悔した。

——— この人はもう大人なんだ。自分のやりたいことを貫こうとしてるけど、最低限の迷惑で済まそうってちゃんと考えてる

見た目と同じ、力強いレイラの心を感じて、なぜだか玲の胸は震えた。

自分みたいな子供が心配する必要などない。そうおもったが、ついつぶやいてしまった。

「やっぱ思い通りに…………ってわけにはいかないんだね…………」

スニーカーのつま先で地面を蹴る。

レイラが、うんとうなづく声が、ジャリッという土の音に混じって聞こえた。

「なんだかんだいっても、事務所は売る方だからね。冒険はできないみたい」

「レイラさんならロックでもいけるとおもうけどなー」

見えないなにかに抗うように、玲は大きく地面を蹴っ飛ばした。

そんな子供っぽい仕草を見つめながら、「ありがと」そうぼつりとレイラがつぶやく。

けれどすぐ弱気な表情を消すと、暗くなった夜空に顔をあげて、はつきりとした声でいった。

「でも自分で決めなくっちゃ。そうじゃないと歌自体嫌いになりそうだから。それだけはしたくないの。だから今回のライブははっきりとした区切りになると思う」

迷いながらも決めようとするレイラの気持ちを感じて、玲は胸を突かれた気がした。

クールな表面とはまったく逆の、熱くまっすぐな内面を持つこの歌手のことをもっと好きになった。

自分ができることをしてあげたい。

そう強く決意して、玲はライブプランを話した。

動き出したなにかを感じたように、きらめきはじめた星空に、一筋の流れ星が瞬いて飛んだ。

紅椿 1

関西から客人が来ているので挨拶を、と雄五郎から連絡を受けて、洋一は義隆の屋敷にやってきた。こんな用でもなければ絶対にくぐることもない門を抜け、迎えに出ていた雄五郎といっしょに広い庭を横切って歩く。

洋一はここで育っていない。

この屋敷は彼が幼い頃に建てられた、ほぼ義隆と妾たちのための屋敷だった。

中庭に面した座敷間の開け放たれた障子の奥で、大きな紫檀の卓を挟んで向かい合う二人の男の姿が目に入り、洋一は雄五郎の後ろで顔をしかめた。

正面に座る義隆の脂ぎった顔を見てしまったのだ。

こちらに背を向けている男が客なのだろう。

明るい色の長い茶髪が、肩先で少し跳ねている。細身の身体を濃い鼠色のスーツで包んでいた。

めずらしくきちんとチャコールグレイの背広を着込んだ義隆が、庭先から歩んでくる二人に気がついた。

入り口に回ろうとする雄五郎に手で縁側から上がれと示してから、また目の前の男に向き直る。

座敷にあがった洋一は、雄五郎が義隆の左に座るのをみてから、彼の左側に腰を下ろした。あらためて男に目を向ける。

整った顔をした、色白で細面の男前だった。　おそらく自分と変わらぬ年だと思う。

にこやかに目を細めて愛想よく微笑むその顔からは、同業の匂いはこれっぽっちもない。

だが洋一は、この男に剣呑なものを感じた。そしてまだ言葉も交わしていないのに、気に入らない奴だと思う。

いつもならすぐ理由を探るのだが、今の洋一は、全てに対して受身になっていた。

言うなれば、心がくすぶっていたのだ。

「若、紹介しときますわ。　これがわしの息子の洋一です」
男がこちらを見た。　何も言わず、さっきと同じ笑みをつづけている。

「こちらが本家の直若・鬼小島組の二代目、氷室雄也さんじゃ」
義隆が顔を自分に向けてきたのを無視して、洋一はじっと男を見つめる。

「はじめまして、どうぞよろしゅうに」
そう挨拶して、雄也という男は頭を下げた。　張りのあるはつきりとした声だった。

「鬼小島の若は仕事でこっちにいらしての。そんでその手伝いを頼まれたんで、お前らを面通しさしとこおもオて呼び出したんじゃ。その手伝いゆうんがの……」

義隆の話で洋一は半分も聞いていなかった。
ようやく目の前の雄也とかいう男に対する不快感の訳に気がついた

からだ。

笑顔で義隆の方を見ながら雄也は話を聞いているが、その目の動きが読めない。

初めて正面から見た時と変わらず、瞼同士がくつつきそうなくらい細められたままだ。

穏やかな表情に騙されていたが、その細められた目の意味が洋一にもやっとわかったのだ。

——— こいつ・・・目の色や動きを読ませないように、わざと細めてやがる

己の心中を悟らせず、また相手に警戒されないように。 そうしながらじつくりとその人物を確かめているのだ。

ヤクザでは老練な大親分クラスがよく使う目だった。

自分以外の者には決して気を許さない。

ヤクザには多いタイプだが、雄也の目は徹底してそれを意識している事を物語っていた。

気がついてしまうと、ますます気に入らない気分が高まってくる。知らずに相手を睨んでいた洋一の耳に、聞き覚えのある単語が飛び込んできた。

「……………での。そのレイラっちゅう歌手を探しにこられたわけじゃ、鬼小島の若は」

無表情で端座している雄五郎越しに、洋一が義隆を見た。

横顔に、金儲けとは違う欲の色が浮かんでいるようにおもえた。

「相手は大物らしいけん、大事にならんうちにこっそり連れ戻して

くれっちゅう音楽事務所からの依頼なわけじゃ。 洋一、雄五郎。
組のもんを探すの手伝うようにゆうとけ」

仮死状態だった洋一の頭が、軋む音を立てながらも動き出した。

——— めんどうな雰囲気になってきたじゃねえか

そう思った時、めらっと胸に炎が揺らぎ、その赤い火が恥骨の奥に
点火されたのを感じた。

女装もしていないのに疼きはじめたそれは、危険な匂いを嗅ぎ当て
て喜びながら、チクリチクリと甘い棘で洋一を刺しはじめる。

——— こいつは敵だ。 さあ、やっちゃおうよ。 そうすれ
ばもっと……

表情に出さないように苦心しながらも、段々と目つきが妖しくなっ
てくるのがわかる。

その時、雄也の目が自分を見た気がした。
だが、顔は義隆の方を向いたままだった。

「……………それからの。 今度この若の口ぞえでうちらが本部
入りできるかもしれんのじゃ。 まアそれにはよォけ玉がいるんじゃ
けどな。 それでシノギをまた見直さないかん……………」

義隆がさりげなく言った言葉は、疼きに耐える洋一の耳を素通りし
てしまった。

しばしの静寂の後、雄也は胡坐から正座に姿勢を改めると、わずかに
後ろに下がって三指をついた。

「そういうこって、よろしゅうおたのみもうします」

頭を下げる時、右目だけが大きく開き、自分を射抜いたのを洋一は

はつきりと見た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5587y/>

女装天女！

2011年12月20日20時58分発行